

# 博 多 5 3

— 博多遺跡群第71次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第450集



1996

福岡市教育委員会

# 博 多 5 3

－ 博多遺跡群第71次調査の報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第450集



1996

福岡市教育委員会

# 序

博多遺跡群は、JR博多駅より博多湾にかけて広がる弥生時代から中・近世にわたる複合遺跡です。弥生時代以来、大陸文化流入の門戸として栄え、とりわけ中世の國際都市「博多」の繁栄を物語る多種多量の輸入陶磁器が出上しています。今回報告する第71次調査では、中国南部の諸窯で焼かれた陶磁器をはじめ、タイ・ベトナム陶器、北方青磁、高麗・李朝陶磁器などが出上り、「海のシルクロード」の終着点のひとつとしてアジアに開かれた港湾都市の様相を彷彿とさせるものがあります。

博多の都心部では、近年再開発が活発に進められ、それに伴って発掘件数も増加しています。

福岡市教育委員会では、工事によってやむを得ず消滅するこれら埋蔵文化財については記録保存に努めているところであります。

本書は、平成3年度に実施したビル建設工事に伴う第71次調査の記録を収録したものです。本書が埋蔵文化財に対する市民の方々のご理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理報告に至るまで株式会社九州リースサービス、九州建設株式会社をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表します。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

## 例　　言

- 本書は、福岡市教育委員会が1971（平成3）年5月15日から10月6日にかけて発掘調査を実施した、ビル建設に伴う博多遺跡群第71次緊急発掘調査の報告書である。出土した遺物は既大で多種多様にわたっており、予算の関係で報告できなかったものが多数ある。
- 遺構の呼称は記号化し、井戸→SE、土坑→SK、石組遺構その他→SX、溝→SD、ピット→SPとした。なお、遺構番号は第I面から第III面まで各調査面ごとに付し、種類に関係なく連番とした。ただし、SPはSPだけで各調査面ごとに番号を付している。遺構番号は第I面が100番台、第II面が200～300番台、第III面が400～500番台となっている。
- 本書にはできるだけ多くの図を記載したため、限られたページ数では遺物の細かな説明ができないかった。遺物名は実測図の下に細かく表示している。また、土器の壺や皿については底部調整痕を図右下に略して表示している。ヘラ→回転ヘラ切り、糸→回転糸切り、板→板目圧痕のことである。
- 本書に使用した遺構図及び遺構写真は下村 智・菅波正人・上方高弘が行なった。遺物実測は下村 智・田上勇一郎・久住猛雄・上方高弘・吉田香代・茨木浩一・坂本憲昭・佐田裕一が行なった。トレース及び図版作成は下村 智・田上勇一郎・久住猛雄・上方高弘・吉田香代・茨木浩一・坂本憲昭・佐田裕一・茨木式子・酒井香代子・長浦美美子・末次由起恵・鳥飼悦子・室 以佐子・持原良子・福本美智子・野口未幾があたった。遺物写真は下村が撮影し焼き付けを行なった。
- 出土陶磁器の分類及び遺構一覧表作成については、森本朝子・田中克子両氏の多大なご協力とご指導を受けた。出土古式土器の説明は久住猛雄が担当した。
- 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。また、レベル高は御供所小学校に設置した国土地理院高H=3.5298mから移動した。
- 博多遺跡群第71次調査に係る遺物、記録類（図面、写真、スライドなど）は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。
- 第71次調査で川土した、白磁片に付着した緑色ガラスとルツボに付着したガラスの化学分析および鉛同位体比測定については名古屋大学名誉教授 山崎一雄氏・奈良国立文化財研究所 肥塚隆保氏・室蘭工業大学 白幡浩志氏から玉稿を頂いた。
- 本書の執筆・編集は下村が行なった。

遺跡調査番号	9111	遺跡番号	HKT71		
調査地地籍	博多区御供所町235-1番地他			分布地図番号	049-A-1
開発面積	803m <sup>2</sup>	調査対象面積	600m <sup>2</sup>	調査実施面積	600m <sup>2</sup>
調査期間	1991（平成3）年5月15日～10月6日		事前審査番号	1-2-384	

# 本文目次

Iはじめに	
1 調査に至る経過と調査組織	1
2 遺跡の立地と環境	1
II 調査の記録	
概要	3
1 第I面の調査	3
(1) 土坑	4
(2) 配石遺構	6
(3) 井戸	6
(4) 溝	6
(5) 包含層他	6
2 第II面の調査	6
(1) 土坑	6
(2) 配石遺構	10
(3) 井戸	17
(4) 溝	20
(5) 包含層・遺構確認他	24
3 第III面の調査	24
(1) 土坑	33
(2) 壓穴住居址	58
(3) 井戸	58
(4) 溝	63
(5) 遺構確認他	64
4 抽出した出土遺物	64
(1) 天目・黒釉陶器	64
(2) 磁州・タイ・ベトナム陶器	65
(3) 元・明青花磁	65
(4) 石製品	65
(5) 金属製品	77
(6) 玉	78
(7) ガラス製品	78
(8) 銭貨	78
III おわりに	78
博多遺跡群第71次調査で出土した白磁片とそれに付着した 緑色ガラスなどの化学分析および鉛同位体比測定	79
名古屋大学名誉教授 山崎 一雄	
奈良国立文化財研究所 肥塚 隆保	
室蘭工業大学 白幡 浩志	

## 挿 図 目 次

Fig. 1	博多遺跡群位置図 (1/25000) .....	2
Fig. 2	第71次調査地点位置図 (1/4000) .....	2
Fig. 3	第71次調査区周辺図 (1/750) .....	3
Fig. 4	調査区範囲図 (1/500) .....	4
Fig. 5	第I面遺構全体図 (1/150) .....	5
Fig. 6	第I面出土土坑・石組遺構実測図 (1/60) .....	7
Fig. 7	第I面出土土坑・井戸実測図 (1/60) .....	8
Fig. 8	第II面遺構全体図 (1/150) .....	11
Fig. 9	第I・II面出土土坑・井戸実測図 (1/60) .....	12
Fig.10	出土遺物実測図(1) (1/2・1/3) .....	13
Fig.11	出土遺物実測図(2) (1/3) .....	14
Fig.12	第II面出土土坑実測図 (1/60) .....	15
Fig.13	出土遺物実測図(3) (1/3) .....	16
Fig.14	出土遺物実測図(4) (1/6) .....	17
Fig.15	第II面出土土坑実測図 (1/60) .....	18
Fig.16	第II面出土土坑・石組遺構・井戸実測図 (1/60) .....	19
Fig.17	第II面出土井戸実測図 (1/60) .....	20
Fig.18	出土遺物実測図(5) (1/3) .....	21
Fig.19	出土遺物実測図(6) (1/3) .....	22
Fig.20	出土遺物実測図(7) (1/3) .....	23
Fig.21	第III面遺構全体図 (1/150) .....	25
Fig.22	第III面出土土坑実測図 (1/60) .....	26
Fig.23	第III面出土土坑実測図 (1/60) .....	27
Fig.24	出土遺物実測図(8) (1/3) .....	28
Fig.25	出土遺物実測図(9) (1/3) .....	29
Fig.26	出土遺物実測図(10) (1/3・1/4) .....	30
Fig.27	第III面出土土坑実測図 (1/60) .....	31
Fig.28	第III面出土土坑・住居址・井戸実測図 (1/60) .....	32
Fig.29	第III面出土井戸実測図 (1/60) .....	33
Fig.30	第III面出土井戸実測図 (1/60) .....	34
Fig.31	第III面出土井戸実測図 (1/60) .....	35
Fig.32	出土遺物実測図(11) (1/3・1/4) .....	37
Fig.33	出土遺物実測図(12) (1/3・1/4) .....	38
Fig.34	出土遺物実測図(13) (1/3・1/4) .....	39
Fig.35	出土遺物実測図(14) (1/3) .....	40
Fig.36	出土遺物実測図(15) (1/3) .....	41
Fig.37	出土遺物実測図(16) (1/3・1/4) .....	42

Fig.38	出土遺物実測図① (1/3・1/4) .....	43
Fig.39	出土遺物実測図② (1/3・1/4) .....	44
Fig.40	出土遺物実測図③ (1/3) .....	45
Fig.41	出土遺物実測図④ (1/3) .....	46
Fig.42	出土遺物実測図⑤ (1/2・1/3) .....	47

## 本文写真目次

PH. 1	出土遺物写真(1) .....	48	PH. 8	出土元染・明染付磁器(1) .....	56
PH. 2	出土遺物写真(2) .....	49	PH. 9	出土明染付磁器(2) .....	57
PH. 3	出土遺物写真(3) .....	50	PH.10	出土縄文・タイ・ベトナム陶器・古式土器(注内) .....	58
PH. 4	出土天目(1) .....	52	PH.11	出土右製品(1) .....	59
PH. 5	出土天目(2) .....	53	PH.12	出土石製品(2) .....	60
PIL. 6	出土天目(3) .....	54	PH.13	出土石製品(3)・金属製品(1) .....	61
PH. 7	出土天目(4)・黒釉陶器 .....	55	PH.14	出土金属製品(2)・玉・ガラス製品 .....	62

## 図版目次

PL. 1 (1)	第I面遺構出土状況(南から) (2) SK102出土状況(東から)
PL. 2 (1)	SK103出土状況(南から) (2) SK104出土状況(南から)
PL. 3 (1)	SK107出土状況(南から) (2) SK127出土状況(南から)
PL. 4 (1)	SK144出土状況(東から) (2) SK149出土状況(南西から)
PL. 5 (1)	SK160出土状況(北から) (2) SK161~163出土状況(東から)
PL. 6 (1)	SK167出土状況(西から) (2) SK173出土状況(西から)
PL. 7 (1)	SK177出土状況(西から) (2) SX148出土状況(南東から)
PL. 8 (1)	SE114出土状況(西から) (2) SE131出土状況(西から)
PL. 9 (1)	SE140出土状況(西から) (2) SE180出土状況(西から)
PL.10 (1)	SE181出土状況(東から) (2) 第II面遺構出土状況全景(南から)
PL.11 (1)	SK203出土状況(東から) (2) SK203疊堆積状況(東から)

- PL.12 (1) SK204出土状況（西から）  
(2) SK210出土状況（北から）
- PL.13 (1) SK212出土状況（北から）  
(2) SK214出土状況（東から）
- PL.14 (1) SK221出土状況（西から）  
(2) SK222出土状況（南から）
- PL.15 (1) SK250無頸壺出土状況（南から）  
(2) SK229 出土状況（西から）
- PL.16 (1) SK232出土状況（南から）  
(2) SK239～242・244出土状況（南から）
- PL.17 (1) SK245・246出土状況（南から）  
(2) SK249出土状況（北から）
- PL.18 (1) SK252出土状況（北から）  
(2) SK252疊堆積状況（北から）
- PL.19 (1) SK253出土状況（東から）  
(2) SK260出土状況（西から）
- PL.20 (1) SK266出土状況（西から）  
(2) SK272 出土状況（北から）
- PL.21 (1) SK277・278出土状況（西から）  
(2) SK279出土状況（南から）
- PL.22 (1) SK285・286出土状況（西から）  
(2) SK292出土状況（西から）
- PL.23 (1) SK295出土状況（南から）  
(2) SK304出土状況（東から）
- PL.24 (1) SK300・323・324出土状況（北から）  
(2) SK326出土状況（北から）
- PL.25 (1) SK332出土状況（東から）  
(2) SK227出土状況（西から）
- PL.26 (1) SX318出土状況（南から）  
(2) SX318疊堆積状況（北から）
- PL.27 (1) SX228出土状況（西から）  
(2) 1号人骨（土壙墓）出土状況（西から）
- PL.28 (1) SE201出土状況（北から）  
(2) SE225出土状況（西から）
- PL.29 (1) SD209出土状況（北から）  
(2) SE226出土状況（北から）
- PL.30 (1) SE113・154・325出土状況（南から）  
(2) SD319出土状況（東から）
- PL.31 (1) SD320出土状況（東から）  
(2) SD237出土状況（南から）

- PL.32 (1) 第Ⅲ面遺構出土状況全景（北から）
- PL.33 (1) 第Ⅲ面A・B-5・6区遺構出土状況全景（西から）  
(2) SE402出土状況（南から）
- PL.34 (1) SK403出土状況（東から）  
(2) SK404出土状況（北から）
- PL.35 (1) SK405・527出土状況（西から）  
(2) SK409出土状況（西から）
- PL.36 (1) SK410出土状況（南から）  
(2) SK413出土状況（北から）
- PL.37 (1) SK414・415出土状況（北から）  
(2) SE416出土状況（東から）
- PL.38 (1) SK435出土状況（北から）  
(2) SK439出土状況（西から）
- PL.39 (1) SK442出土状況（南から）  
(2) SK452出土状況（東から）
- PL.40 (1) SK467出土状況（東から）  
(2) SK473出土状況（南から）
- PL.41 (1) SK475出土状況（北から）  
(2) SK478出土状況（南から）
- PL.42 (1) SK486出土状況（北から）  
(2) SK454・492出土状況（南から）
- PL.43 (1) SK510出土状況（北から）  
(2) SE530出土状況（北から）
- PL.44 (1) SC501出土状況（北から）  
(2) SC501遺物出土状況（北から）
- PL.45 (1) SE432・433出土状況（西から）  
(2) SE138・447出土状況（東から）
- PL.46 (1) SE493出土状況（東から）  
(2) SE500出土状況（北から）
- PL.47 (1) SD430出土状況（西から）  
(2) SD430出土状況（北から）
- PL.48 (1) 2号人骨出土状況（南から）  
(2) 調査区から聖福寺を望む（西から）

## 表 目 次

Tab. 1 出土錢貨一覽表 .....	66
Tab. 2 出土遺構一覽表 .....	67

# I はじめに

## 1 調査に至る経過と調査組織

1990(平成2)年3月22日付で、福岡市博多区博多駅前4丁目1-1の株式会社九州リースサービスから、博多区御供所町235-1番他における事務所ビル建設に伴う埋蔵文化財の事前調査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、博多遺跡群の範囲内であり、これまで、南側及び西側の隣接地で埋蔵文化財の本調査を実施していることから、連続した遺跡の広がりが存在すると判断した。試掘調査は3月27日に実施し、2本のトレンチから古代、中世、近世と各時期の造構及び包含層が保存良好な状態で検出された。出土遺物も非常に多いことが確認された。そこで、試掘調査の結果をふまえ、申請者とビル建設によって破壊される遺構の取り扱いについて協議を重ね、建築工事によって破壊される部分を対象に本調査を実施することで合意に達した。本調査は株式会社九州リースサービスの受託調査として実施した。調査組織は以下のとおりである。

**調査委託**：株式会社九州リースサービス 取締役社長 元石昭善

**調査受託**：福岡市 福岡市長 桑原敬一

**調査主体**：福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

**調査総括**：埋蔵文化財課長 折尾 学 埋蔵文化財第2係長 塩屋勝利

**調査庶務**：埋蔵文化財第1係長 飛高憲雄 吉田麻由美

**調査担当**：埋蔵文化財第2係 占留秀敏 佐藤一郎(試掘調査) 下村 智(本調査)

**調査補助**：上方高弘

**調査作業**：人神嘉彦、高田茂、徳永栄彦、仲田忠孝、山部増人、的野治郎、柴戸浩司、田川 剛、西谷 彰、永川カツエ、江嶋光子、川上すぎえ、黒瀬千鶴、嶋 ヒサ子、菅野シゲ、長浦美美了、永利咲江、永松トミ子、本多ナツ子、宮原つや子、松井良子、村田トモヨ、安高久子、山下智子、山村スミ子、山本后代、吉田香代、安野良、副出則子、松下節子、吉村知了、緒方さゆり

**整理作業**：茨木式子、酒井香代子、長浦英美子、末次由紀恵、鳥飼悦子、室 以佐子、持原良子

なお、調査期間中、西谷 正(九州大学)、亀井明徳(専修大学)、石山 獉(福岡県)、大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館)、陳 文平(上海博物館)、インドネシア考古館館長、高 広仁(中国社会科学院考古研究所副所長)、邵 望平(同考古研究所研究員)、以上、各氏のご来訪を受けてご教示、ご指導を賜わった。

## 2 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、福岡平野の中央部を北西に流れる那珂川と江戸時代に開闢された石堂川とにはさまれた砂丘上に位置している。砂丘は3列あり、内陸側の2列を「博多浜」、海側の1列を「息浜」と呼んでいる。調査地点は、「博多浜」に属し、榮西が鎌倉時代初めに建てた聖福寺の門前にあたる。標高は6m前後である。「博多浜」ではこれまでに、弥生時代から中世・近世にかけての集落地や墓地が確認され、数多くの造構・遺物が出土している。

I はじめに

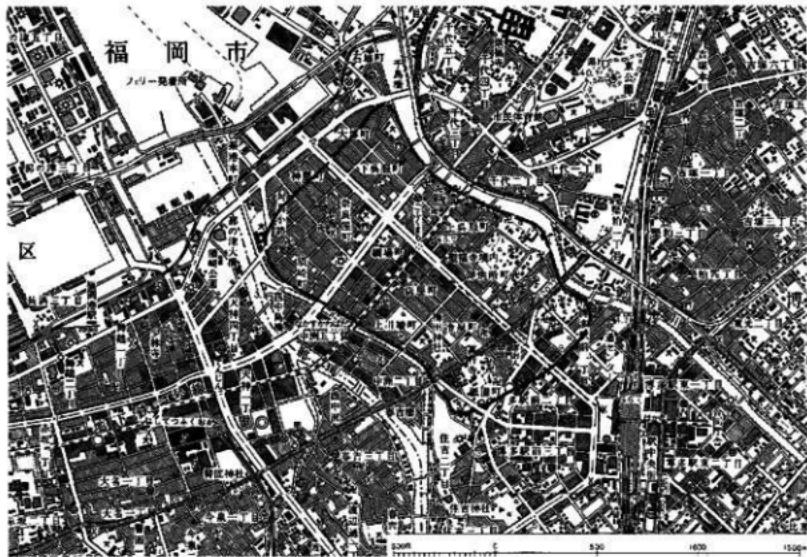


Fig. 1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)



Fig. 2 第71次調査地点位置図 (1/4,000)

## II 調査の記録

### 概要

調査地点は、発掘調査前に旧建物の解体、基礎除去が終了し、-0.75mまで近現代の搅乱層がスキ取られていたので、発掘調査は現地表面から-0.75m下がった面から開始した。試掘調査では、GL-75~125cmは近現代の造成上と近世包含層、GL-75~157cmは14~16世紀の遺構と包含層、GL157~200cmは12~13世紀の遺構と包含層、GL-190~230cmは9~11世紀の遺構及び包含層と報告され、最下層には古墳時代の遺物が出土する可能性が指摘されている。試掘では鍵層となる明確な焼土層や硬化面は検出されていなかったので、遺構の時期と深さを目安に、任意に3面の調査面を設定して調査を行なった。

### 1 第I面の調査

搅乱層除去後の面を第I面としたが、部分的に深い搅乱が残存していた。標高は4.7~5.0m前後である。検出遺構は、土坑73基、石組遺構1基、井戸9基、溝1条、ピット多數である。主に15~16世紀から近世にかけての遺構群である。近世の遺構の中にも古い時代の遺物が多数みられ、明代の染付磁器が目立つ。近世の遺物は今回の報告では取り上げていないが、古伊万里、古唐津をはじめ17~18世紀から幕末までの主に肥前系を中心とする陶磁器が多量に出土している。また、瀬戸系及び備前系、

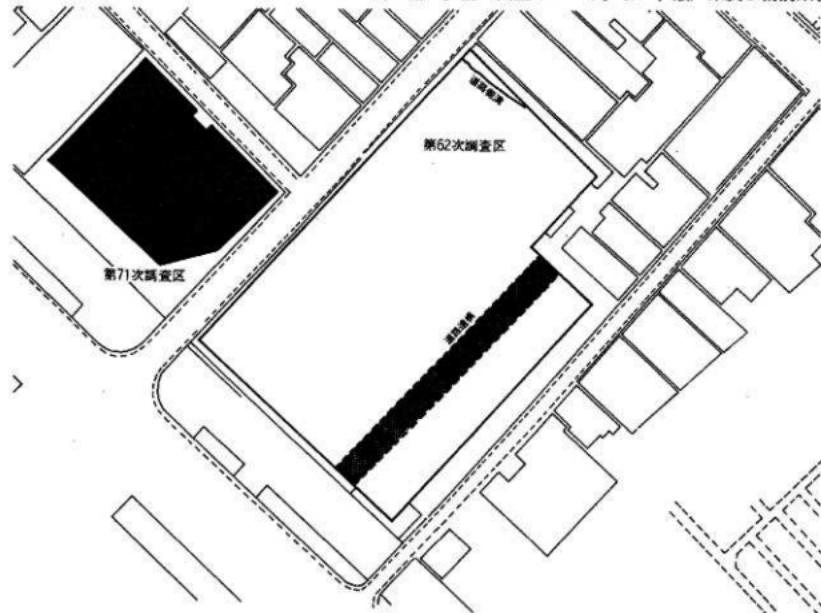


Fig. 3 第71次調査区周辺図 (1/750)

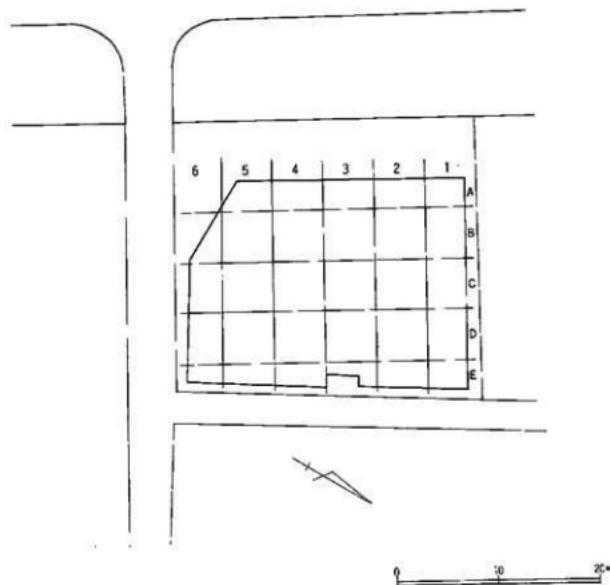


Fig. 4 調査区範囲図 (1/500)

在地の陶磁器なども数多く出土している。その他、下がり藤、タチバナ、巴文の軒丸瓦、唐草文の軒平瓦などの出土も多い。近世瓦では銘や刻印のあるものがかなりある。土製品では土鍤や土鈴・土製人形及び人形の外型などがみられる。明代の青磁、青花磁などは多数出土しているが殆ど図化できていない。抽出した遺物の頁に一部写真だけ示している。高麗・李朝陶磁器の出土も多い。高麗系の陶磁器はⅡ面・Ⅲ面と古い時期からの出土も多いが、Ⅰ面では、象嵌で龍文を施した瓶、見込みに如意頭文を施した碗や双鶴文をあしらった碗などが川土している。李朝青磁は見込みに目跡の付いた灰緑色釉のものが多い。

## (1) 上坑 (Fig. 6 ~ 9, PL. 1 ~ 10)

73基出土している。15~16世紀のものと近世のものがある。一部東側で検出した上坑は13~14世紀に上るものがある。それぞれの規模については別表に譲るが、プランは方形、長方形、円形、楕円形、不定形などがある。SK103は略方形を呈し、一部礫組みが残っている。坑内からは伊万里の染付磁器がまとまって出土し、中には焼き継ぎが施されているものがある。その中で蓋物の内側に「裏草」と朱書したものが2例出土している。Fig.10-1は鉄製の庖丁であろう。全長28.0cm、最大幅3.5cm、最大厚0.5cmを測る。鍔がかなり進んでいる。SK160~163は調査区南東側で検出された浅い土坑群である。それぞれ陥落龜の甲羅が數点づつ出土している。ごく一部四肢骨がみられたが、殆ど甲羅だけ投入されていた。甲羅には火の痕などは確認されていない。出土遺物が少なく時期を決め難いが中世末から近世初頭のものであろう。SK173は土坑の中に礫組みが残っている。ただし、半分以上は調査区外に広がっており全体の様子は分らない。坑内に礫が投入されていた土坑は他にも幾つか存在する。

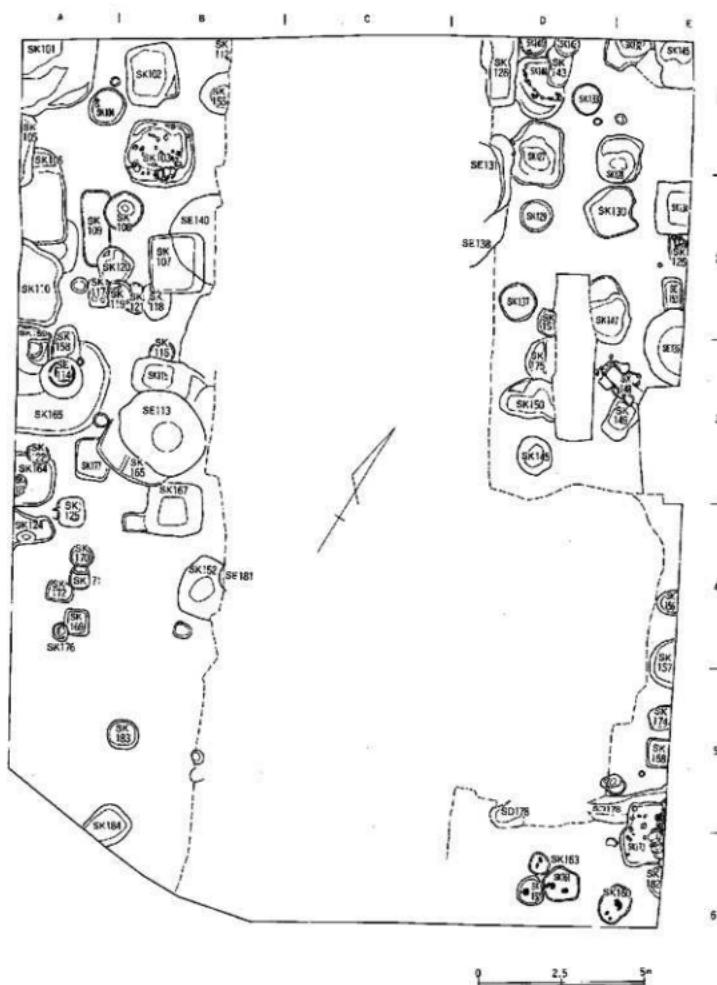


Fig. 5 第I面造構全体図 (1/150)

## II 調査の記録

Fig.10-2はSK159から出土した土師皿である。口径が9.2cmあり、時期的に古いものが混入したものである。

### (2) 配石遺構 (Fig. 6、PL. 7)

SX148はD・E-3区で出土した石組遺構である。内法は長さ1.2m以上、幅0.4mで1段ないし2段の石積みが残っている。東側はシートパイル打ち込みで壊されているので全長は分からぬ。石積みは継長の礫を面を揃えて並べ、小口は平たい石を立てている。出土遺物は肥前系の染付碗や七輪などが出土しているので近世のものであろう。

### (3) 井戸 (Fig. 7・9、PL. 8~10)

9基の井戸が出土している。素掘りの井戸と瓦組の井戸がある。調査区北側にまとまって出土しており割と等間隔に並んでいる。並んでいる軸線は現在の町割りと平行し、それぞれの町家に井戸が存在したものであろう。第I面で出土した井戸は全て近世である。SE140は上面径2.92×3.9m、深さ4.43mを測る。井側は瓦組みで1段9枚で構成されている。径0.65mで、調査では6段残存しているのを確認した。井戸内からは肥前系陶磁器、瓦器、瓦質の擂鉢、明染付磁器などが出土している。SE131は素掘りの井戸で、瓦組の井側が抜かれているのかも知れない。上面径2.72×2.25m、深さは2.99mである。肥前系陶器擂鉢、染付碗、皿、明の染付皿、七輪、鐵滓などが出土している。SE131は、C・D-1・2区で検出した井戸で、上面径2.88×3.25m、深さ3.34mを測り、井側径は0.8m前後になるものと考えられる。瓦は殆ど抜かれており一部分だけ残存しているのみであった。出土遺物は肥前系陶磁器、巴文軒丸瓦、天日碗などが出土している。Fig.10-3はSE131から出土した土師皿である。口径8.7~8.9cm、器高1.1cmを測り、底面は糸切りで板目圧痕がみられる。時期的に古い土師皿が混入したものである。

### (4) 溝

D・E-5区で検出した。確認長5.40m、幅0.8m、深さ0.65mで、断面は「U」字形を呈する。旧建物の基礎擾乱によって一部壊されているが、さらに東側に延びると考えられる。龍泉窯の青磁碗、備前焼の甕、糸切りの土師壺・皿、瓦などが出土している。15~16世紀のものであろう。

### (5) 包含層 (PH.5~13)

博多遺跡群では遺構の上に遺構が重層的に切り合って重なっており、遺構として掘り上げなかった部分も遺構の一部である可能性が高い。I面の調査が終了してII面の遺構を確認するため人力で掘り下げたが、その部分は包含層として各区ごとに取り上げた。皮肉にもこの包含層にいいものが沢山含まれている場合が多い。I面の包含層からは、人目碗、タイ・ベトナム陶器、磁州窯陶器、石鍋、硯、青銅製品、磨製石斧などが出土している。

## 2 第II面の調査

第II面は標高4.3m前後で、近世の遺構も残っているが、13~14世紀が中心で15~16世紀の遺構もかなり存在する。部分的に深く掘り下げている所は12世紀代の遺構が確認されている。遺構は土坑が129基、井戸9基、溝6条、石組遺構3基が出土している。

### (1) 土坑 (Fig.9~16、18~20、PL.10~25)

出土した土坑は、方形、長方形、円形、楕円形、不定形などのプランがある。時期的には12世紀代から近世まで含まれる。SK203は長方形の土坑に礫が充満している。断面図には一部しか表示していないが坑底まで礫が詰っている。建物の基礎の一部であろうか。SK232は略円形土坑で土師壺・皿がまとまって出土している。SK239・245・264・252・253・262・276・324にはそれぞれ坑内に礫が配

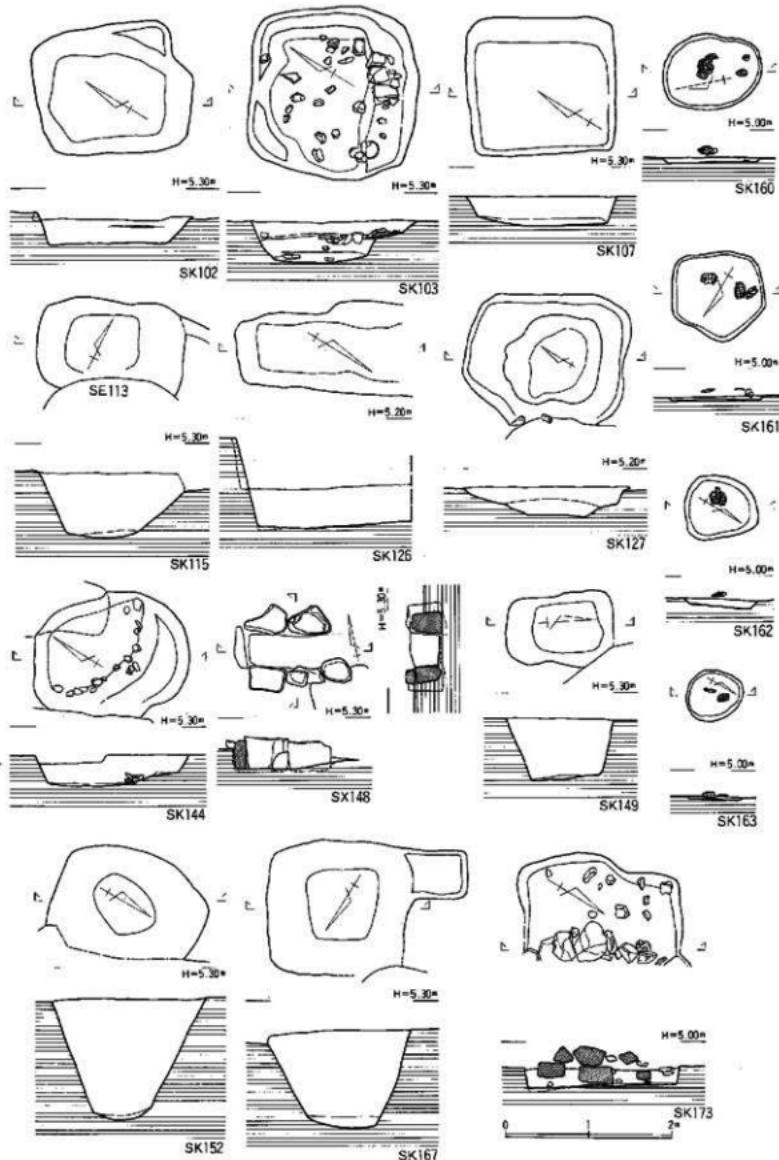


Fig. 6 第I面出土土坑・石組遺構実測図 (1/60)

II 調査の記録

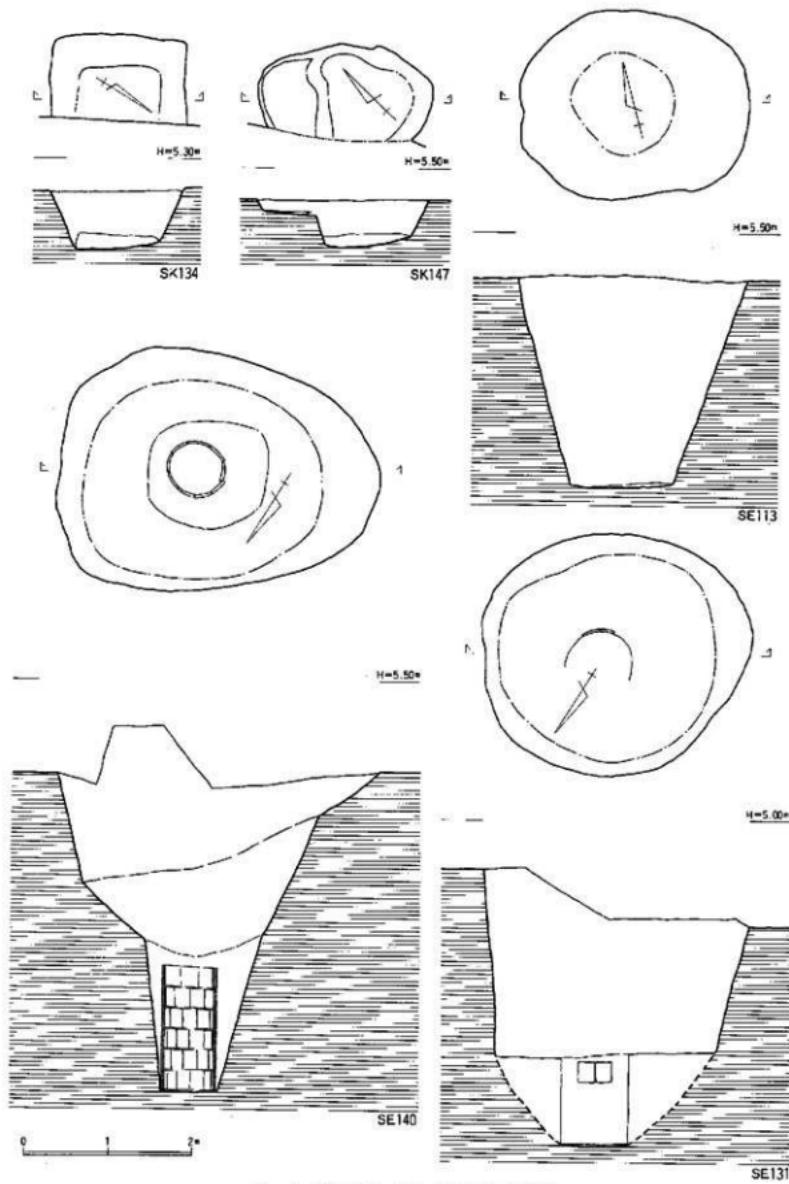


Fig. 7 第1面出土土坑・井戸実測図 (1/60)

されている。

土坑内からは多くの遺物が出土しているが、図化している遺物は必ずしも土坑の時期を示しているものばかりではない。時期的に新しい土坑でも、古い時期の遺物が数多く混入している場合があるからである。ただし、一括で土師器などがまとまって出土している場合は時期の決め手として重要である。Fig.10-4~8はSK202から出土した土師器の壺・皿である。壺の口径は13.4~15.0cmを測りややバラつきがある。底面は全て糸切りである。12世紀末から13世紀前半にかけてのものであろう。9はSK203、10~12はSK204から出土した土師壺・皿である。13は龍泉窯系の青磁盤である。見込みに印花文を施す。16は土師皿である。底面はヘラ切り離して時期的に古い。13・16はSK210出土。14・15はSK218から出土した龍泉の青磁碗である。15は蓮弁に横描文を施す。17~20はSK221から出土した土師皿と天目碗である。天目は国产のものである。21~24、Fig.11-25はSK222から出土した土師壺・皿である。遺構は近世であるが土師器は15世紀代のものであろう。26~29はSK224から出土した土師皿、30は白磁平底皿である。31はSK230から出土した白磁皿、32は土師壺である。33~36はSK231から出土した土師壺・皿である。37~49はSK231からまとめて出土した土師壺・皿である。13世紀後半代のものであろう。50はSK234から出土した同安窯系の青磁碗、51はSK235から出土した白磁碗、52はSK238から出土した白磁皿である。52の見込みには印花文が施される。53~55はSK242から出土した土師壺である。底面は糸切りで板目压痕が付く。56は同遺構から出土した白磁皿である。57はSK243から出土した龍泉窯の青磁碗である。Fig.13-58~74はSK245から出土した土師壺・皿である。全て糸切りで、底面に板目压痕の付くものがある。13世紀後半代のものであろう。75・76はSK243から出土した土師皿と白磁碗である。77~83はSK246から出土した土師壺・皿である。すべて底面は糸切りである。84・85はSK247から出土した白磁皿、86はSK250から出土した青磁皿である。86には片切彫りで魚文を施す。SK250からは後述するがラッキヨウ型の無頸壺が埋められた状態で完形で出土している。87はSK252から出土した同安窯系の青磁皿である。88~92はSK253から出土したもので、88は青磁碗、89は青磁皿、90・91は土師壺、92は白磁碗である。93はSK255から出土した青磁の双魚文皿である。94はSK250から出土した完形の無頸壺である。口径16.0cm、胴径50.8cm、底径12.8cm、器高52.0~53.7cmを測り、胎土はややザラついた明褐色を呈する。釉は胎土の上に鉄サビを流しがけした上に黄緑灰色~淡黄灰色釉を流しがけする。釉のかけ残しが斑点状に多くみられる。内面はくすんだ灰緑色を呈する。口縁部にはほぼ五角形の輪のかけ残しが認められる。焼成は良好で、胴上部に胎土目跡が17箇所認められる。Fig.18-95はSK258から出土した土師皿である。底面は糸切りである。96~101はSK260から出土した遺物である。96は土師皿、97は白磁の高台付皿である。98~100は白磁碗で、98は見込みが輪ハゲになっている。口径16cm、器高5.5cmを測る。99は口径17.4cm、器高6.2cm、底径5.7cmである。100は高台が高く口径16.2cm、底径6.6cm、器高7.9cmを測る。101は同安窯系の青磁碗である。内面に横書きのジグザグ文、外面に片切り彫りで沈線を施す。102はSK262から出土した白磁輪ハゲ碗である。103~106はSK264から出土した遺物である。103・104は土師皿で底面は糸切りである。105は白磁平底皿、106は白磁高台付皿である。底面に墨書が認められる。107~111はSK269から出土した土師壺・皿である。底面は糸切りである。13~14世紀代のものであろう。112はSK276から出土した土師皿である。114・115はSK279から出土した土師皿と壺である。遺構は新しいので記入品であろう。113はSK280から出土した白磁平底皿である。116~118はSK279から出土した白磁皿と龍泉窯系の青磁碗である。116は白磁皿で口径12.7cm、底径4.9cm、器高3.15cmを測る。見込みに花文を彫り込む。117は口縁部が輪花に切り込まれている青磁碗である。区画内に雲文が施されるタイプのものである。118は内面に蓮花折枝文を施す龍泉窯系青磁碗である。口径17.1cm、底

径7.1cm、器高7.3cmを測る。119～121はSK283から出土した土師皿と白磁小壺である。土師皿は復元口径9.0と9.6cmである。底面は糸切りで板目圧痕が付く。白磁小壺は口径2.6cm、底径3.3cm、胴径5.8cm、器高3.8cmを測る。土師皿及び白磁小壺は遺構の時期よりも古いものである。122・123はSK292から出土した土師皿と土師壺である。皿は糸切り板目圧痕の底部調整を施し、123の壺は底面ヘラ切りである。外面には指頭圧痕が残り、内面にはミガキをかける。遺構の時期は13世紀と考えられるが、土師壺はこれよりも古いタイプである。124～Fig.19-126はSK297から出土した遺物である。124は底面糸切りの土師皿である。口径9.4cm、125は同安窯系の青磁皿である。内面に飾描文を施す。126は龍泉窯系の青磁碗である。内面に雲文を施す。127はSK303から出土した底面糸切りの土師皿である。口径11.2cmで15世紀代に属するものであろう。128はSK306から出土した白磁高台付皿で、129はSK307から出土した白磁の平底皿である。130は底面糸切り板目圧痕の土師壺、131は底面糸切りの土師壺である。131は近世に属するものであろう。132はSK313から出土した白磁碗、133はSK314から出土した白磁である。133の見込みは釉がカキ取られ輪ハゲになっている。134はSK315から出土した白磁碗である。外面に粗いケズリ痕が残っている。135はSK321から出土した土師壺、136はSK323から出土した土師壺である。共に15世紀代のものであろう。137～139はSK330から出土した白磁碗である。137は輪ハゲ碗、138は外面に縦線文を施す白磁碗、139は口縁部が玉縁状になる白磁碗である『博多出土陶磁分類表』によれば137はIX類、138はV類、139はIV類に相当しよう。137の底面には墨書きがみられる。これらは12世紀代のものであろう。140はSK332から出土した白磁平底皿である。141～143はSK331から出土した白磁皿と碗である。141は内面に白堆線がみられ、底面には墨書きが施される。142は退化した玉縁状の口縁を有する白磁碗である。143は内面に曲線文を施した白磁皿である。ともに12世紀代のものであろう。144～160はSK334からまとまって出土した遺物である。144は白磁高台付皿、145は褐釉の陶器皿か蓋、146～153は土師皿である。上師皿は底面糸切りで板目圧痕が付く。口径は大体9.2cm前後である。154は底面ヘラ切りの丸底を呈する土師壺である。155～159は底面糸切りで、板目圧痕のある土師壺である。口径は全て15cmを越え最も口径の大きくなる時期のものである。12世紀後半位に位置づけられよう。160は瓦器椀である。内外面にヘラ磨きを施す。Fig.20-161～164はSK336から出土した天目碗と白磁碗である。161は白縁天目で、口径11.8cm、胎土は灰白色で細かい白点がはいる。釉はくすんだ黒茶褐色釉で、口縁内面は釉を搔き取り白釉を施す。白縁天目は他の遺構からも出土している。162は口径12.6cm、底径4.0cm、器高4.5～4.8cmを測り、胎土は淡黄灰色でややザラつき細かい赤色粒子を含む。内面は光沢のある黒釉、外面はやや褐色味を帯びており釉ダレが認められる。口径端部は茶褐色を呈し、釉が薄くなる。169も168とよく似た天目碗である。口径は12.2cm、底径3.8cm、器高4.6cmを測る。胎土は灰色～橙褐色でややザラつき細かい赤色粒子が認められる。釉は光沢のある黒釉で、やや薄い部分は茶味を帯びる。口径端部は茶褐色を呈する。小型の小さな土坑であるが天目がまとまって出土しており注目される。164は同時に出土した小さな玉縁口縁の白磁碗である。口径15.4cm、底径5.9cm、器高6.2cmを測る。11世紀後半から12世紀代のものであろう。165はSK337から出土した土師皿である。12世紀代に属するものであろう。166はSK339から出土した土師壺である。口径16cm、底面はヘラ切りで板目圧痕がつく。167・168はSK341から出土した土師皿と白磁碗である。168は口径17.6cm、器高6.65cmを測る。169はSK340から出土した底面糸切りの土師壺である。口径は12.0cm、底径8.2cm、器高2.9cmを測る。

## (2) 配石遺構 (Fig. 9・16・20, PL.14)

配石遺構は1基出土している。SX221は配石遺構というよりも石組遺構という方が正しいであろう。大部分は未調査区に広がっているが、方形ないし長方形を呈すると考えられる。石積みは2～3段残

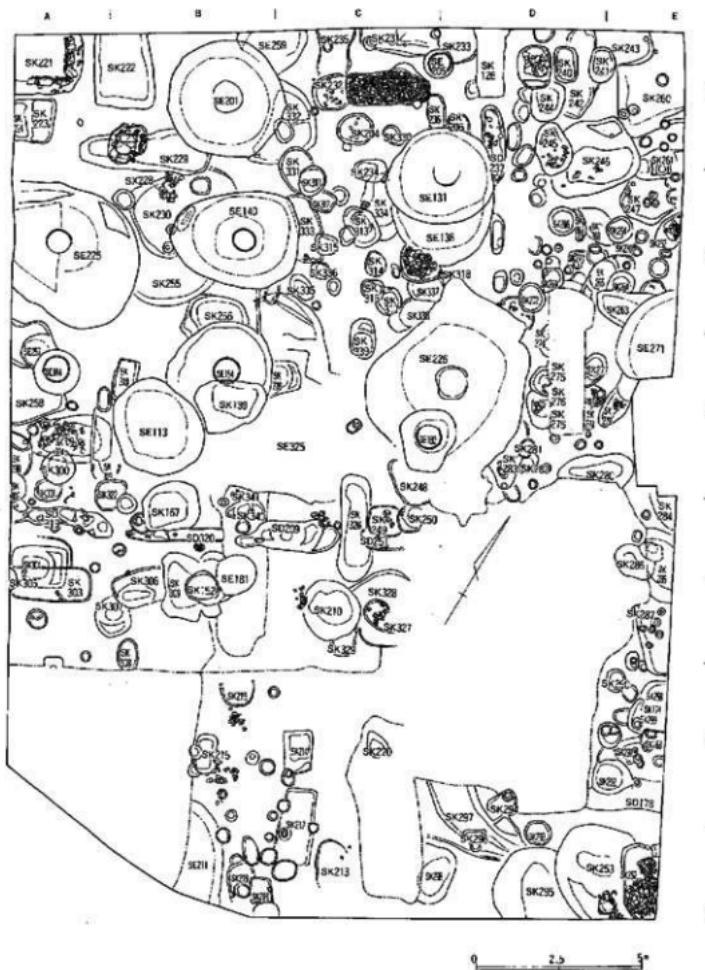


Fig. 8 第Ⅱ面遺構全体図 (1/150)

II 調査の記録

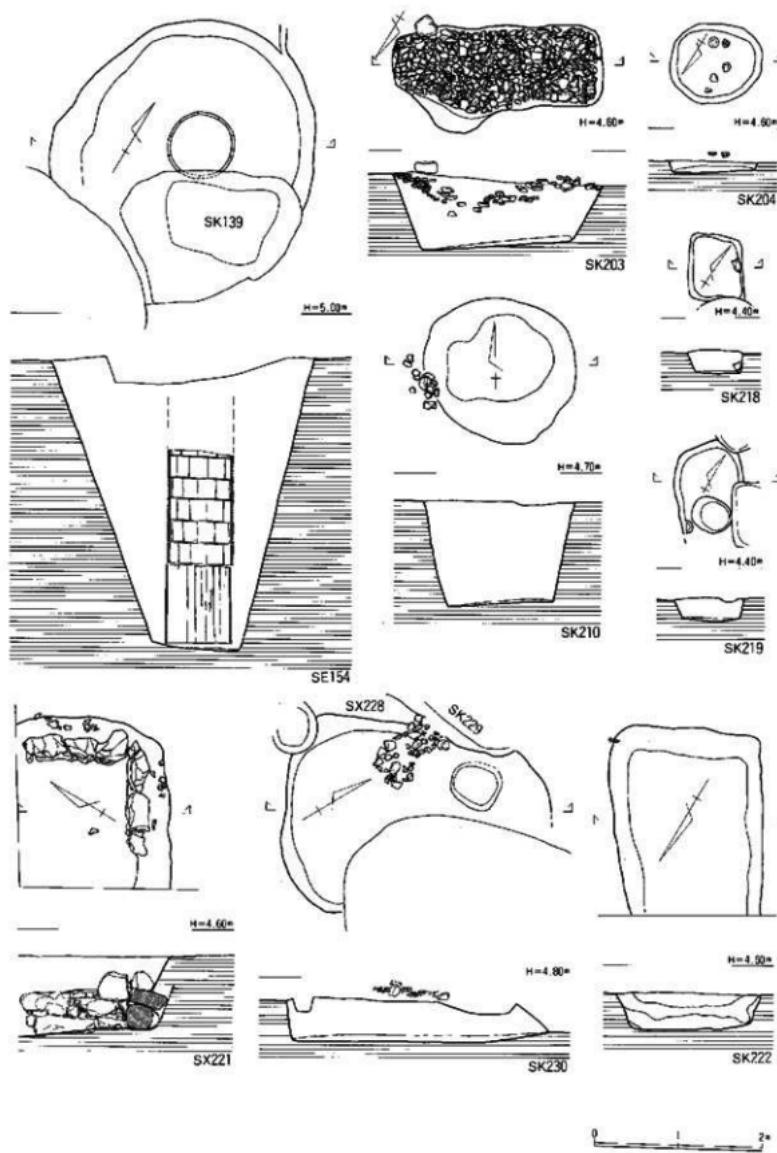


Fig. 9 第I・II面出土土坑・井戸実測図 (1/60)

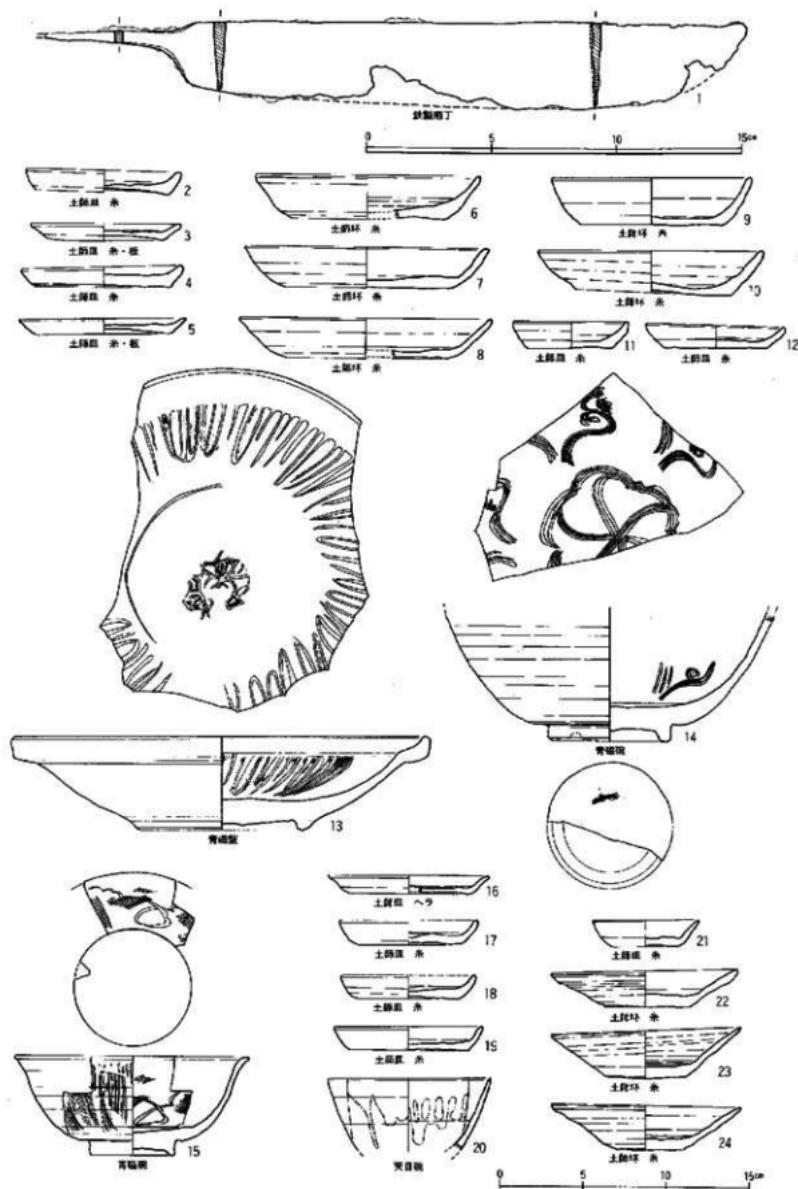


Fig. 10 出土遺物実測図(1) (1/2 + 1/3)

1 : SK303 2 : SK169 3 : SK181 4 ~ 8 : SK202 9 : SK203 10 ~ 12 : SK204 13 : SK210 14 ~ 15 : SK216  
 16 : SK210 17 ~ 20 : SK221 21 ~ 24 : SK222

II 調査の記録

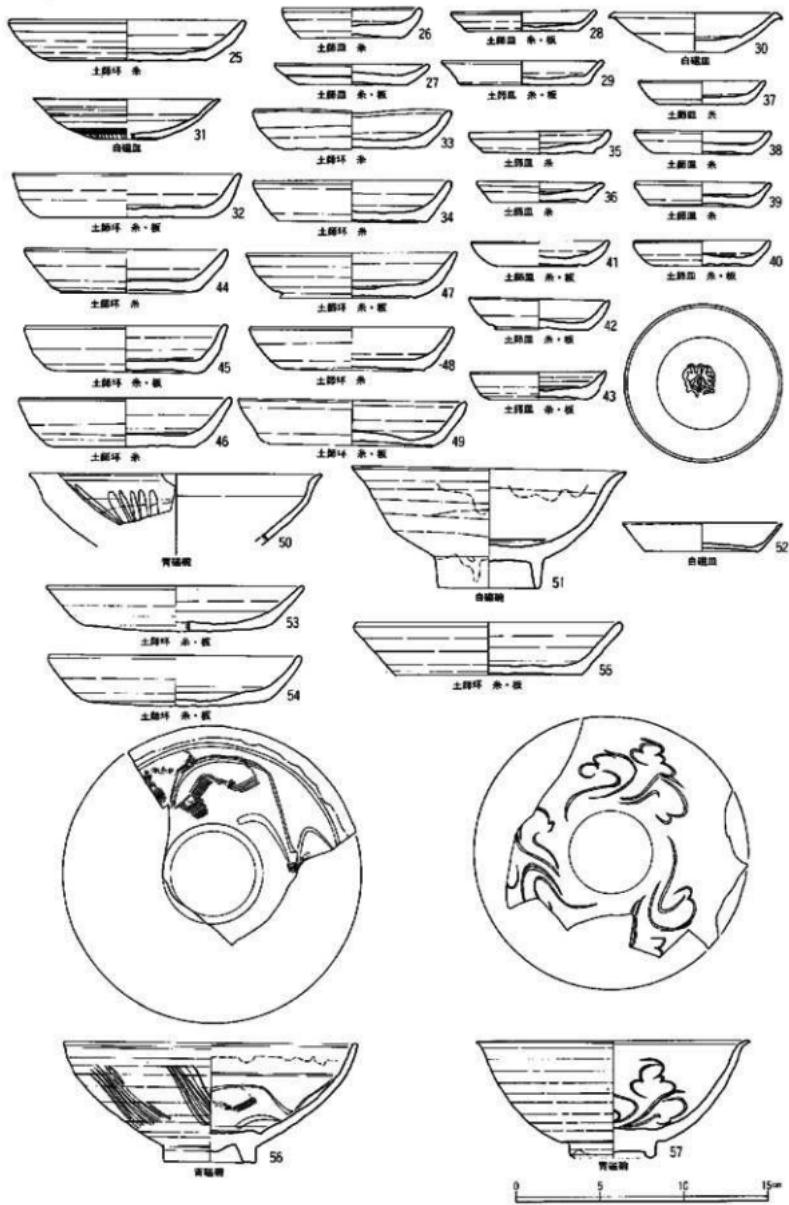


Fig. 11 出土遺物実測図(2) (1/3)

25~30 : SK234 31~32 : SK230 33~36 : SK231 37~40 : SK232 50 : SK234  
51 : SK235 52 : SK238 53~58 : SK242 57 : SK243

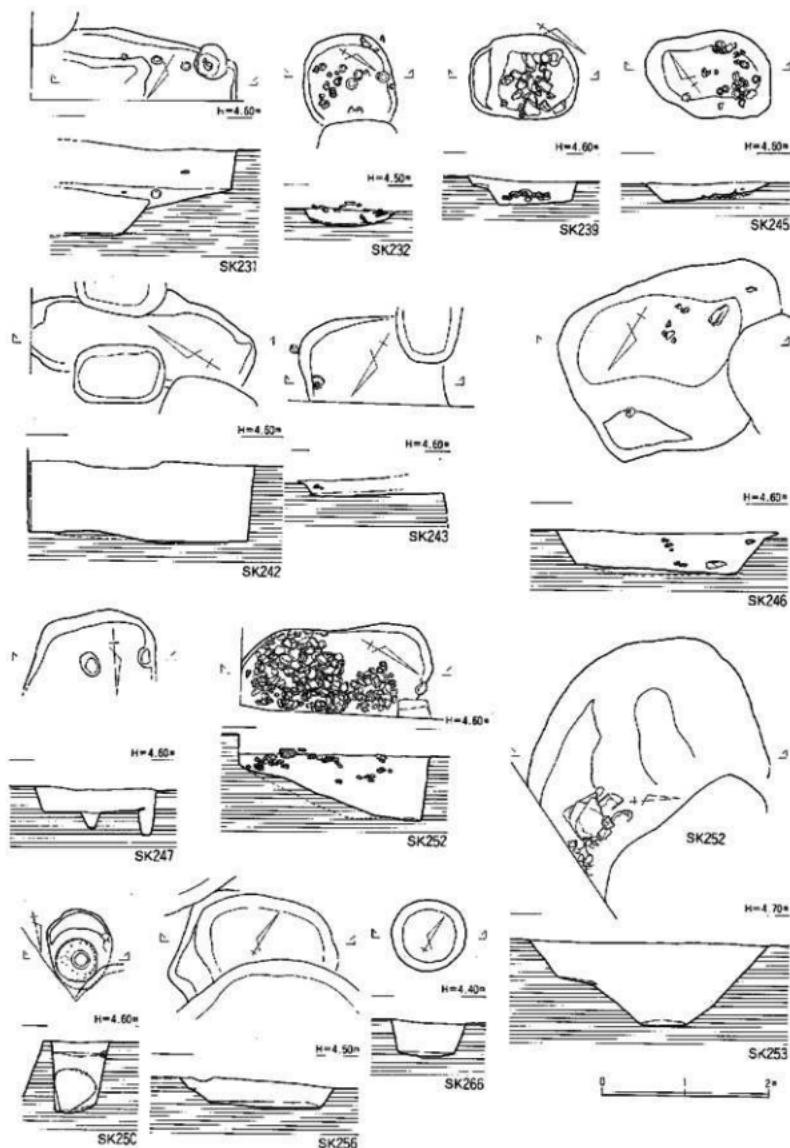


Fig. 12 第II面出土土坑実測図 (1/60)

II 調査の記録

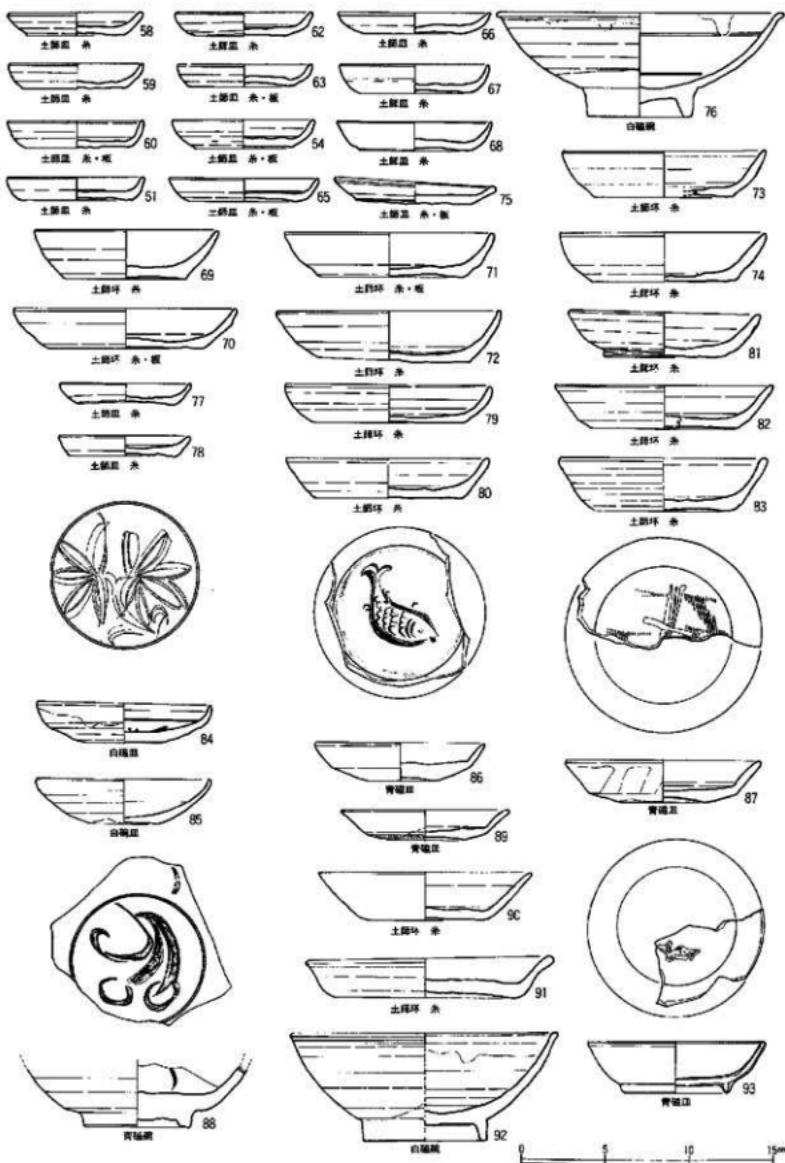


Fig. 13 出土遺物実測図(3) (1/3)

58~74 : SK245 75~76 : SK243 77~83 : SK246 84~85 : SK247 86 : SK260 87 : SK262 88~92 : SK263 93 : SK256

存している。遺構内からは多量の肥前系染付磁器、肥前系青磁鉢、白磁、香炉、刷毛目皿、花瓶、擂鉢、小皿、刷毛目鉢、大甕、黄釉皿などが出土している。近世に属する遺構である。SX227は大きな礫を礫石状に据え、周りに拳大の礫を配する遺構である。龍泉窯系の青磁碗II類、糸切りの十師坏、白磁碗などが出土している。14世紀代に属するものであろう。SX228はSK230の上部で検出された配石遺構で、長さ0.9m、幅0.6mの範囲内に5~15cm大の礫を配したものである。出土遺物は口ハゲの白磁皿、青磁碗、褐釉陶器、土師坏・皿などである。Fig.20-171~174はSX228から出土した土師坏・皿である。十師坏は口径8.8cmと8.9cmで、底面は糸切りである。坏は口径12.8cm、器高2.95cmを測り、底面は糸切りで板目压痕が付く。14世紀代に属するものであろう。SX318は略方形の土坑に礫を敷きつめたもので、遺物の出土は極端に少なく時期を特定することができなかった。

### (3) 井戸 (Fig.16・17・20・29、PL.28~30)

第II面で調査した井戸は合計9基である。近世に属するものが多い。SE201は素掘りの井戸である。瓦組み井戸の瓦が抜かれた可能性がある。近世のもので、肥前陶磁器、青磁碗・皿、白磁碗・皿、中国陶器などが出土している。SE205は近世の瓦組井戸である。井側の瓦列は7段残存していた。肥前陶磁器、青磁碗、白磁碗などが出土している。SE211は円形の井戸で一部しか掘り下げていない。15世紀代に属すると考えられる。SE225は近世の瓦組井戸である。肥前陶磁器や明染付磁器、土師器などが出土している。Fig.20-177~179はSE225から出土した土師坏・皿である。179は底部ヘラ切りの丸底坏である。内面はミガキが施されている。時期的に古いものが多く混入していた。SE226は中世の井戸と考えられていたが、一部肥前系陶磁器が含まれているので近世のものであろう。円形の素掘り井戸で木桶が使用されていた可能性がある。Fig.20-180~187はSE226から出土した土師坏・皿と黒褐釉盃である。土師器坏・皿は13~14世紀に属するものである。183は黒褐釉盃である。土は温みのある白色で微細な褐点が少々観察される。釉は褐味のある黒色で、表面は二次火熱を受け荒れて灰色がかり光沢が無くなっている。見込みを輪状に釉切りし、高い高台が付くとみられる。磁州窯の産であろう。SE257は円形素掘りの井戸である。壁際だったので一部しか掘り下げていない。近世の井戸で、肥前系磁器、明染付皿などが出土している。

Fig.20-188は出土した土師皿である。SE259は褐釉壺、瓦器碗、瓦器皿、土師坏・皿などが出土しており13世紀代まで遡る可能性がある。但し、壁際だったので途中までしか掘り下げていない。Fig.20-189は出土した瓦器皿である。SE271も近世に属する井戸であるが壁際だったので一部しか掘り下げていない。Fig.20-190は出土した土

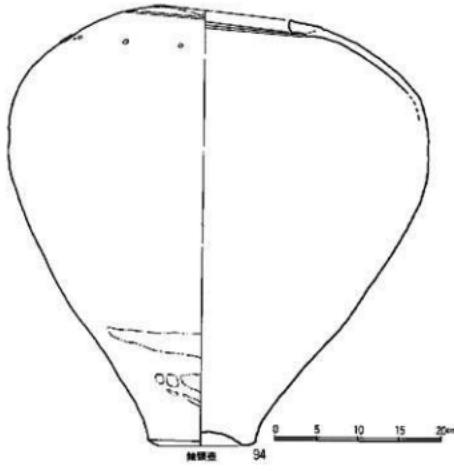


Fig. 14 出土遺物実測図(4) (1/6)  
94 : SK259

II 調査の記録

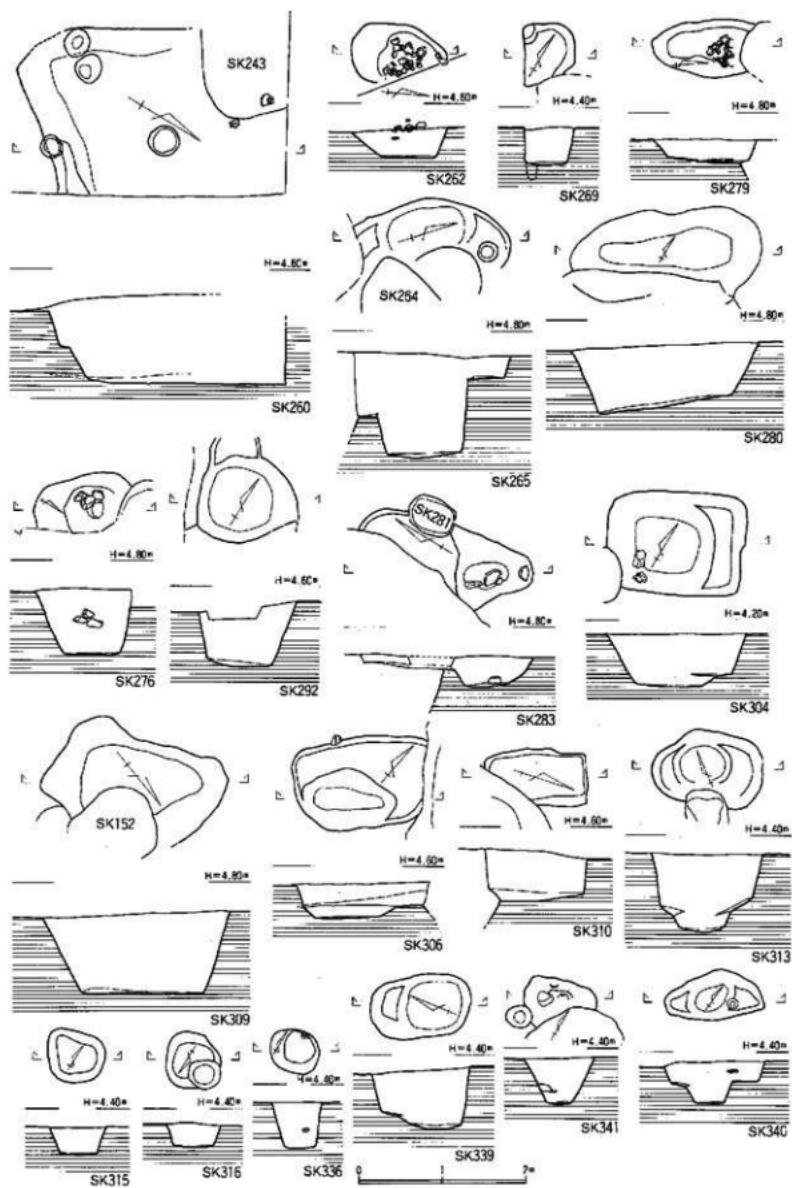


Fig. 15 第Ⅱ面出土土坑実測図 (1/60)

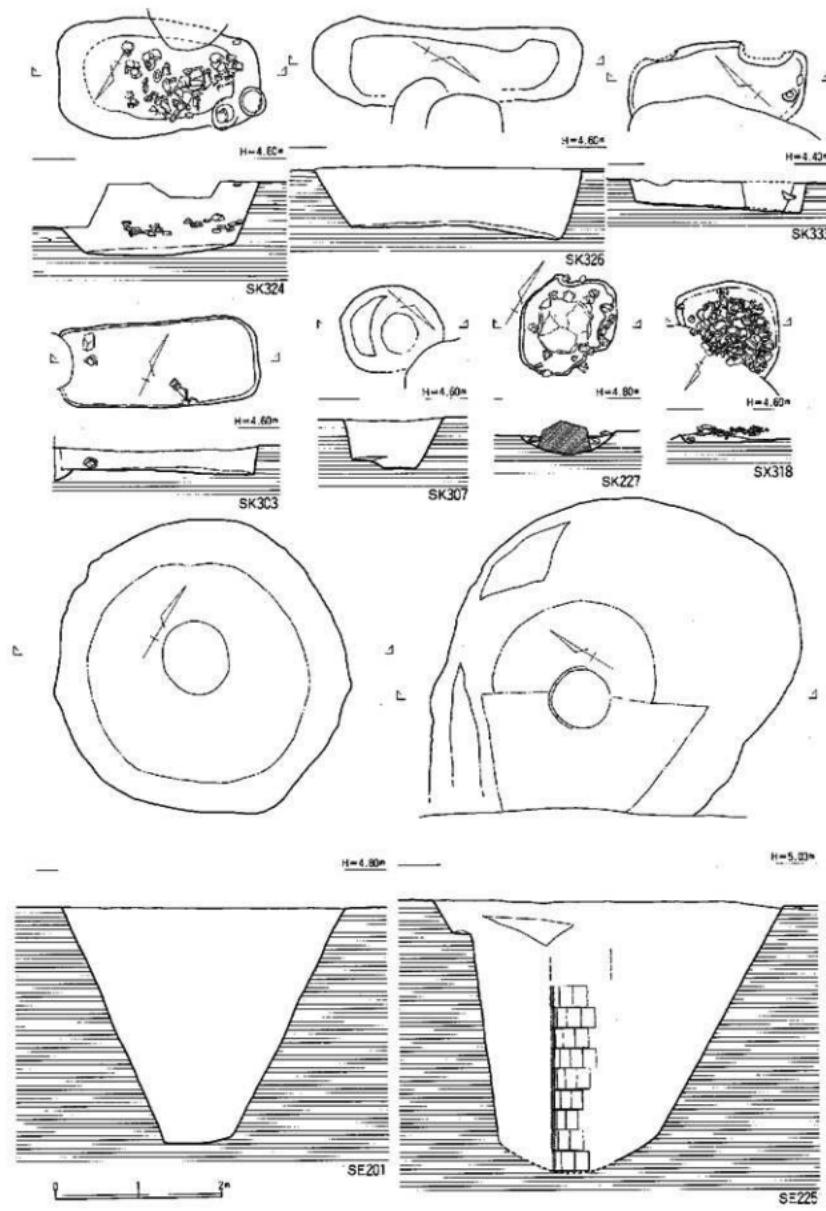


Fig. 16 第II面出土土坑・石組遺構・井戸実測図 (1/60)

## II 調査の記録

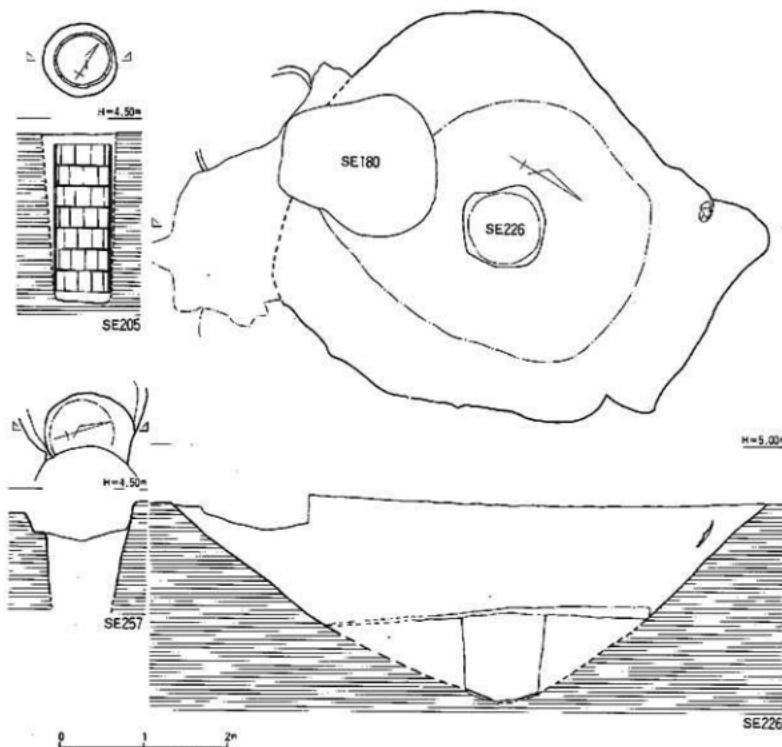


Fig. 17 第II面出土井戸実測図 (1/60)

筋皿である。小型で近世に属するものであろう。SE325は大形の掘り方を持つ素掘りの井戸である。井筒の壁が直に立つのもともと木桶が使用されていたものであろう。Fig.20-192~197は同井戸から出土した土師壺・皿、瓦器碗である。十筋皿は底面がヘラ切り、糸切りと二者存在するが、土師壺は口径が小さく新しくなる可能性があるので、14世紀後半代から15世紀代の時期を考えておきたい。瓦器碗は残りが良く、古い時期の造構を壊して井戸が作られ、混入したものであろうか。

### (4) 溝 (Fig.20, PL.29 ~31)

溝は6条検出している。これらの溝は連続して長く伸びる溝ではなくて、途切れ途切れでそれぞれ同一方向に連なっている。溝底は凹凸やビット状の深い穴が存在するなど水を流すような用途の溝ではない。板屏か何らかの区画の溝と考えられる。方向は現在の町割りとほぼ並行している。南北方向の溝がSD237、SD238、東西方向の溝がSD319、SD320、SD209、SD251である。出土遺物からみるとそれぞれの溝は時期的にバラつきがあるが、出土遺物からだけでは博多遺跡群の場合時期が決め難い。因に、出土遺物からこれらの溝の時期を見てみると、SD237が14~15世紀、SD238が14世紀、SD251は不明、SD209が15~16世紀、SD320が12世紀、SD319が不明となっている。SD320からは古

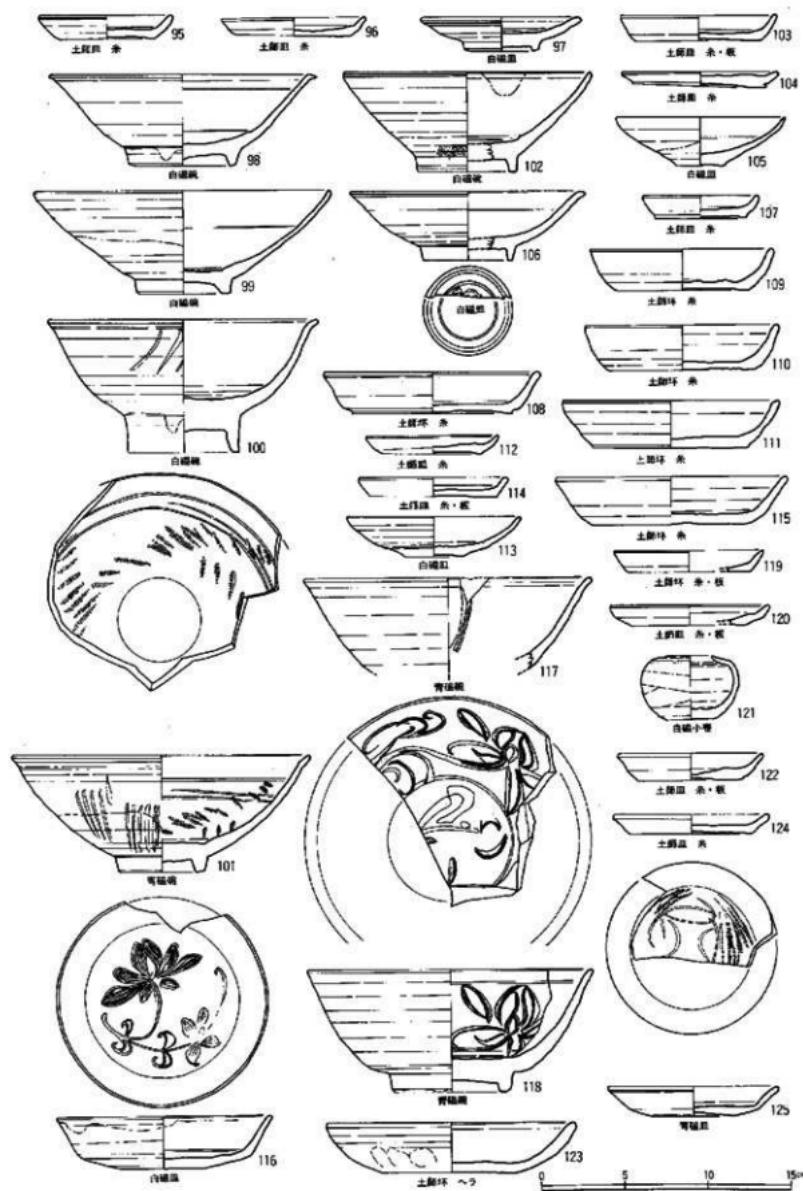


Fig. 18 出土遺物実測図(5) (1/3)

95 : SK308 96~101 : SK260 102 : SK302 103 : SK304 104~106 : SK265 107~111 : SK265 112 : SK276  
113 : SK280 114~118 : SK279 119~121 : SK283 122~123 : SK298 124~125 : SK237

II 調査の記録

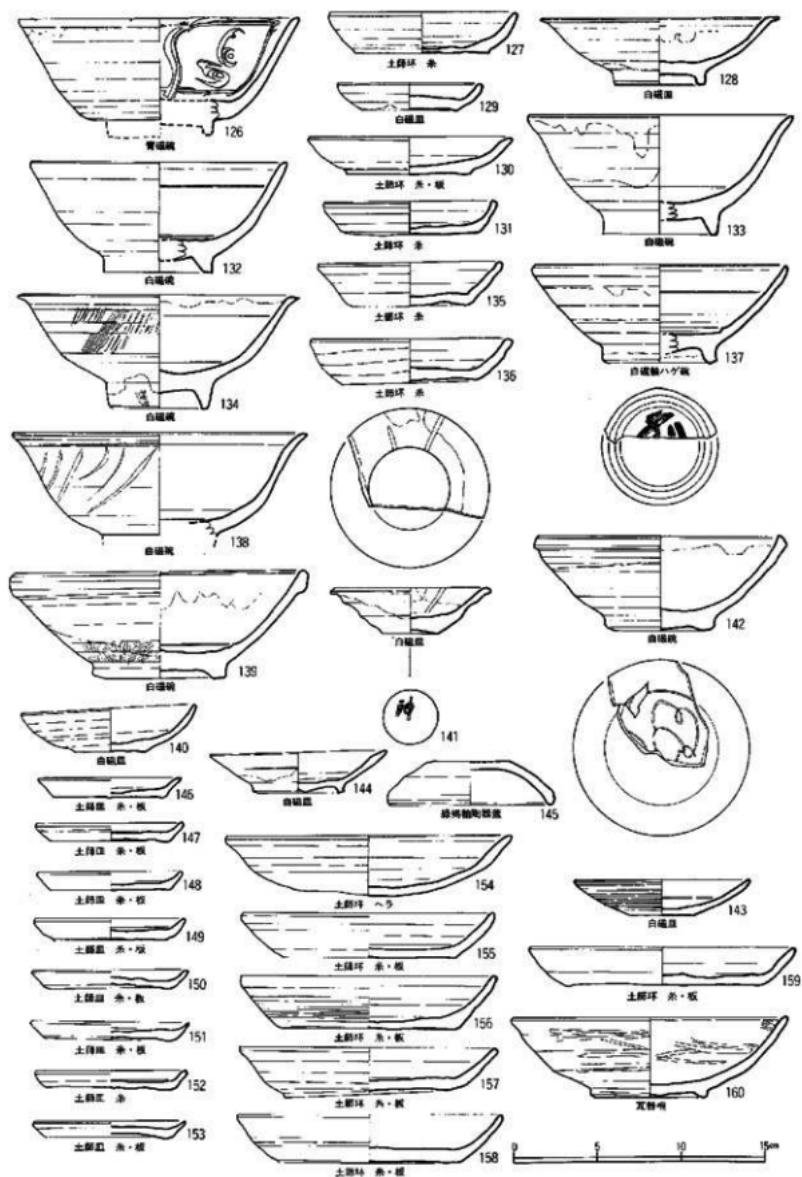
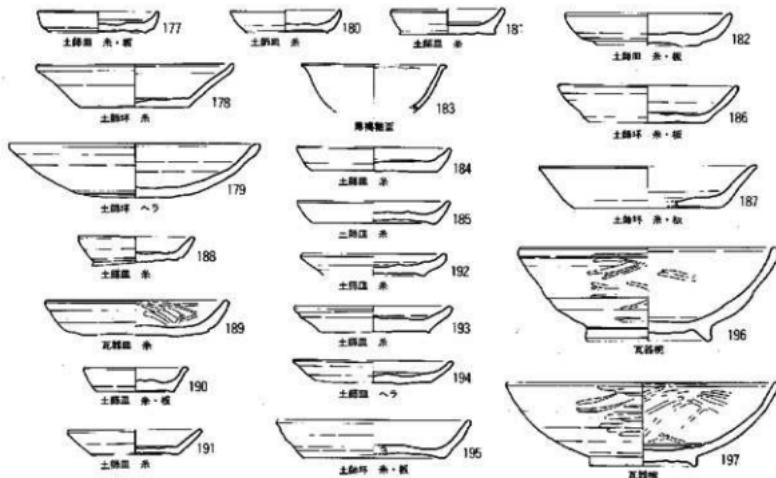
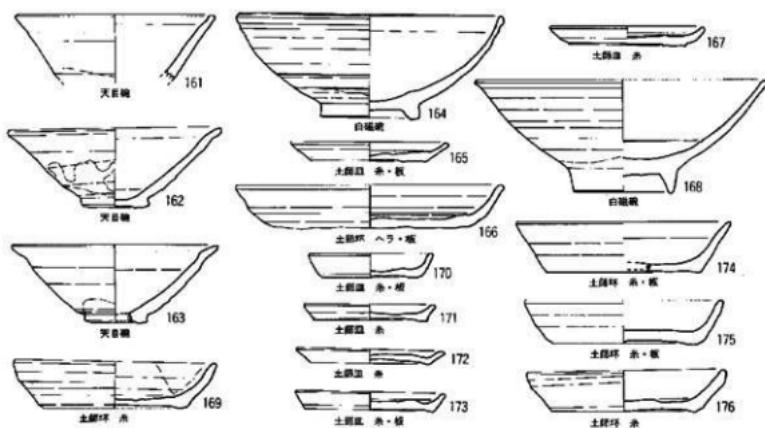


Fig. 19 出土遺物実測図(6) (1/3)

126 : SK297 127 : SK303 128 : SK306 129 : SK307 130 : SK309 131 : SK310 132 : SK313 133 : SK314  
134 : SK315 135 : SK321 136 : SK323 137~139 : SK330 140 : SK332 141~143 : SK381 144~160 : SK334



— 5 — 10 — 15cm

Fig. 20 出土遺物実測図(7) (1/3)

161～164 : SK356 165 : SK337 166 : SK329 167～168 : SK341 169 : SK340 170～171 : SD209 172～174 : SK328  
175～176 : SD237 177～179 : SD225 180～187 : SD226 188 : SD287 189 : SD269 190 : SD271 191～197 : SK325

いものだけしか出土していないし、SD209はやや新しい遺物が出土している。最も多く出土する遺物は14～15世紀代が中心となるので、これらの溝の年代もほぼ同時期と考えていいのではなかろうか。Fig.20～175・176はSD237から出土した土師壺である。口径は11.8cmと11.9cm、器高は2.6cmと2.5cmである。底面は糸切りで、175には板目圧痕が残っている。時期的には14世紀後半から15世紀代にかけてのものであろう。

#### (5) 包含層・遺構確認他 (Fig.39～41)

第II面の調査終了後、人力で第III面の調査面まで各区ごとに掘り下げた際、出土した遺物をII面下包含層として取り上げた。包含層といつても未調査の遺構の一部を含んでいるため遺物は多量に出土した。その一部を取り上げておきたい。

Fig.39～455～459は白磁高台付皿、460～469は白磁平底皿である。456～459は内面見込みを輪状に施ハギする。459は底面に花押の墨書が施されている。460は内面に櫛描文と線描文で花文を施している。467は片切彫で、468は櫛描文でそれぞれ花文を描いている。469は白堆線で内面を区画している。470は型押しの白磁碗である。Fig.40～479～484は白磁碗である。479は小さな玉縁口縁、480・481は縁の大きな玉縁口縁となる。483は輪ハゲの白磁碗である。484は内面に櫛描文を施す。485青白磁の刻花唐子文鉢である。口径19.8cm、底径5.7cm、器高6.1cmを測る。胎土は灰白色で透明な光沢のある灰白色の釉がかかる。内面には上下に向い合った唐子を巡って唐草の文様が施されている。景德鎮の製品と思われる。486は連江窯の青磁碗である。口径13.4cm。Fig.41～490は白磁器の蓋である。外径8.7cm、歯径5.6cmを測る。胎土は灰白色磁質で黒い微粒子が少し混入し、小孔がある。釉は灰青味の半透明釉で釉中に気泡を含む。氷裂はない。表面に青いガラスの塊りが溶け落ちたように付着している。このガラスについては専門的な立場で分析をお願いした結果を収録している。491は銹茶碗蓋である。復元口径13.6cm、胎土は細かく混じりなしで、掲味のある白色を呈し半磁化している。釉はミルクチョコレート色で、マット、灰をふる。灰をかぶった部分は釉中の鉄分がうすくなり黒～オリーブ色になる。492は黒褐釉蓋である。復元口径14.6cm、底径3.6cm、復元高3.9cmを測る。胎土はかすかにピンクがかった白で細かい。焼成は良好で堅く焼けている。釉は漆黒で一部にさび色が出る。内面には透明か青磁釉で堆塗を施し区割している。底面に墨書がある。493～494は内白大口碗である。493は復元口径12cm、胎土は掲味のある灰白色で半磁質、細かい黒点がある。釉は外面から内の口まで黒褐釉をかける。釉層は薄く、ピンホールが多く、マットな感じを与える。内面にはうすく灰味のある透明釉をかける。光沢があり氷裂がはいる。494の胎土は掲味のある灰白色で半磁質、釉は外面から口縁内面までは黒褐釉で釉層はうすい。内面下部はオリーブ味の灰白色半透明釉である。495～497は青磁皿、498は白磁碗、499は青磁碗蓮弁文碗である。完形で1号人骨の副葬品である。500は瓦器皿、501は青磁碗である。503は褐釉と緑釉をかけた二彩盤である。内面に魚文を線描きし、底面に墨書がある。504は弥生後期の高環脚である。Fig.42～503は青磁盤である。509は緑褐釉の四耳壺、510は須恵質の捏鉢、511は備前の擂鉢である。

### 3 第III面の調査

第III面は標高3.9m前後で、大部分は黄白色の砂層が基盤となって遺構が掘り込まれている。遺構は12世紀を中心としそれぞれ前後する時期にわたり、古くは古墳時代・古代から、新しくは15～16世紀まで存在する。ただし、新しい時期の遺構は、第III面になると極端に少なくなってくる。古い遺構では古式土師器の時期まで遡れるが、黄白色砂層上面で弥生中期の甕などが出土しているので、遺跡の開始は弥生中期まで遡ることができる。第III面で出土した遺構は、土坑118基、井戸15基、溝3条な

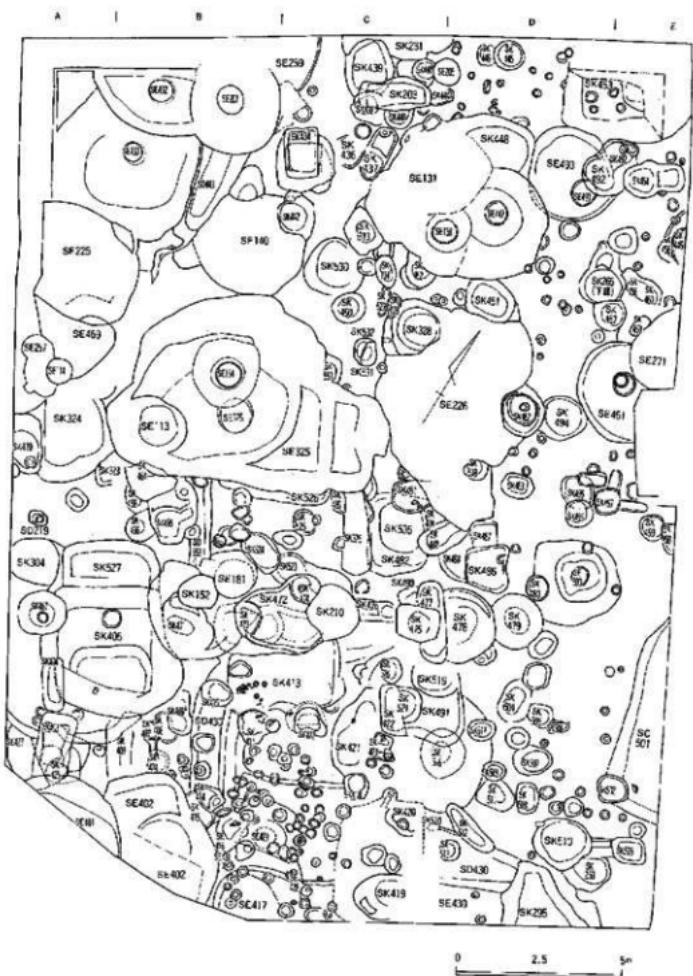


Fig. 21 第二面遺構全体図 (1/150)

II 調査の記録

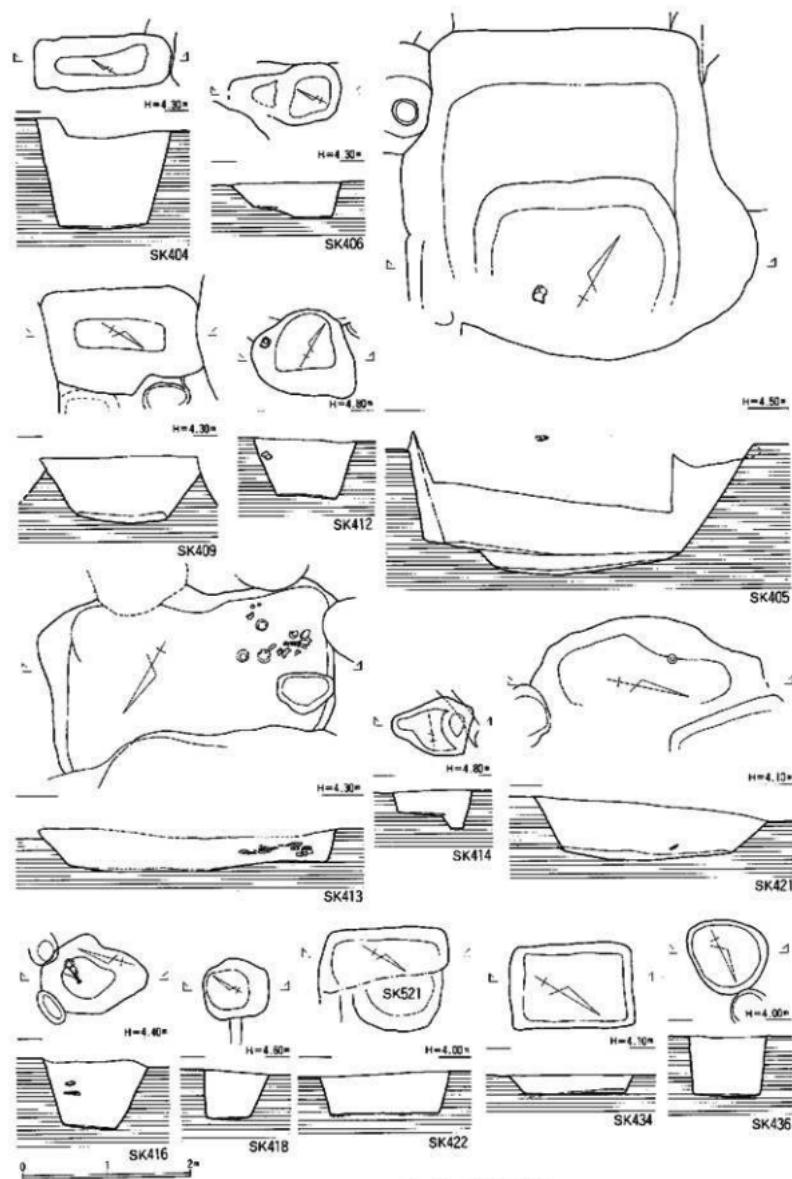


Fig. 22 第三面出土土坑実測図 (1/60)

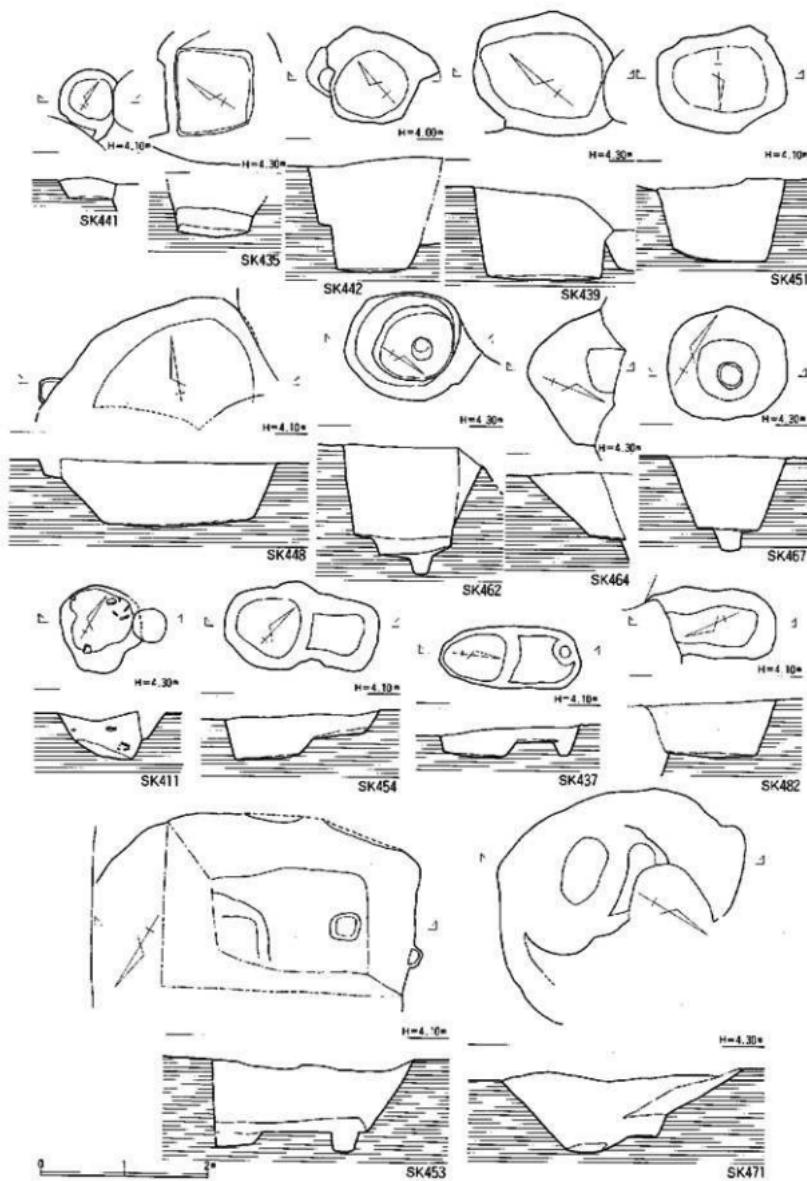


Fig. 23 第Ⅱ面出土土坑実測図 (1/60)

II 調査の記録

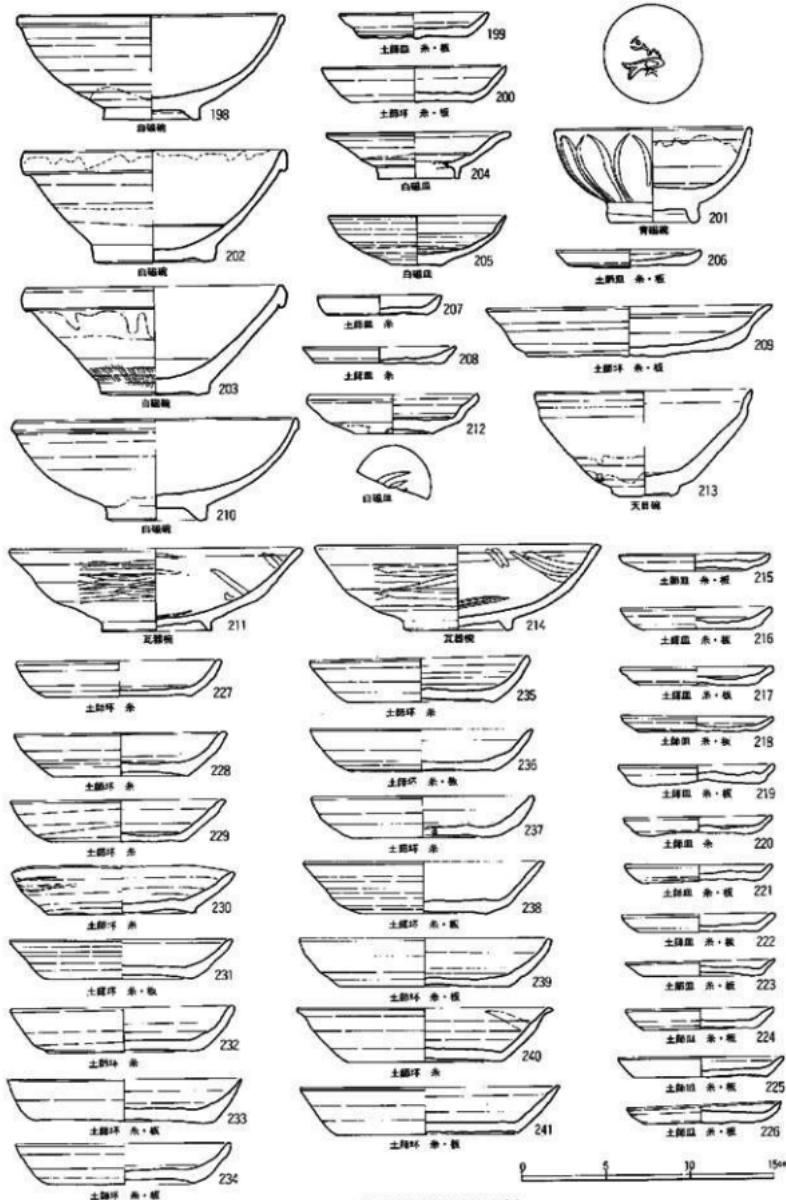


Fig. 24 出土遺物実測図(8) (1/3)

198 : SK402 199~201 : SK404 202~204 : SK405 205 : SK406 206~209 : SK409 210~211 : SK412 212~241 : SK415

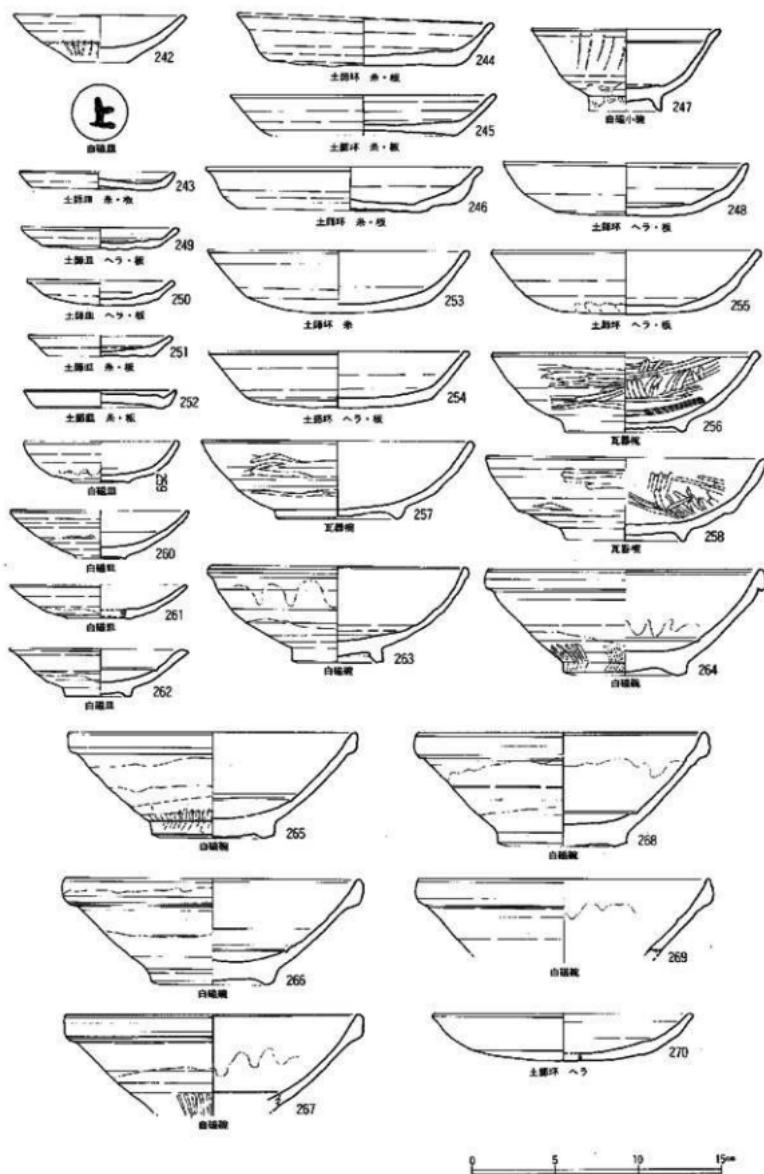


Fig. 25 出土遺物実測図(9) (1/3)

242 : SK414 243~248 : SK416 247~248 : SK418 249~269 : SK421 270 : SK422

III 考査の記録

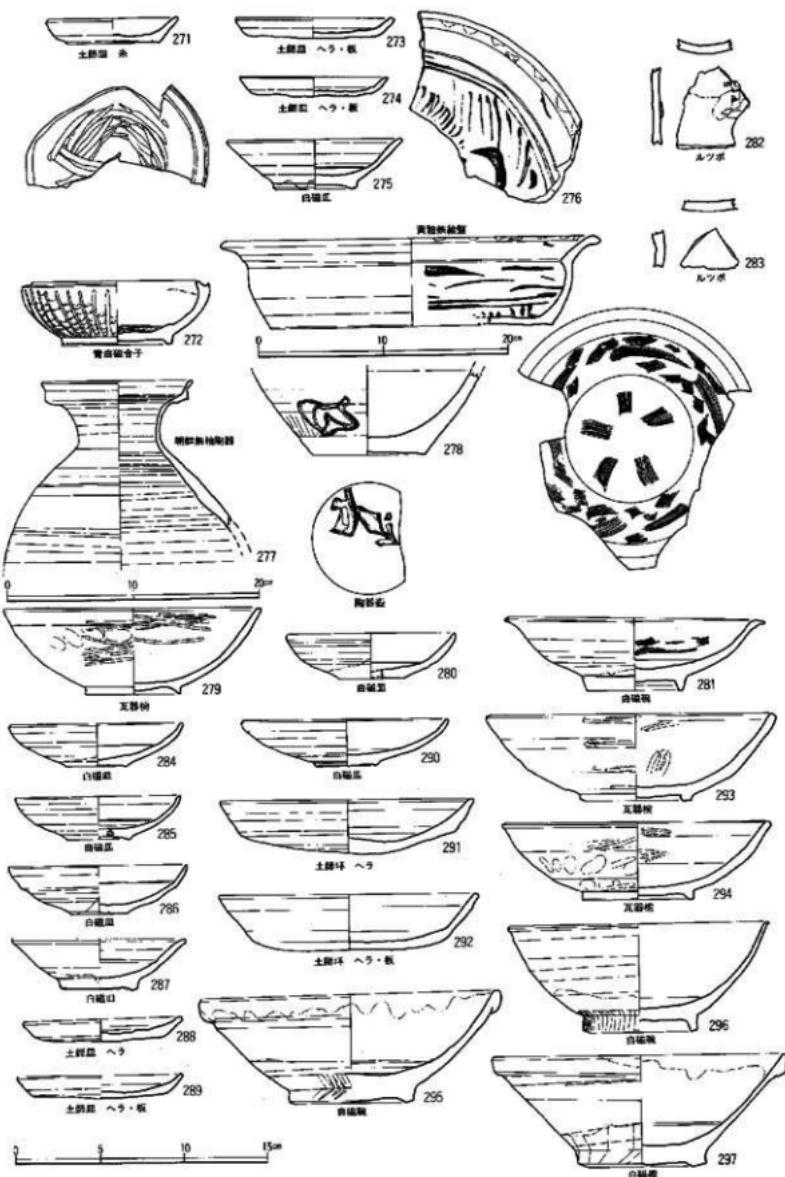


Fig. 20 出土遺物実測図(1/3・1/4)

271~272 : SK425 273 : SK426 274~276 : SK424 277~278 : SK426 279~281 : SK426 282~283 : SK426  
284~297 : SK429

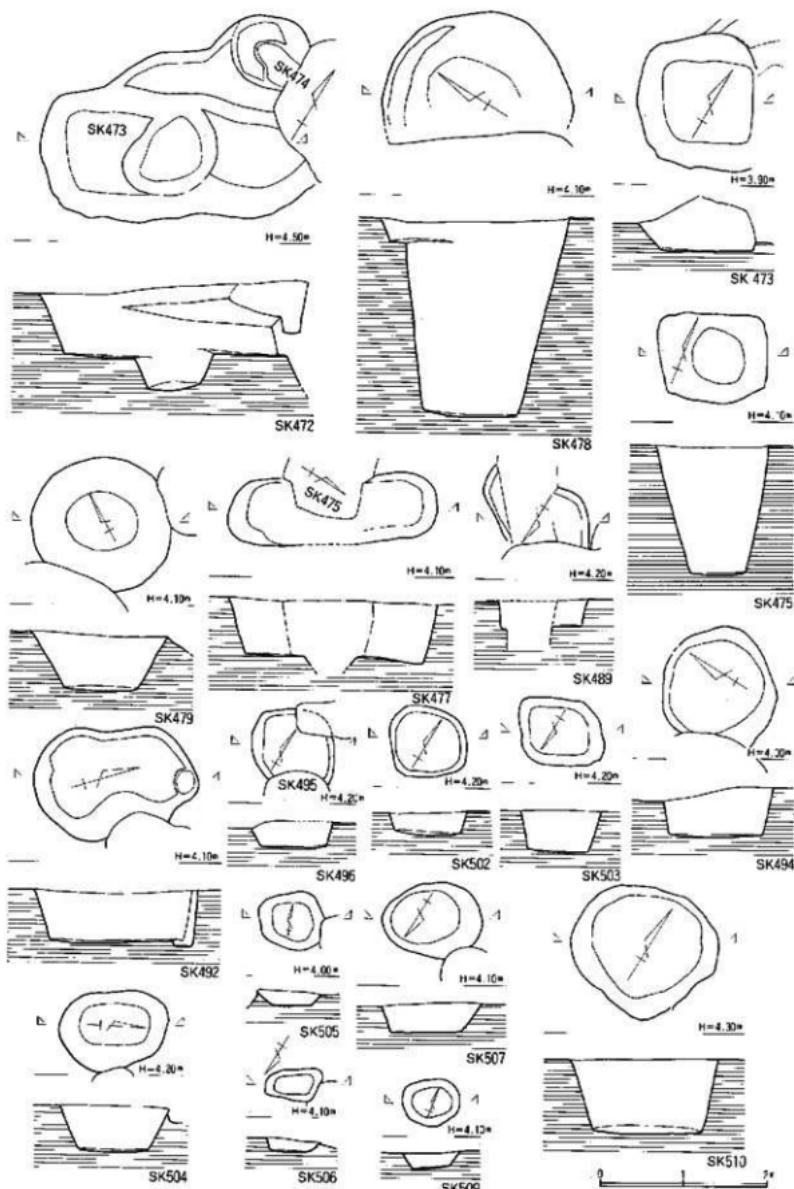


Fig. 27 第三面出土土坑実測図 (1/60)

II 調査の記録

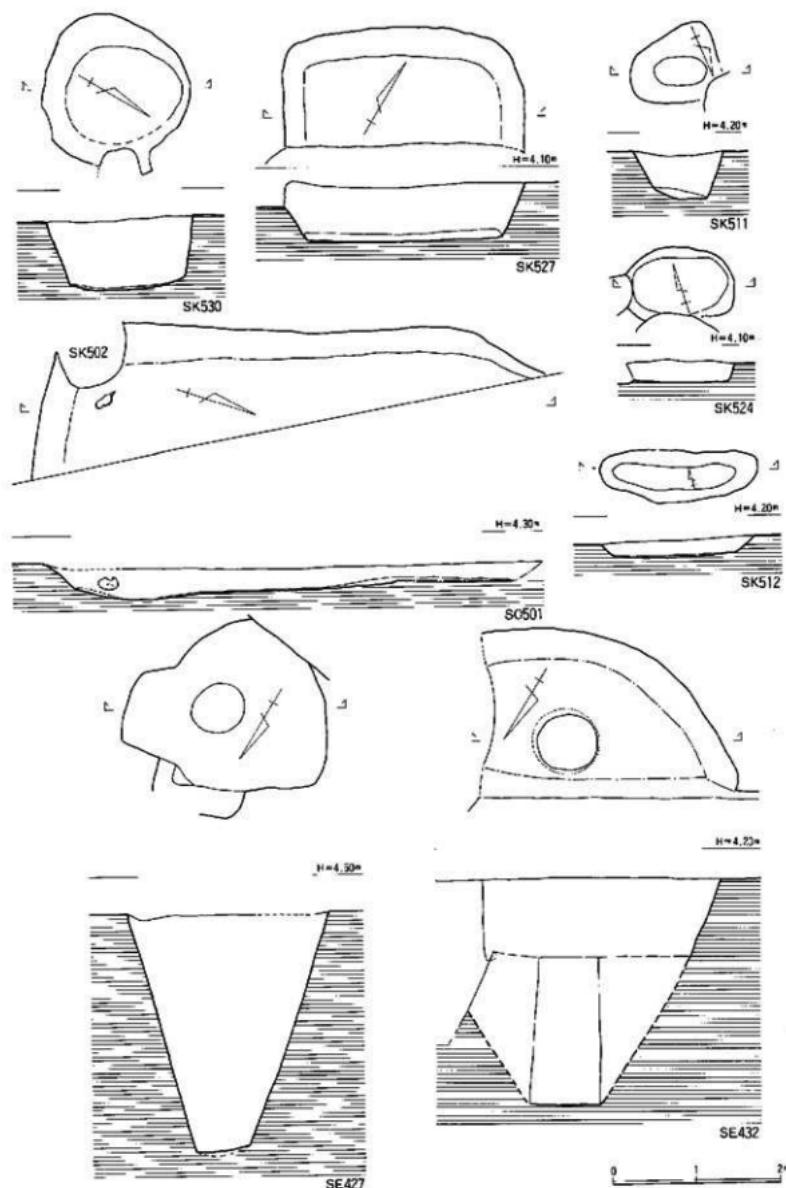


Fig. 28 第三面出土土坑・住居址・井戸実測図 (1/60)

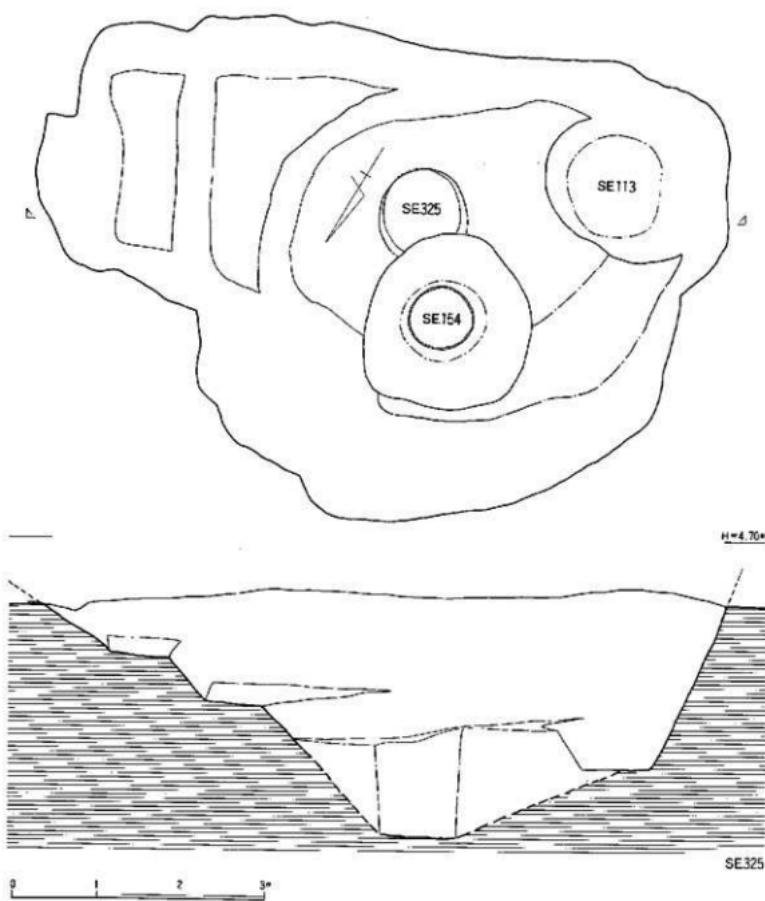


Fig. 29 第三面出土井戸実測図 (1/60)

どである。ビットも多数出土している。

(1) 土坑 (Fig.22~28、32~37、PH. 2 ~ 3、PL.32~43)

100基を越える土坑が出土しているが、プランは方形、長方形、円形、橢円形とその亜形式及び不定形などがある。大きさも小型のものから大型のものまで各種のタイプが存在する。また、掘り方が井戸状に深く掘り込まれる土坑も数基確認されている。

SK405は大型の土坑で、確認面から人骨の頭部が単独に出土している。この人骨は2号人骨としたが、SK405と関係があるかどうか判断できなかった。SK413は略長方形の大型土坑で上師壙・皿がまとまって出土している。SK411は略円形を呈する土坑であるが、中から攪乱された状態で人骨の四肢

II 調査の記録

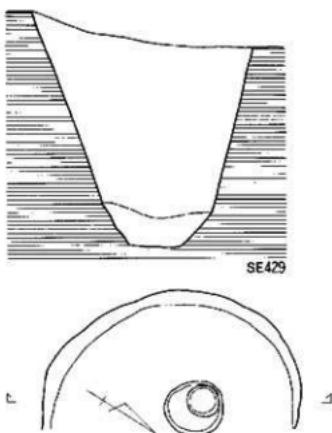
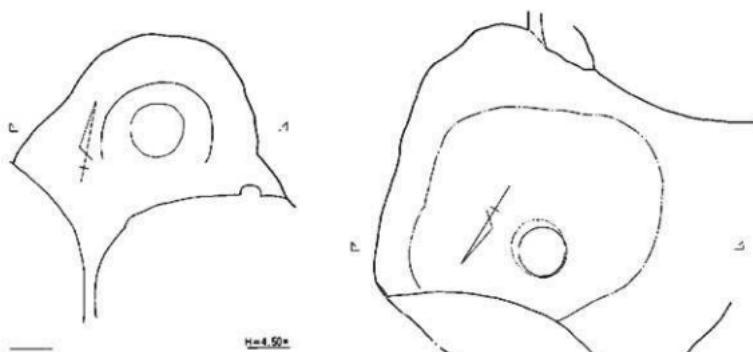
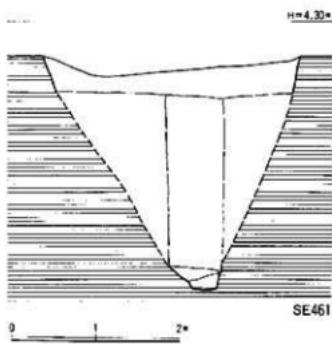


Fig. 30 第三面出土井戸実測図 (1/80)



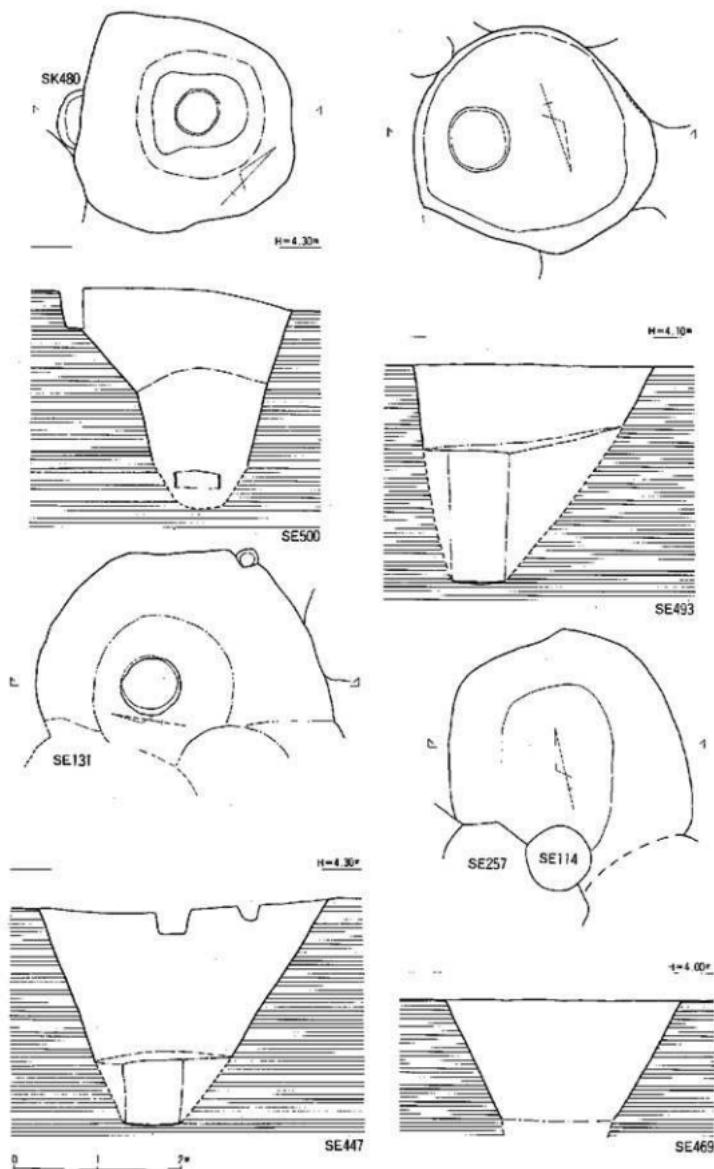


Fig. 31 第二面出土井戸実測図 (1/60)

骨の一部が出土している。SK416からは青磁皿と動物の肩甲骨が出土した。肩甲骨には火を受けた痕は認められなかった。SK462と467は円形を呈する深い土坑で、坑底にピットが掘り込まれている。SK467にはピットに焼砂が詰っていた。SK478と475は、それぞれプランは異なるが井戸状に深くなるタイプである。その他の土坑の規模及び出土遺物の概要については細かな説明をする紙数がないので遺構一覧表をご参照願いたい。

Fig.24-198はSK402から出土した小さな玉縁口縁の白磁碗である。199~201はSK404から出土した土師壺・皿・青磁碗である。青磁碗の見込みには双魚文の印刻、外面は片切彫で蓮弁文を施す。202~204はSK405から出土した白磁碗と白磁高台付皿である。205は白磁平底皿でSK406から出土し、206~209はSK409から出土した上師器壺・皿である。全て糸切りで、206と209には底面に板目圧痕が付く。210・211はSK412から出土した白磁碗と瓦器碗である。210は小さな玉縁口縁を有する。212~241はSK413から出土した一括遺物である。212は青磁平底皿、213は天目碗である。口径13cm、底径3.9cm、器高6.2cmを測り、胎土は灰黒色で白い細かい粒子を含む。釉は光沢のある黒釉で厚くかけられている。口縁内側のやや薄い部分は茶褐色を呈する。口縁部の釉はうすく搔き取っている。214は瓦器碗である。215~226は土師皿、227~241は土師壺である。底面は糸切りで板目圧痕が付くものが多い。Fig.25~242は白磁皿である。底面に「上」の墨書きがある。243~246はSK416から出土した土師壺・皿である。247は白磁碗、248は土師壺である。底面はヘラ切り離しで、内面には磨きが施されている。249~269はSK421から出土した一括遺物である。249~252は糸切り及びヘラ切りの土師皿、253~255は糸切り及びヘラ切りの土師壺である。256~258は瓦器碗、259~262は白磁皿である。262のみ高台付となる。263~269は白磁碗である。270はSK422から出土した底面ヘラ切りの土師壺である。内面はよく磨かれている。Fig.26~271・272はSK425から出土した土師皿と青白磁鏡文合子である。外口径11.1cm、底径6.5cm、器高3.8cmを測る。胎土は灰白色で黒色の細粒を含んでいる。釉は内面乳白色、外面は青白色を呈する。273は底面ヘラ切りで板目圧痕の付いた土師皿である。SK426出土。274~276はSK434から出土したヘラ切りの土師皿、白磁皿、黄釉鉄絵盤である。277は盤口状を呈す朝鮮無釉陶器の壺、278は中国陶器の壺底部である。底面及び側面には墨書きがみられる。これらはSK435から出土。279~281はSK436から出土した瓦器碗・白磁皿・白磁碗である。282~283はSK438から出土したルッポ片である。282は頸部の部分で、上は黒褐色でこまかい。白い大小の砂がたくさん混る。内外表面に風化して不透明黄褐色を呈するガラスが付着している。ガラスは空色だったと思われる。このガラスについても分析結果が出ている。283も同一個体の破片と思われ、内面に太めのロクロ目がまわっている。284~297はSK439から出土した一括遺物である。284~287・290は白磁皿、288~289は底面ヘラ切りの土師皿、291・292は底面ヘラ切りの土師壺、293・294は瓦器碗、295~297は白磁碗である。Fig.32~298~300はSK442から出土した白磁碗である。298はV類、299・300はIV類に属する。301はSK448から出土した奈良時代の須恵器壺蓋である。焼けひずみが激しくかなり歪んでいる。天井部のつまみは外れている。303・304は同じくSK448出土で、ふたとともに底面はヘラ切りで板目圧痕が付く。305~307はSK452から出土した遺物である。305は上師器の高台付碗で、外面に指頭圧痕が残る。306は平底の白磁皿、307は高い高台の付いた白磁皿である。308は同安窯系の青磁碗、309は白磁皿、310は糸切りの土師皿である。以上3点はSK453から出土している。311はSK456から出土した須恵器の环身である。奈良時代のものであろう。312はSK459から出土した白磁平底皿である。313はSK462から出土した上師壺である。底面はヘラ切りで内面はミガキが施されている。314はSK464から出土した底部糸切りの土師壺である。315~318はSK467から出土したもので、315はB群の綠褐釉四耳壺、316~318は上師壺である。316は底面が小さく器体は外開きで器高が高い。319

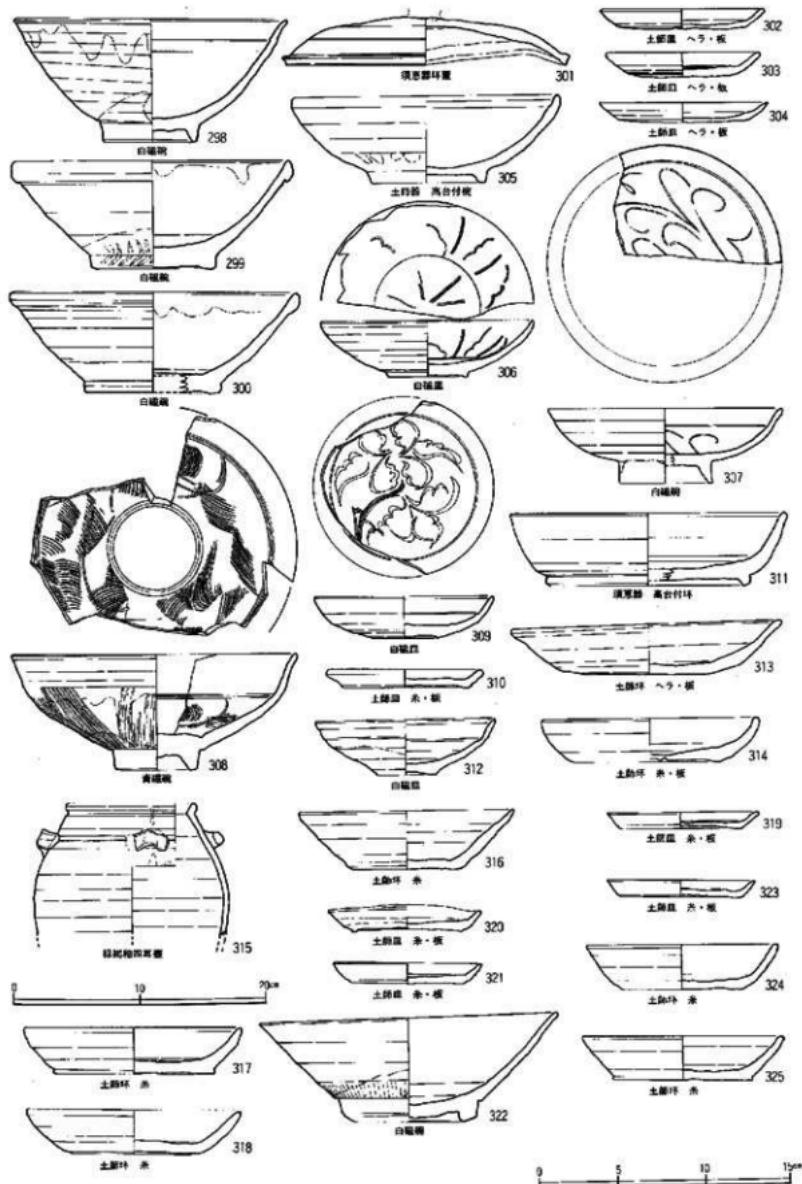


Fig. 32 出土遺物実測図10 (1/3・1/4)

289~290 : SK442 301~303~304 : SK448 305 : SK441 305~307 : SK452 308~310 : SK453 311 : SK456 312 : SK459  
 313 : SK462 314 : SK464 315~318 : SK467 319~322 : SK471 323~325 : SK472

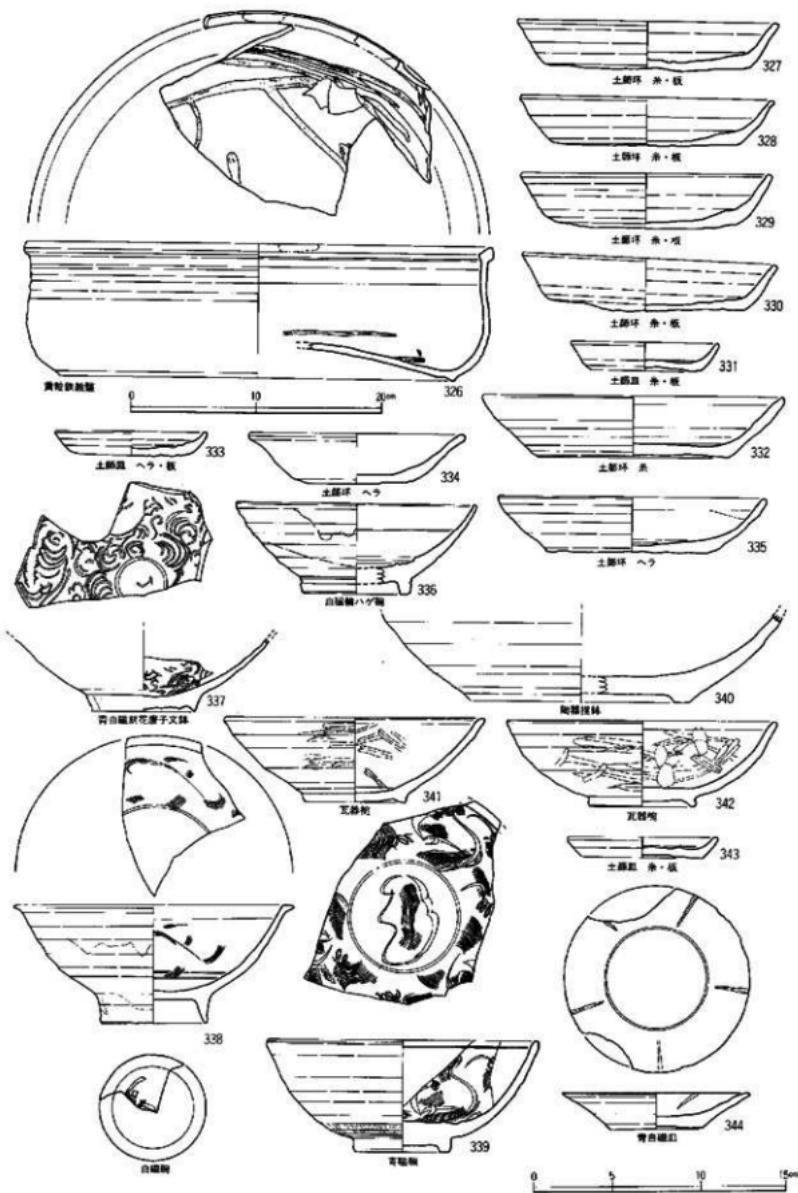


Fig. 33 出土遺物実測図12 (1/3 - 1/4)

326 : SK472 327~329 : SK473 330 : SK477 331~332 : SK478 333~342 : SK479 348~344 : SK483

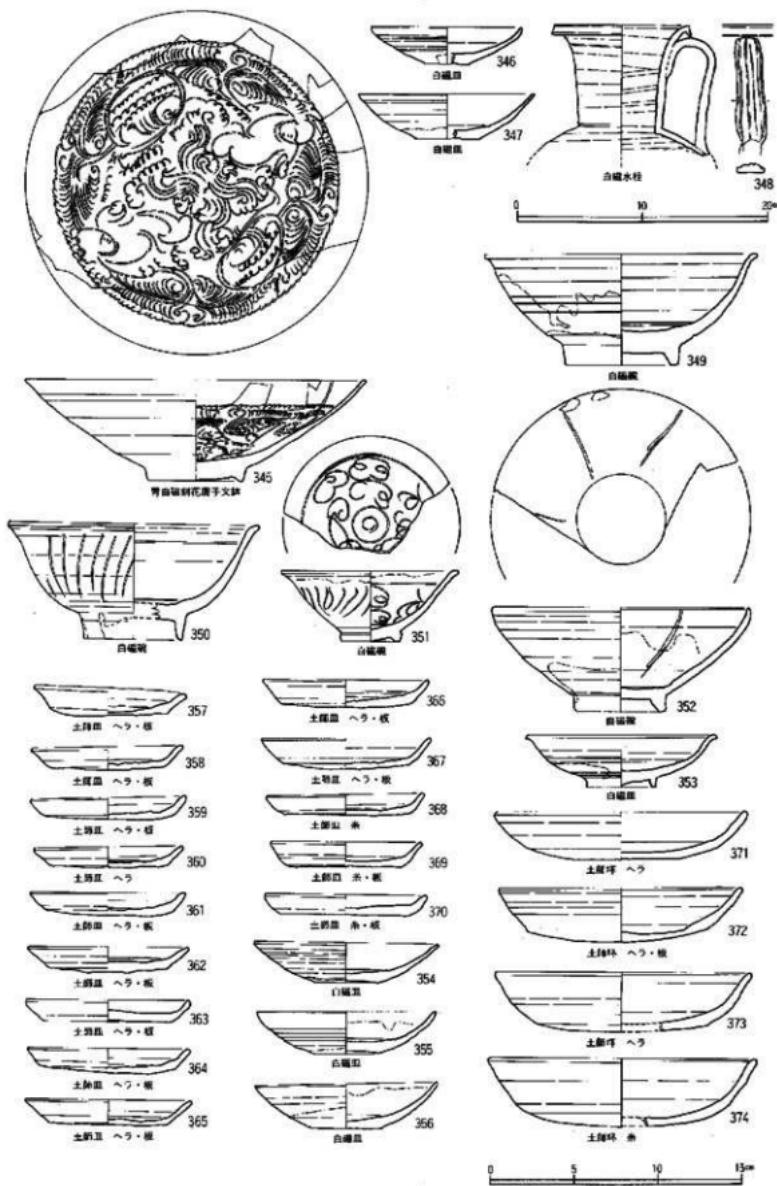


Fig. 34 出土遺物実測図03 (1/3 · 1/4)

345～349 : SK483 349 : SK486 350～374 : SK488

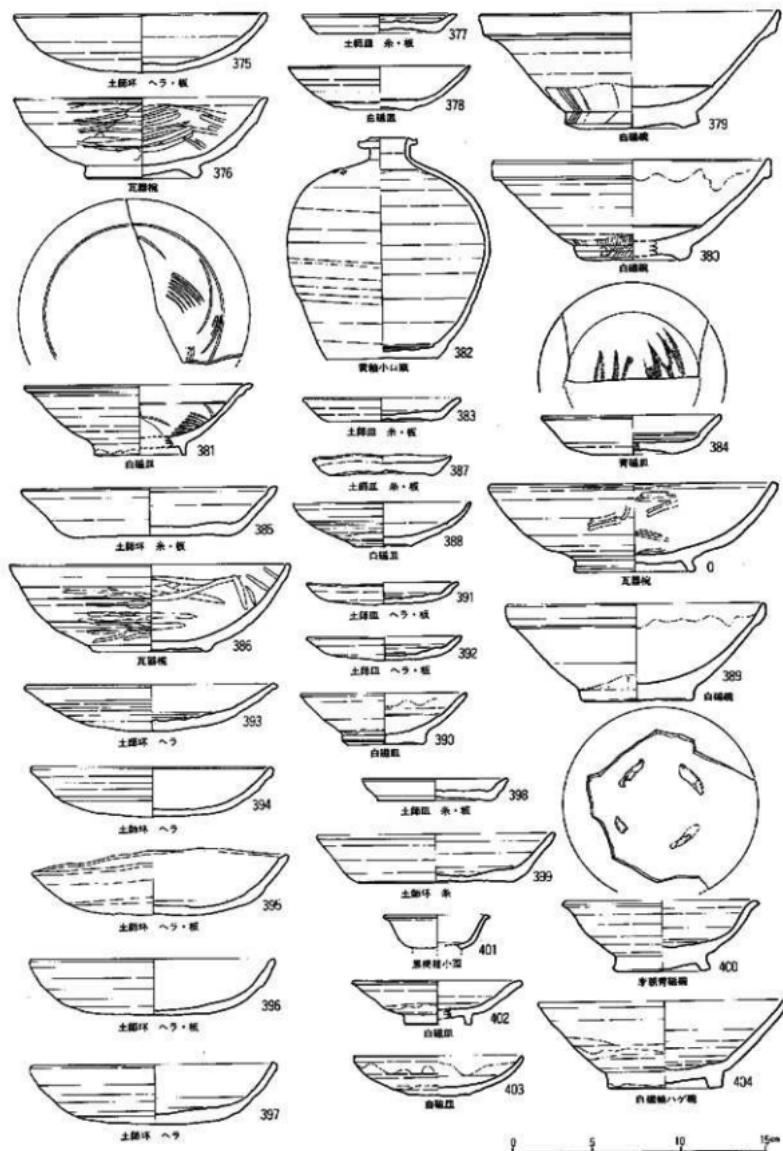


Fig. 35 出土遺物実測図14 (1/3)

375・376 : SK488 377~379 : SK490 380 : SK499 381 : SK498 382~383 : SK502 384 : SK503 385 : SK504 386 : SK506  
 387・388 : SK507 389~397 : SK510 398 : SK509 398~399 : SK519 400 : SK506 401~404 : SK527

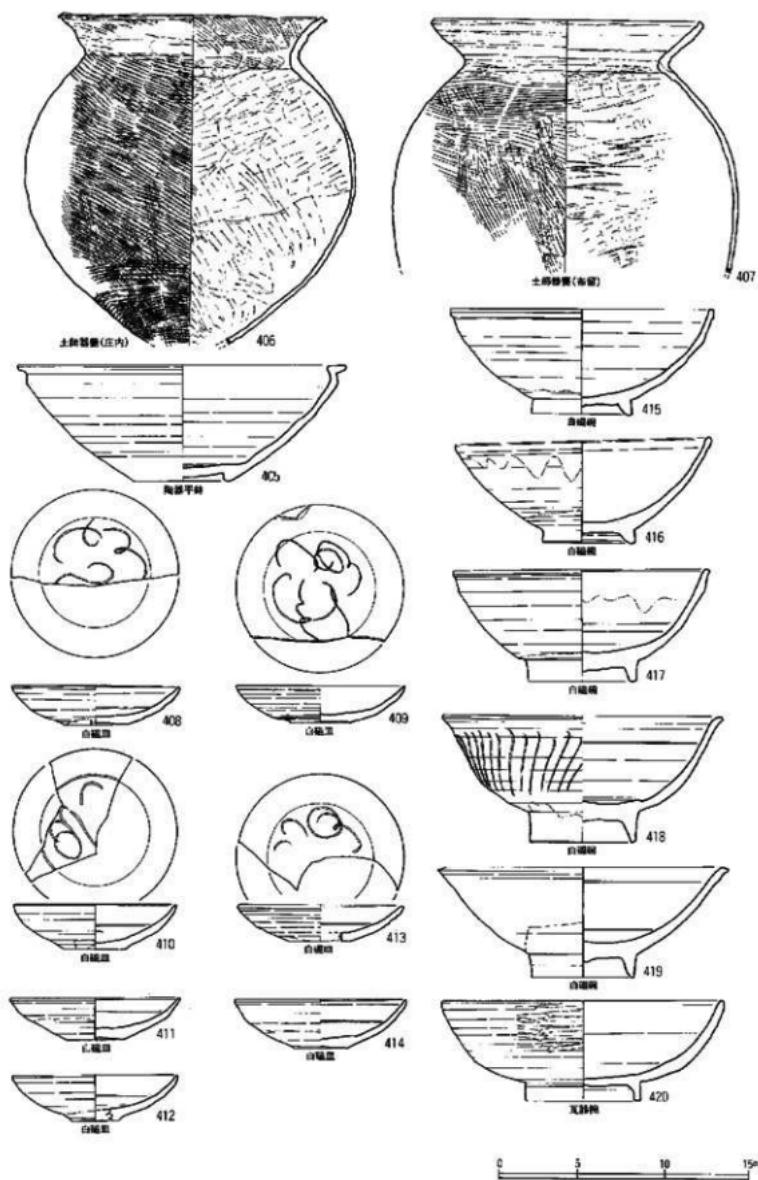


Fig. 36 出土遺物実測図1S (1/3)

405 : SK527 406~407 : SK626 408~420 : SK530

II 調査の記録

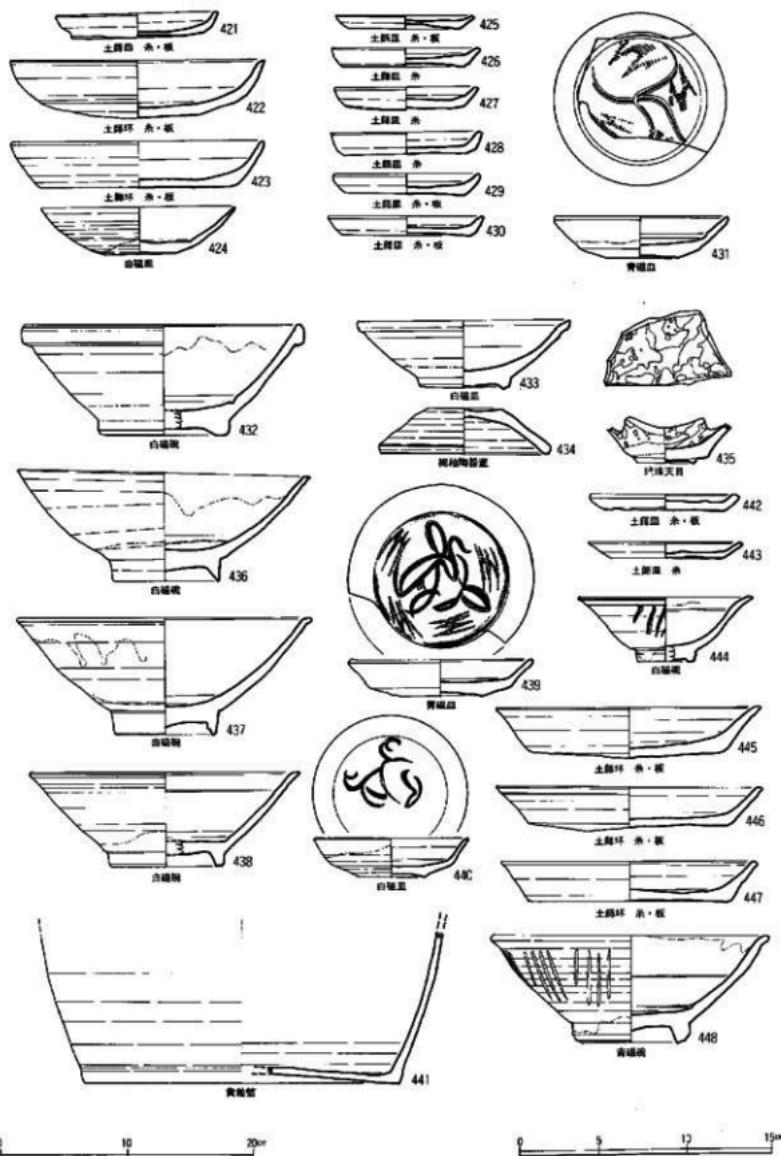


Fig. 37 出土遺物実測図16 (1/3 - 1/4)

421 : SK578 422 : SK533 423・425～431 : SK534 434 : SK570 432・433 : SK427 434・436 : SK433  
435～440 : SK447 441 : SE472 442・443 : SK481 444～448 : SK495

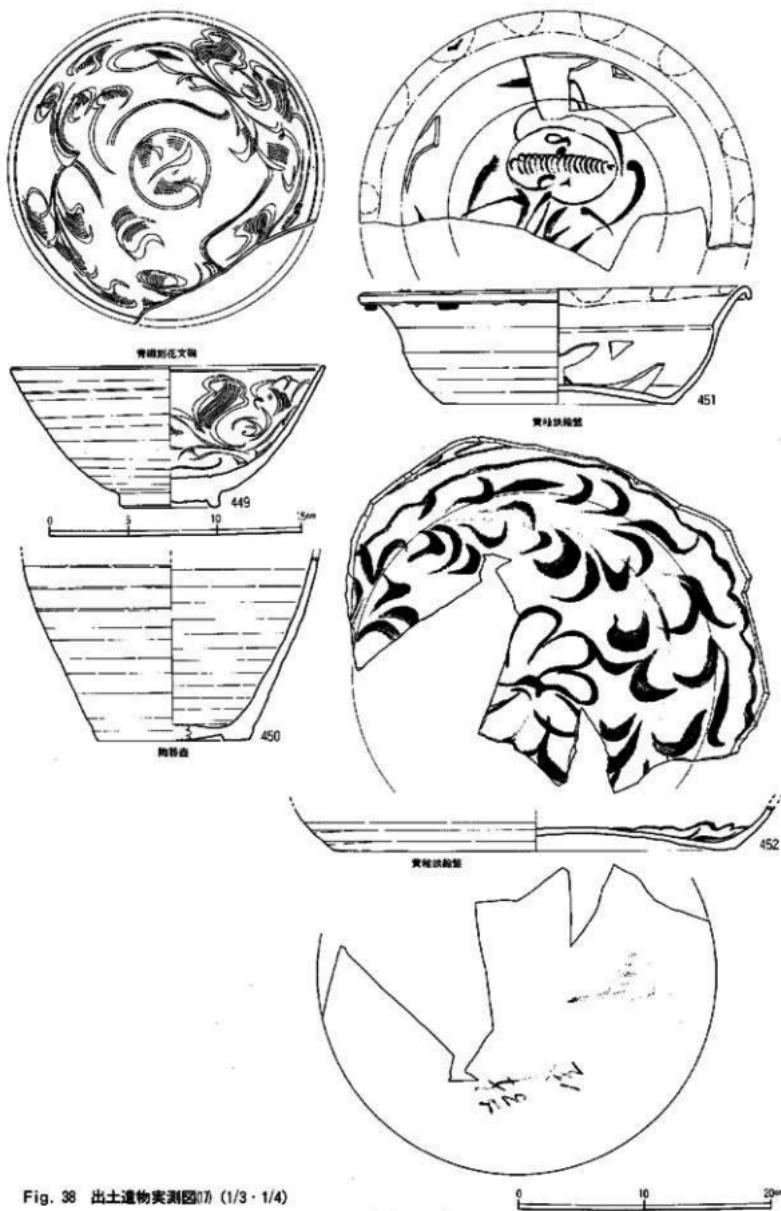


Fig. 38 出土遺物実測図(1/3 - 1/4)

449~452 : SB193

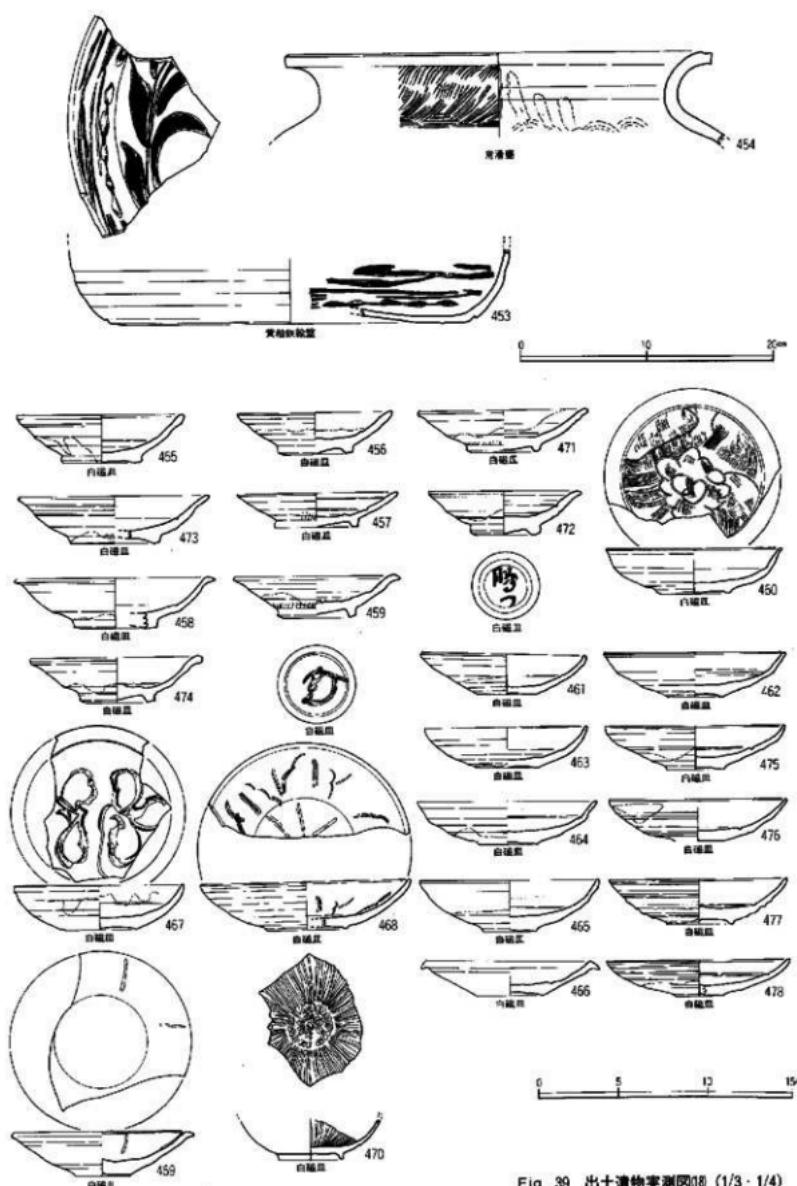


Fig. 39 出土遺物実測図10 (1/3 - 1/4)

453・454: SE163 455~470: Ⅲ面下包器 471: Ⅲ面D・C区波線模様 472: Ⅲ面東側相当透鏽模様  
473: Ⅲ面C・D・E透鏽模様 474: Ⅲ面南側カクラン 475~478: Ⅲ面南側透鏽模様

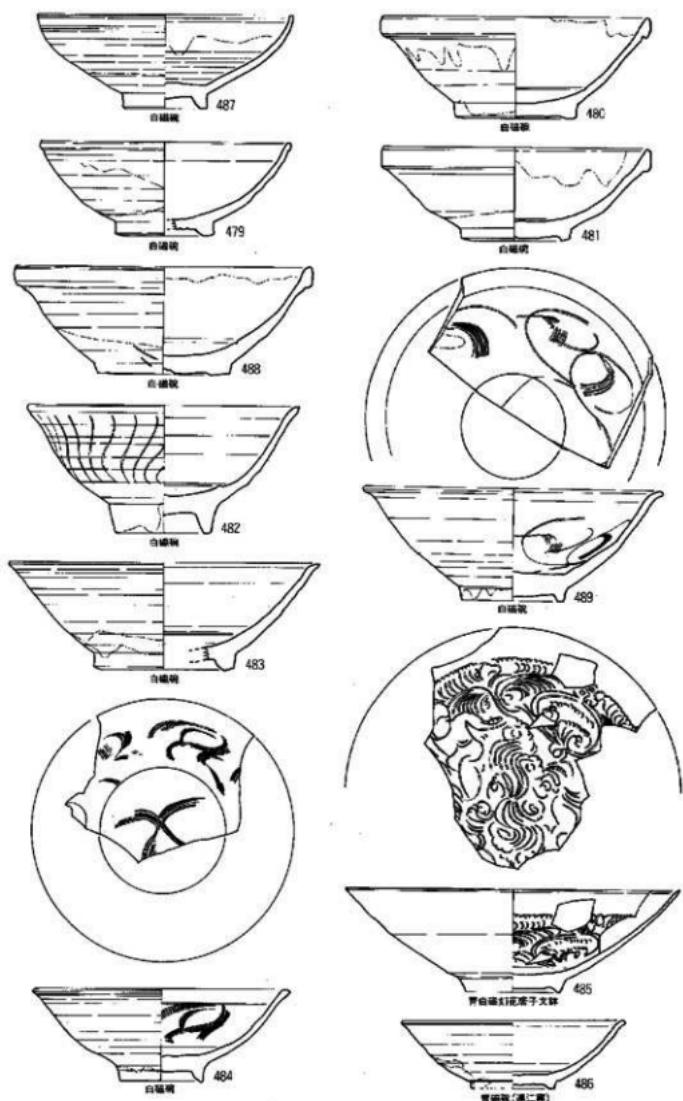


Fig. 40 出土遺物実測図3 (1/3)

479~485・489: 白釉下絵文鉢 487・488: 青白釉刻花唐子文鉢

II 調査の記録

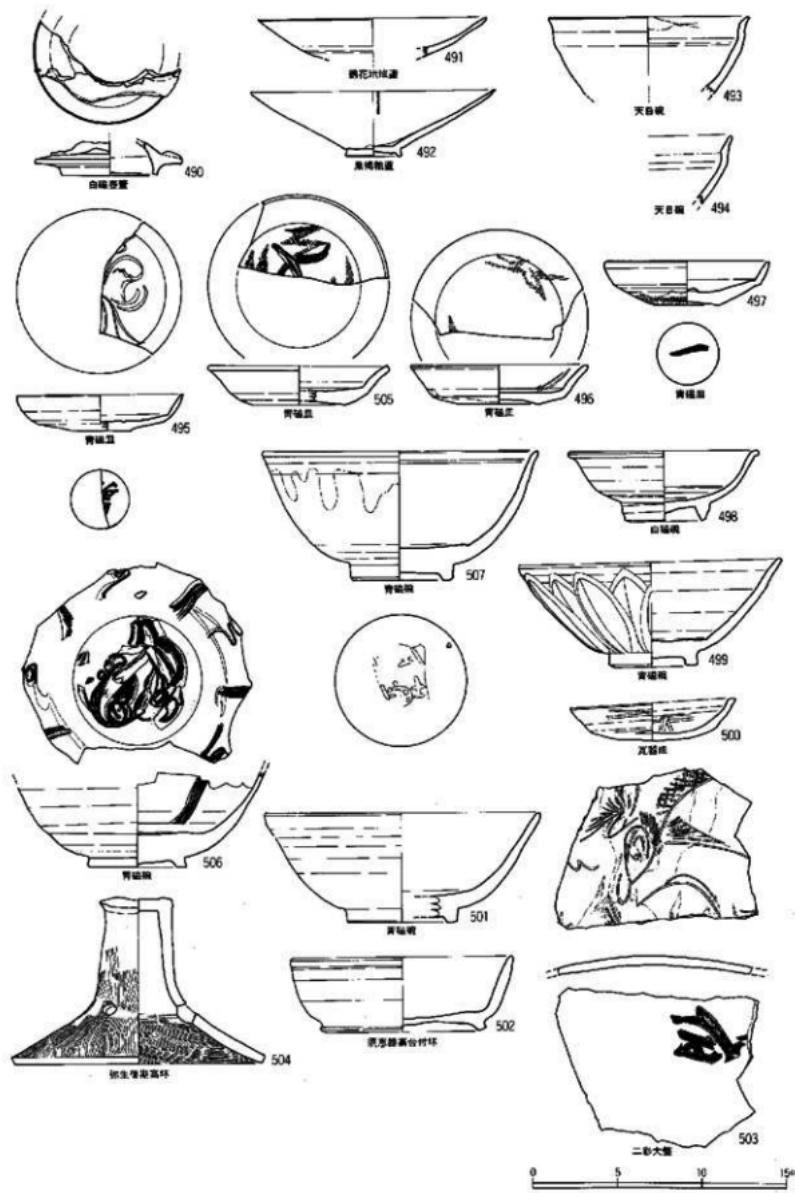
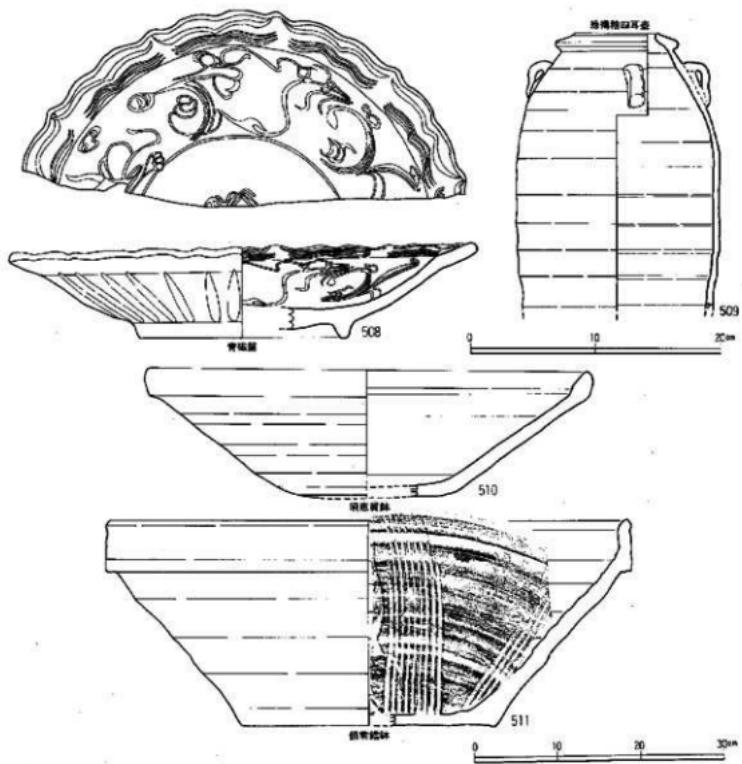


Fig. 41 出土遺物実測図20 (1/3)

490・492・494～498・500・501・503: Ⅱ側下部合縫 491: 西側邊縁破損 493: Ⅰ面西側邊縁破損 499: Ⅰ面下部合縫  
502・504～507: Ⅲ面邊縁破損



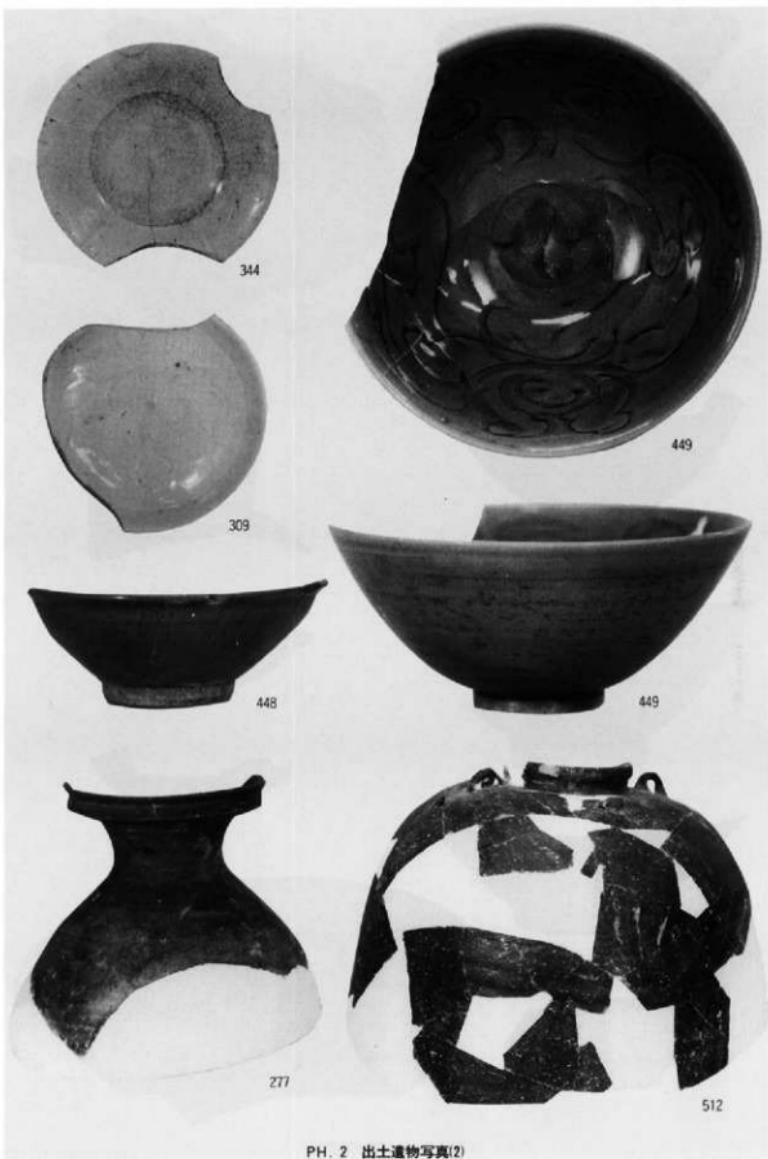
508~511：II 土下山古墳

Fig. 42 出土遺物実測図2(1/2・1/3)

～322はSK471から出土した土師皿と白磁碗である。322の白磁碗は輪ハゲ碗で、費付には重ね焼きの離れを良くするためスリップ状の泥土を塗り付ける。323～325は土師壺・皿である。SK472から出土。Fig.33～326はSK472から出土した黄釉鉄絵盤である。327～329はSK473から出土した土師壺である。口径が大きく、底面は糸切りで板目圧痕が付く。331・332は上師壺・皿である。SK478から出土。333～342はSK479から出土した遺物群である。333は底面ヘラ切りの十師皿、334・335は底面ヘラ切りの土師壺である。336は白磁輪ハゲ碗、337は青白磁刻花唐子文鉢である。338・339は白磁碗、340はC群捏鉢、341・342は瓦器碗である。343・344はSK483から出土した土師皿と青白磁皿である。青白磁皿は内面五箇所に白堆線を施す。Fig.34～345は青白磁刻花唐子文鉢である。今回同様な青白磁の鉢が合わせて4枚出土している。345は口径22cm、底径5.5cm、器高6cmを測る。胎土は白色緻密で、釉は光沢のある青白色を呈する。内面には向かい合った唐子を巡って唐草の文様が配されている。江西省景德鎮窯の製品と考えられる。SK483出土。346～348もSK483の出土で、346・347は白磁半底皿、348は白磁水注である。349～374はSK485から出土した一括の遺物である。349～352は白磁碗である。351は小碗で、内面に曲線文で花文を施す。353～356は白磁皿で353が高台付、354～356が平底である。



PH. 1 出土遺物写真(1)



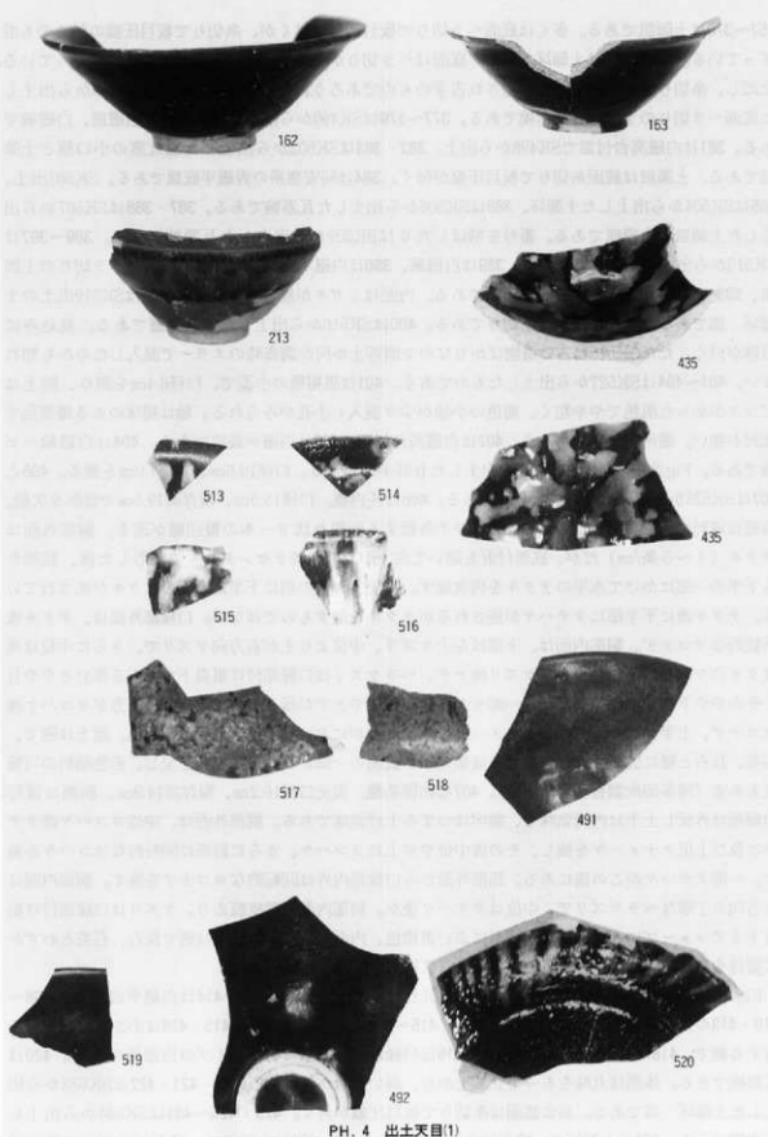
PH. 2 出土遺物写真(2)



PH. 3 出土遺物写真(3)

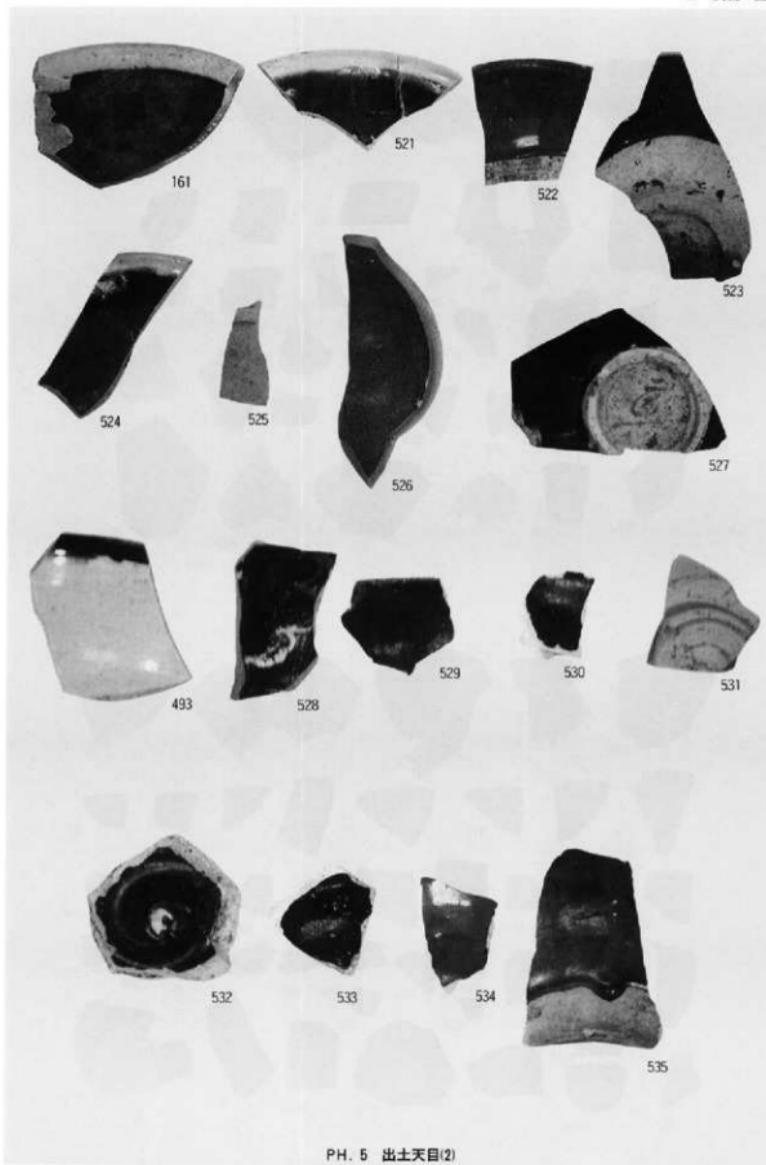
357～370は土師皿である。多くは底面ヘラ切りで板目圧痕が付くが、糸切りで板目圧痕の付くのも混ざっている。371～374は土師坏である。底面はヘラ切りが主体を占めるが糸切りも若干混ざっている。ただし、糸切りも内面はミガキが施された古手のものであろう。Fig.35-375・376はSK489から出土した底面ヘラ切りの土師坏と瓦器碗である。377～379はSK490から出土した上師皿、白磁皿、白磁碗である。381は白磁高台付皿でSK498から出土。382・383はSK502から出土した磁灶窯の小口瓶と土師皿である。土師皿は底面糸切りで板目圧痕が付く。384は同安窯系の青磁平底皿である。SK503出土。385はSK504から出土した土師坏、386はSK505から出土した瓦器碗である。387・388はSK507から出土した土師皿と白磁皿である。番号を飛ばした0はSK509から出土した瓦器碗である。389～397はSK510から出土した遺物群である。389は白磁碗、390は白磁平底皿、391・392は底面ヘラ切りの土師皿、393～397は底面ヘラ切りの土师坏である。内面はミガキが施される。398・399はSK519出土の上師坏・皿である。ともに底面は糸切りである。400はSK516から出土した李朝青磁である。見込みに目跡が付く。ただSK516は古い遺物ばかりなので崩落上か何か調査時のエラーで混入したのかも知れない。401～404はSK527から出土したものである。401は黒褐釉の小皿で、口径6.4cmを測る。胎土はピンクがかかった肌色でやや粗く、褐色の小砂が少々混入し小孔がみられる。釉は褐味のある漆黒色で光沢が強い。磁州窯の産であろう。402は白磁高台付皿、403は白磁平底皿である。404は白磁輪ハゲ碗である。Fig.36-405はSK527から出土したB群平鉢である。口径19.6cm、器高7.0cmを測る。406と407はSK526から出土した山式上師器である。406は庄内窯、口径15.9cm、現存高19.5cmで底部を欠損。胴部は球形に近く、口縁は外反し端部はやや外傾する面取り状で一本の擬円線が巡る。胴部外面はタタキ(4～5条/cm)だが、底部付近を除いて左上がりの連続ラセンタタキで整形した後、底部から下半の一部にかけて水平のタタキを再度施す。左上タタキの前に下間に右上のタタキが施されている。タタキ後に下半部にタテハケが施されるがタタキを消すものではない。口縁部外面は、タタキ後断続的なヨコナデ。胴部内面は、下部は左上ケズリ、中位より上が右方向ケズリで、さらに中位は再度タテのケズリを行い、下半はケズリ後ナデ。ヘラケズリは口縁部付け根直下まで入る部分とやや甘くそのやや下までの部分があり、一部ケズリ前の押捺やナデが残る。口縁部内面は下方がヨコハケ後ヨコナデ、上半はヨコナデ後?ナメハケ。色は外面がにぶい黄橙色、内面は褐灰色。胎土は密で、石英、長石と共に雲母を含む。なお口縁部などの表面の一部がかすかに赤色を呈し、赤色顔料の可能性もある(博多59次調査報告に類似)。407は布留系碗。復元口径16.2cm、現存高14.9cm、胴部は球形、口縁部は外反し上半は内済気味で、端部はつまみ上げ気味である。胴部外面は、中位ヨコハケ後タテハケ及び上位ナメハケを施し、その後中位や上にヨコハケ、さらに肩部に回転的なヨコハケを施す。一部タテハケがこの後に来る。頸部外面から口縁部内外は回転的なヨコナデを施す。胴部内面は右方向の丁寧なヘラケズリで、中位はタテハケ後か。肩部内面は押捺痕あり。ケズリは口縁部付け根直下までシャープに入る。色は外面がにぶい黄橙色、内面が灰白色。胎土は密で長石、石英とわずかな雲母を含むが砂粒は全体として少ない。(久住猛雄)

Fig.36-408～420はSK530からまとまって出土した遺物である。408～414は白磁平底皿で、408～410・413の見込みには曲線文で文様を描く。415～419は白磁碗である。415・416は小さな玉縁口縁を有する碗で、418は外面に綾線文を施す。419は口縁端部を水平に切るタイプの白磁碗である。420は瓦器碗である。体部は丸味をもって立ち上がり、高い高台が付く。Fig.37-421・422はSK533から出土した上師坏・皿である。共に底面は糸切りで板目圧痕が付く。423・425～431はSK534から出土した遺物である。423は上師坏で、底面は糸切りである。425～430は土師皿で、底面は糸切りで板目圧痕の付くものが多い。431は同安窯系の青磁平底皿である。424はSK510から出土した白磁平底皿であ



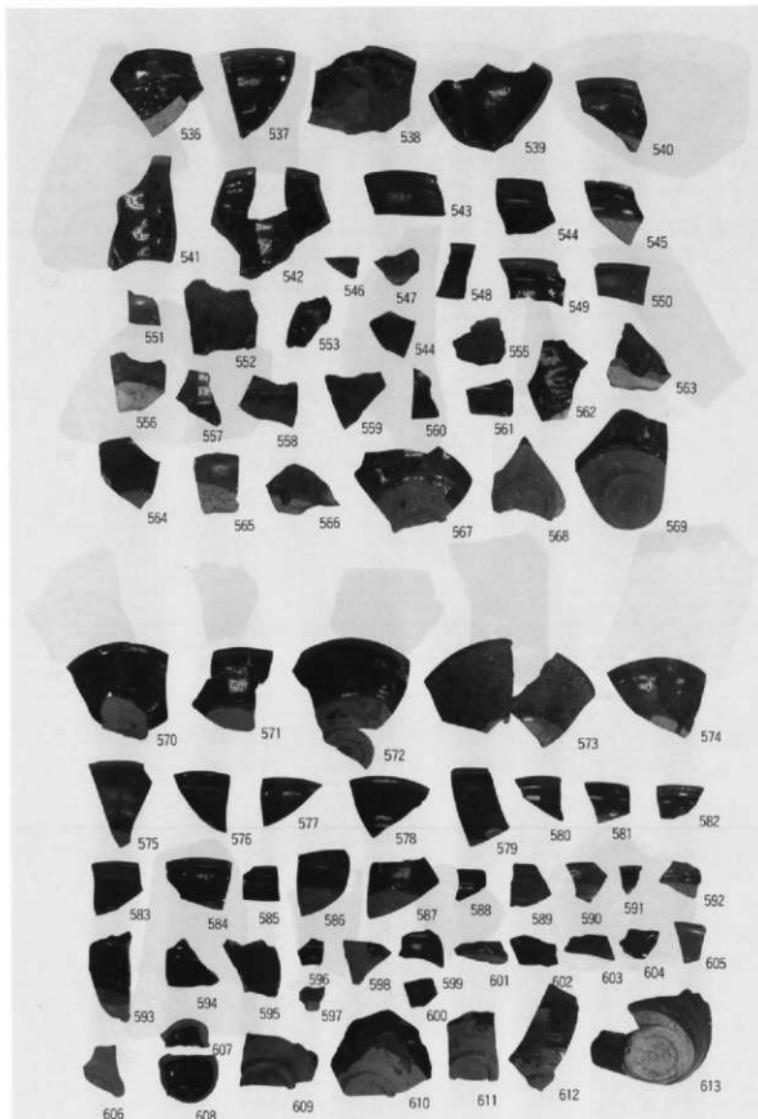
PH. 4 出土天目(1)

162・163: SK336 213: SK413 435: SK433 513・517・491: II面西側邊縁部 514: SK363  
515: SE205 516: SK252 518: SK470 519・492: II面下包丸端 520: SE255



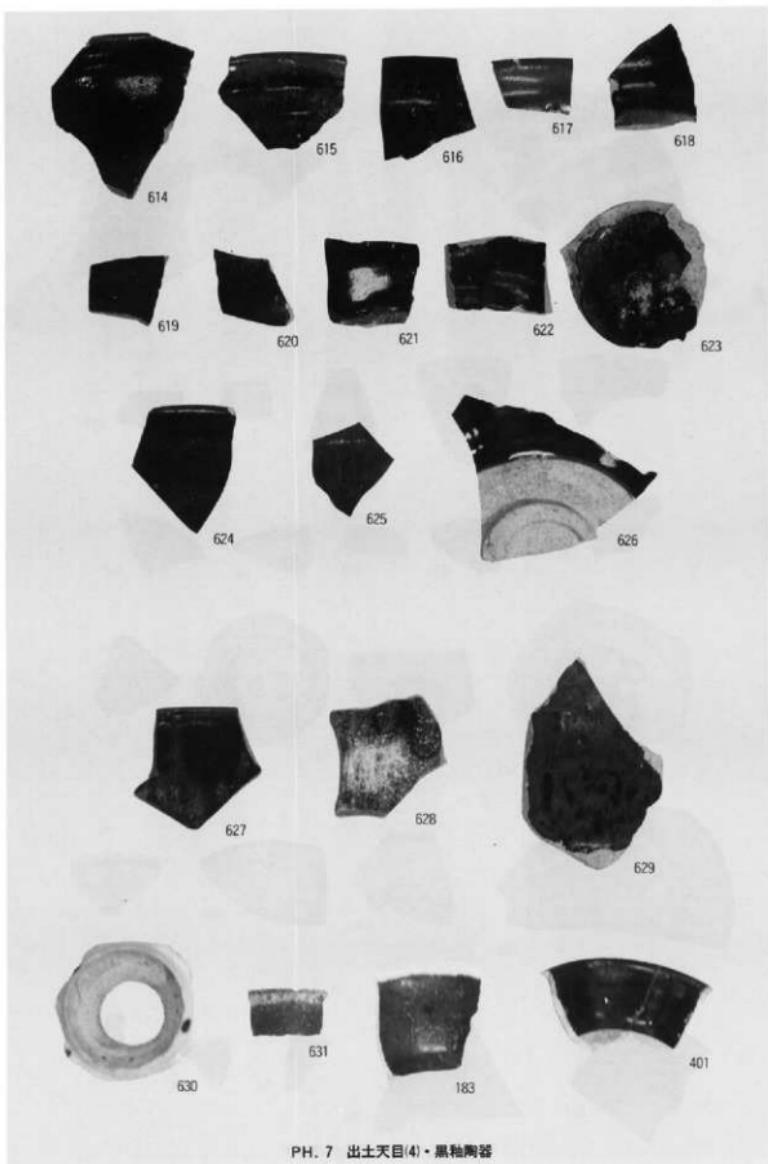
PH. 5 出土天目(2)

161 : SK336 521 - 522 : SK436 523 : 中央深道横縫認  
 526 : SK479 527 : SK433 493 : 西側邊横縫認 524 - 531 - 532 : II面下包含層 525 : SK344  
 533 : SK226 534 : I面中央深道側縫認 535 : SK169



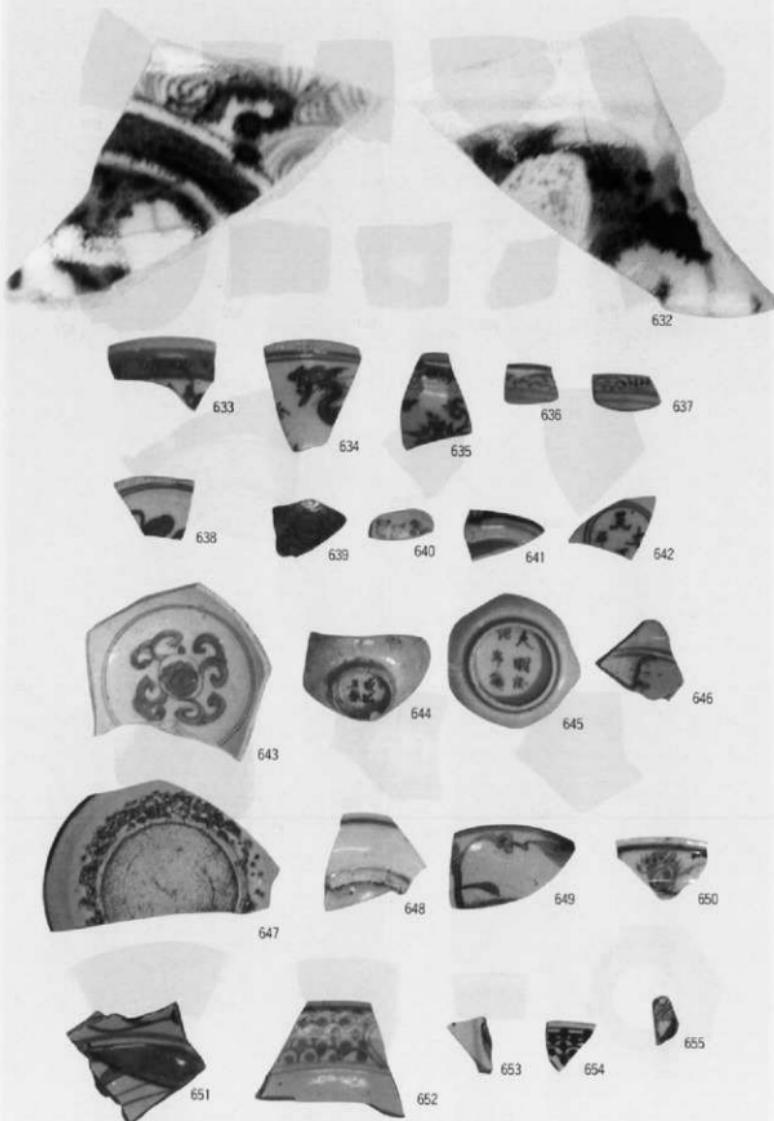
PH. 6 出土天目(3)

536-538 : 540-545 : 566-579 : 589-591-592 : I面下包底層 537 : SK283 539 : SK284 541-547-552-553 : 563-556-557-561-576-583 : 586-601-606-612 : II面下包  
合層 542 : SK226 543 : SK260 544-548-555-560-564-572-587-594-596-598-602 : B面遺構確認 546-551-608 : I面遺構確認 549 : SK298 550 :  
SK293 554 : SK492 558 : SK233 559 : SK222 562 : SK433 565 : SK402 567 : SK416 568 : 鉄土 569 : SK203 570 : SK336 571 : S  
K244 573 : SK473 574 : SK227 575 : SK216 577 : SK212 578-580 : SK421 581 : SK425 582-593-603 : SK325 584 : 青田遺構確認 585 :  
SK316 588 : SK413 590-610-611 : SK167 596-605 : SK209 597 : SK218 599 : SK404 600 : SK330 604 : SK406 609 : SK493 613 : SK  
344



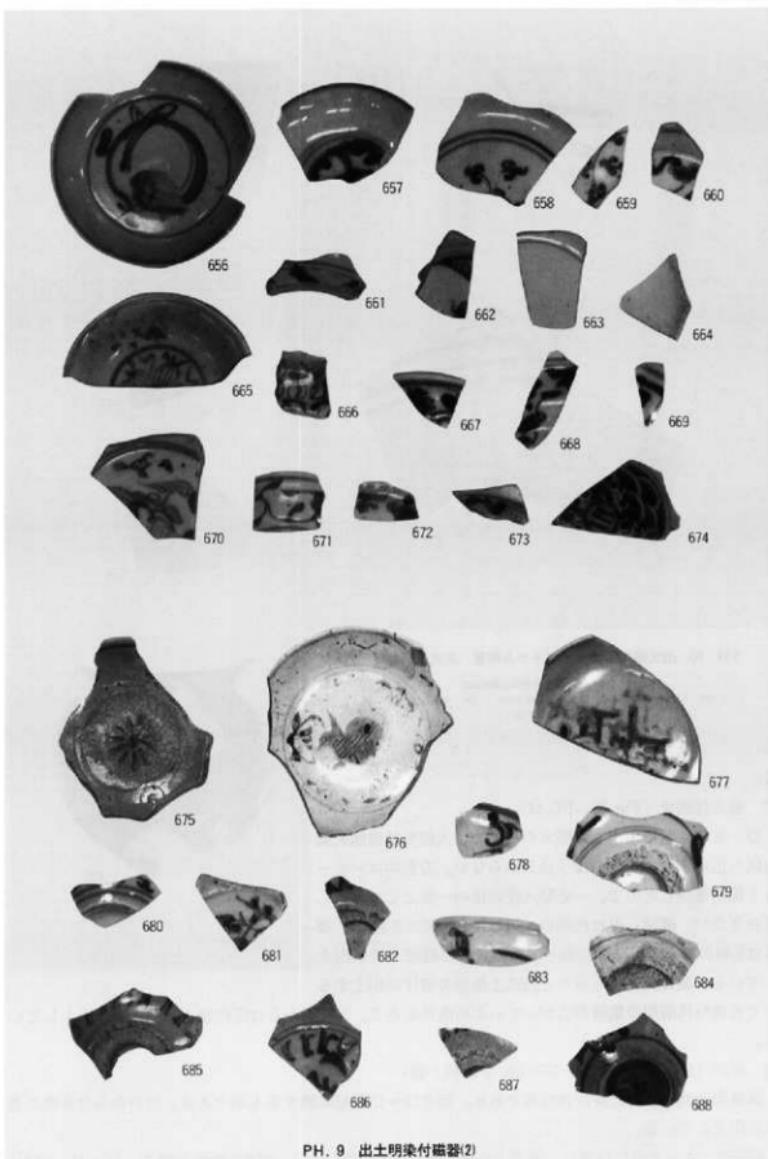
PH.7 出土天目(4)・黒釉陶器

614・624 : I面下包合層 615 : SK362 616 : SK352 617 : SK402 618・619 : II面下包合層 620 : SX209  
 621・622 : SH228 622 : SK146 623 : SK177 625 : SK201 626 : SK425 627・628 : SK167 629 : SK130  
 630 : SK504 183 : SD319 401 : SK527



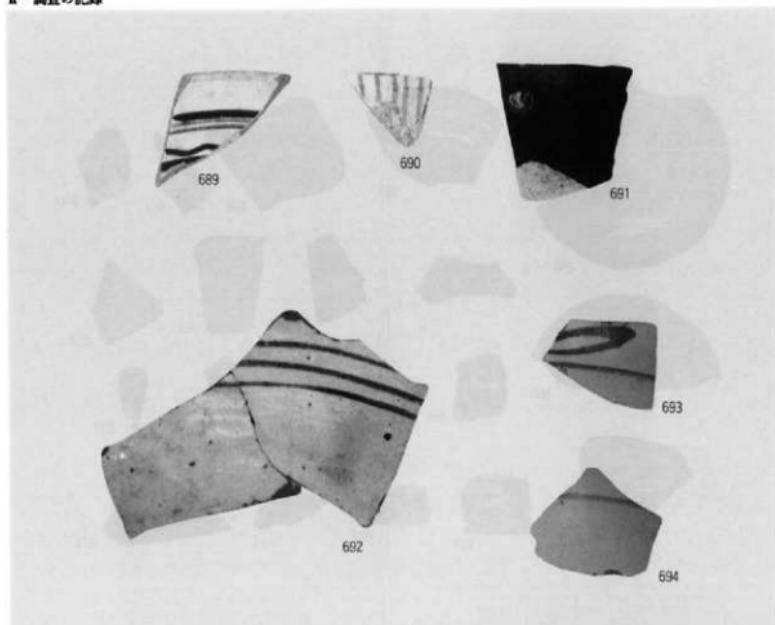
PH. 8 出土元染・明染付磁器(1)

632 : 中央部視面 633 : SK1602 634 - 637 - 640 - 648 - 649 - 651 - 655 : I面(裏側確認  
635 - 636 - 638 - 642 - 644 - 653 - 654 : I面下部含糊 639 - 647 : I面検出時 641 : II面下部含糊 643 : SK164  
640 : SK136 648 - 650 : 掃土 652 : SK159



PH. 9 出土明染付磁器(2)

655・664・666・670・673・675・676・677・678・688 : I面下包合刷 657・684 : SK140 658・661・669 : II面南側模様認  
659・660 : II面下包合刷 655・671 : SK167 662・667 : 排上 663 : SK228 666 : I面模出時 672・681 : SK226 674 : SK225  
679 : SK103 680 : SK210 682 : SK134 683 : II面中央邊模様認 685・687 : I面西側模様認 686 : SK131



PH. 10 出土磁州・タイ・ベトナム陶器、古式土師器（庄内）

689・690：I面直側面平邊縁確認。  
691：SK225 692・693：I面下包含層D-4区  
694：I面下包含層A-4区  
406：SK526

る。

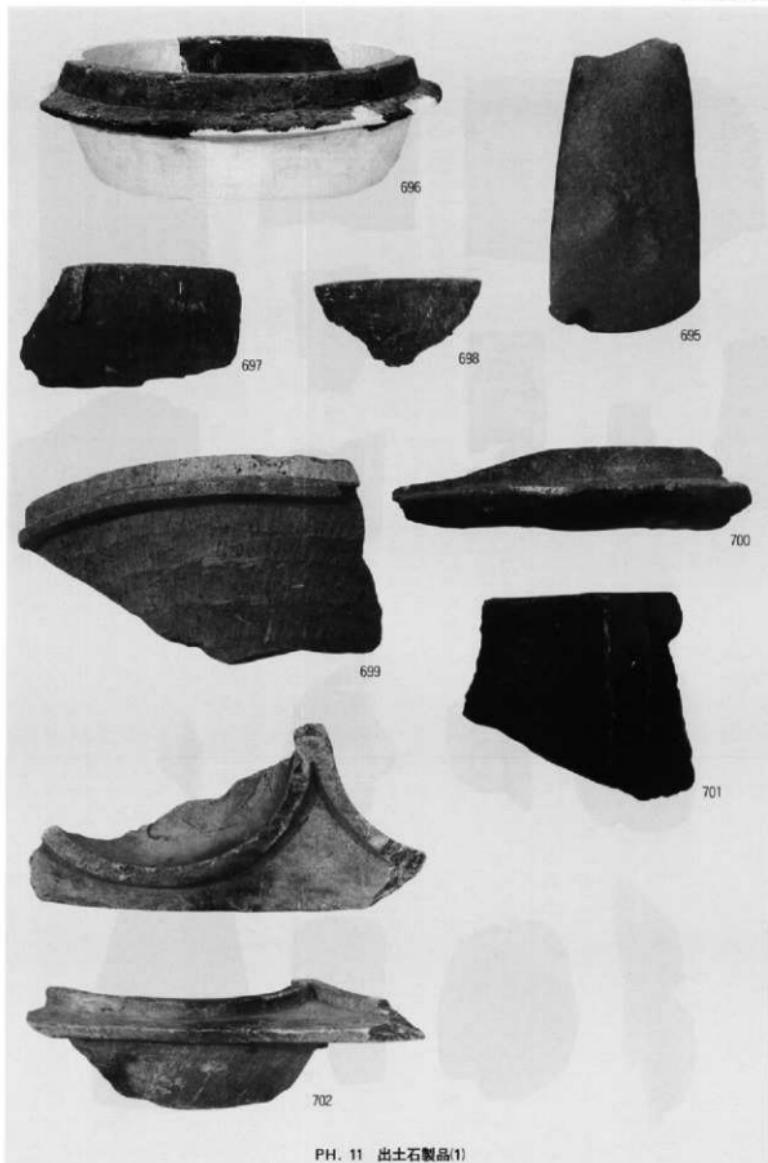
(2) 堅穴住居址 (Fig.28, PL.44)

D・E-4区で検出した堅穴の一部で、大部分は東側未調査区へ広がるため全体の様子は分からぬ。方形のコーナーを1箇所確認したので、一応堅穴住居址の一部として報告しておきたい。確認し得た西側の一辺は長さ5.90mを測り、深さは0.44mである。壁際に添って布留式壺の胴部下半が出土している。調査区内でも点々と古式土師器の破片が出土するので古墳時代前期の集落が広がっていた可能性がある。SK526からは庄内甕と布留式壺が出土している。

(3) 井戸 (Fig.28・30・31・37~39, PL.45・46)

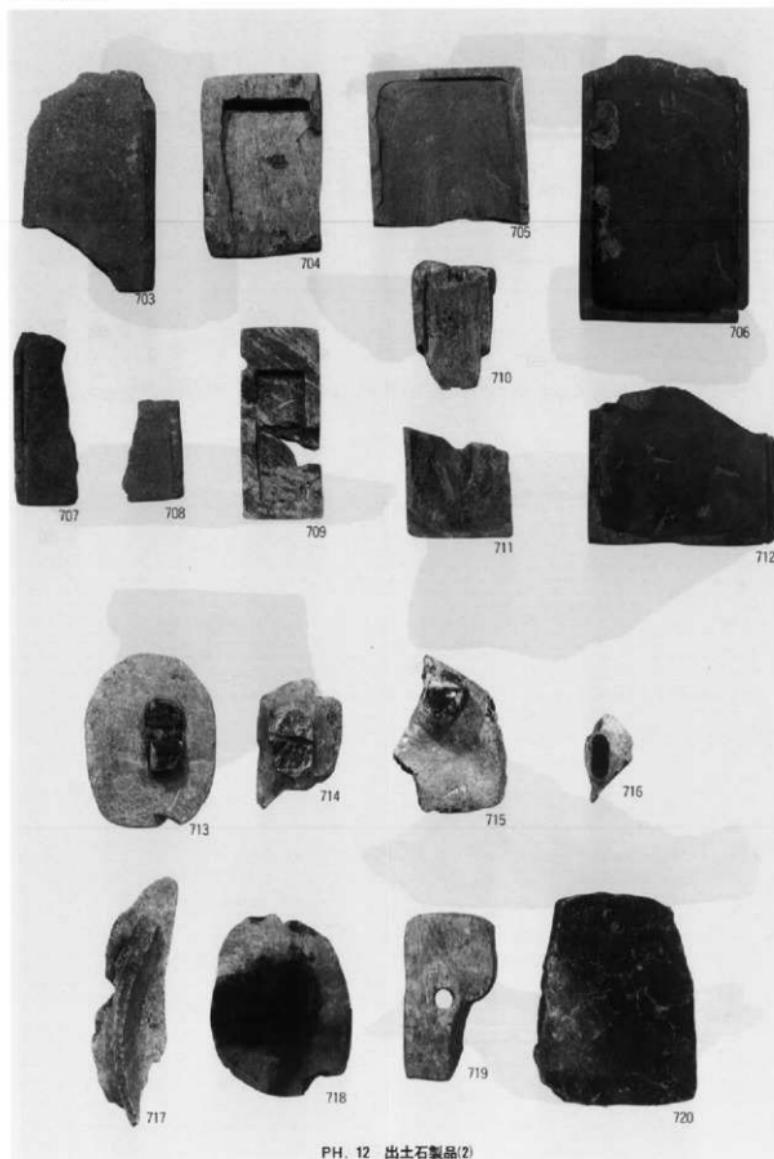
第III面で検出された井戸は14基である。殆ど12~13世紀に属するものである。井戸からは多量の遺物が出土している。

SE427 A-5区に位置し、掘方上面径2.50m、井筒径0.65m、深さ2.89mを測る。Fig.37-432は井筒から出土した白磁甕、433は掘方から出土した白磁甕である。その他井筒から白磁O-II類、掘り



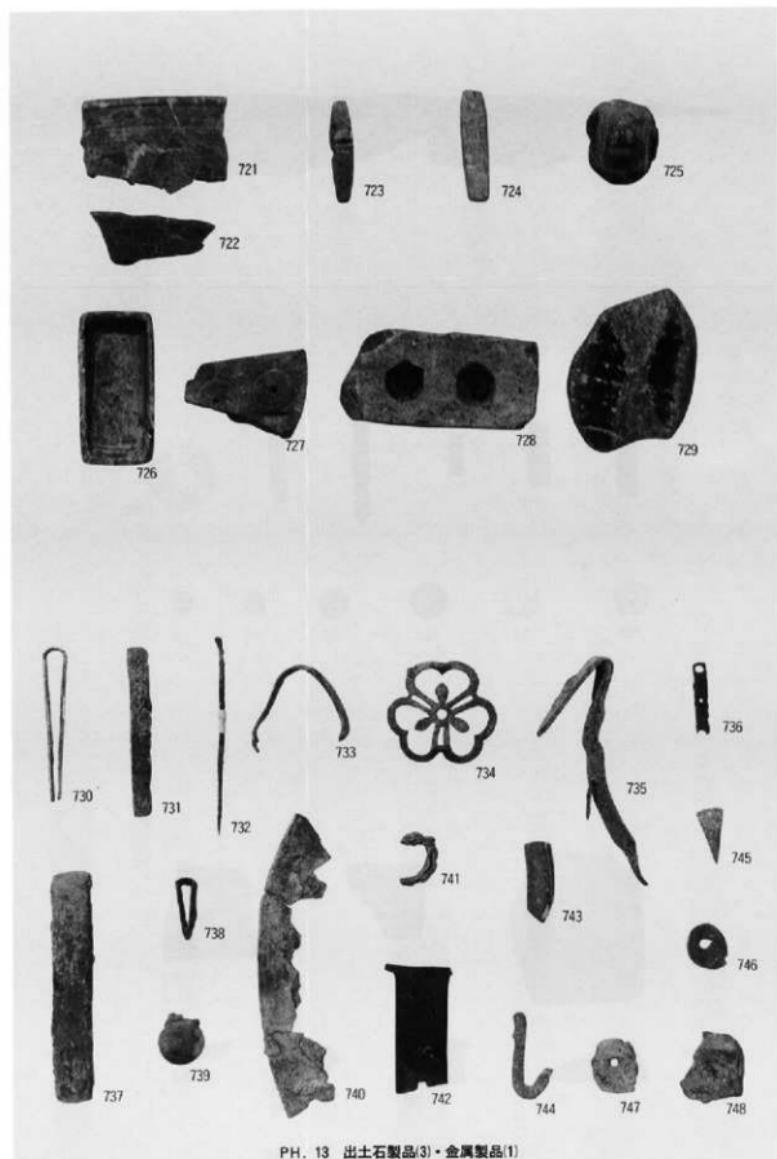
PH. 11 出土石製品(1)

695 : I面被出時 696・701・702 : SI2493 697 : SK439 698 : SK331 699 : I面下包含層 700 : SP229



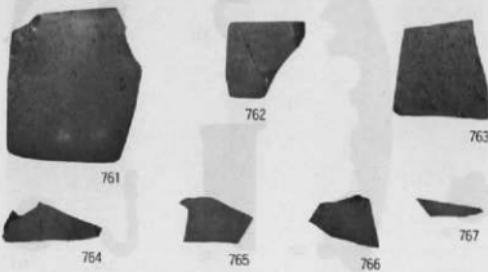
PH. 12 出土石製品(2)

703 : I面下台合彫 704 : II面邊縁挫述 705 - 706 : SK101 707 - 708 : SK284 709 - 710 : SE226  
 710 - 711 : SK292 711 : 横土 712 : I面邊縁挫述 713 : SK453 716 - 718 : II面下台合彫 717 : SK338  
 719 : SK330 720 : SE493



PH. 13 出土石製品(3)・金属製品(1)

721 : SK225 722 : SK201 723 : SK402 724 - 725 + 747 : 上面 F面合斜 726 : SK425 727 : SK355  
 728 : 上面過橋確認 729 : SK269 730 : SK311 731 - 732 : SK139 733 - 734 - 743 : 1面下2面合斜 735 - 739 : SK325  
 736 : SK107 737 : SK111 738 : SK313 740 : SK249 741 : SK236 743 : SK299 744 : SK461  
 746 : SK340 748 : SK248



PH. 14 出土金属製品(2)・玉・ガラス製品

1 : SK103 749 : SK478 750 : SK404 751 - 756 : SK413 752 - 753 : SK107 754 : SK262 755 : SK333  
757 : SK225 758 : SK247 759 : SE201 760 : SK221 761 : SK447 762 - 764 : SK334 763 : SK331  
764 - 766 - 767 : II曲邊構確認 765 : SK334

方から白磁碗II・IV・V類、平底皿、東播系須恵器、C群捏鉢、朝鮮無釉陶器などが出土している。12世紀前半代に位置づけられよう。

SE429 B・C-5・6区に位置し、掘方上面径2.32m、井筒径0.65m、深さ2.78mを測る。遺物は掘り方から白磁碗II・IV・V・VI類、井筒から白磁碗II類、白磁平底皿、瓦器椀、赤土器、須恵器などが出土している。時期は12世紀前半代であろう。

SE432 A・B-1区で検出した井戸で掘方上面径3.10m、井筒径0.8m、深さ2.40mを測る。桶組みの井戸である。掘り方から龍泉系青磁碗I・II類、ロハゲ白磁皿、上質の高麗の碗、糸切りの土師皿などが出土している。13世紀以降のものであろう。

SE433 A・B-1・2区で検出した井戸で、掘方上面径4.6m、井筒径0.65m、深さ3.02mを測る。下部には桶組みが残っていた。遺物は、白磁碗0・II・IV・V・VI・IX類、白磁平底皿II・VI類、ロハゲ白磁皿、白磁水注、同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗I・II類、龍泉系青磁平底皿I類、高麗青磁碗・皿、A群壺、鉢、黄釉盤、C群甕などが出土している。Fig.37-434は褐釉の皿か蓋、435は玳破天目碗の底部である。底径は3.5cm。胎土は灰白色で、釉は光沢があり黒釉と鼈甲色の釉が斑らに広がっている。SE433は出土遺物から13世紀代と考えられる。

SE447 C・D-1・2区に位置し、掘方上面径3.40m、井筒径0.65m、深さ2.71mである。Fig.37-436・437は白磁碗VI類、438はXI類の白磁輪ハゲ碗である。439・440は青磁平底皿、441は黄釉盤である。その他、綠釉陶器皿、朝鮮系無釉陶器、瓦器椀、糸切りの土師坏・皿などが出土している。13世紀代に位置づけられよう。

SE461 D・E-3区に位置し、掘方上面径3.04m、井筒径0.70m、さらに底面は径0.4mで1段窪み曲物を据えている。深さは2.81mである。調査区壁際だったので井筒のみ掘り下げ、井戸掘方は一部しか掘り下げていない。出土遺物は白磁碗II・IV・VI類、白磁平底皿、白磁輪ハゲ皿、龍泉窯青磁碗I類、同安窯系青磁碗I類、B群瓶、C群行平・捏鉢、土師坏・皿などである。Fig.37-442・443は底面糸切り板目圧痕のある土師坏である。12~13世紀代に属するものであろうか。

SE469 A・B-2・3区に位置し、掘方上面径3.0m以上、調査区壁際のため-1.65mまでしか掘り下げていない。井筒は未掘である。出土遺物は龍泉窯青磁碗I類、同安窯系青磁皿、白磁小片、A群黄釉陶器、準A群四耳壺、B群四耳壺、C群捏鉢などが出土している。12世紀後半代の時期であろう。

SE493 D-1・2区で検出した井戸で、掘方上面径2.85m、井筒径0.75m、深さ2.60mを測る。井筒は桶組みでやや東側に片寄る。出土遺物は、白磁香炉、白磁劃花文皿、白磁碗IV・V・VI類、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系青磁碗、磁灶窯系小口瓶、陶器B群水注・鉢、瓦、石鍋、東播系鉢、土師坏・皿などである。Fig.37-444は白磁小碗、455~447は土師坏で口径が大きく底面は糸切り板目圧痕が認められる。448はIX類の白磁輪ハゲ碗である。Fig.38-449は龍泉窯系青磁碗である。大型の碗で口径18.7cm、底径6.0cm、器高8.4cmを測る。胎土は灰色精良で、釉は透明な光沢ある灰緑色を呈する。釉には氷裂がはいる。内面には片切彫りで蓮花折枝文を施す。見込みが小さく古手の碗であろう。450は陶器B群の壺底部である。451は黄釉鐵絵盤である。452も同様の盤である。底部に「許金?」の墨書きと花押が認められる。Fig.39-453は黄釉鐵絵盤、454は常滑焼の甕である。出土遺物から12世紀後半代に位置づけられる。

SE500 D・E-4区に位置し、掘方上面径2.6×2.6m、井筒径0.5×0.55m、深さ2.65mを測る。遺物は、白磁碗II・V類、小碗V類、須恵器高台付坏、陶器C群行平、ヘラ及び糸切りが混在した土師坏・皿などが出土している。12世紀代に属するものであろう。

## (4) 溝 (PL.47)

第III面で3条の溝を検出した。それぞれ部分的な確認なので全体の様子は明確でない。

SD430 B・C・D-5・6区で検出した溝で、最大幅3.10m、深さ0.4mを測り、B-5区からD-6区へ「L」字状に曲がる。出土遺物は青白磁合子、白磁碗II類、高麗青磁碗、須恵器坏蓋、弥生土器などが出土している。中世の造構が多数切り合っているので同時期の遺物が多く見られるが、調査時の観察では搅乱のない溝の埋土から高台付の須恵器坏や坏蓋などが出土していたことから奈良時代後半期の溝と考えたい。

SD443 B-1・2区で出土。幅1.4m、深さ0.6m、長さは2.9mまで確認した。B-2区からB-1区へ延びている。遺物は須恵器、格子タタキ平瓦、朝鮮系無釉陶器などが出土している。奈良時代から平安時代にかけてのものであろう。

SD536 B-3・4区に位置する。幅0.6m、深さ0.16mを測る。出土遺物は須恵器坏蓋がある。奈良時代から平安時代にかけてのものであろう。

## (5) 造構確認他

第III面の造構確認で本米造構に埋まっていたと考えられる遺物を取り上げている。取り上げた遺物は第III面の造構群とほぼ同時期のものである。

Fig.39-471～474は白磁高台付皿で、475～478は白磁平底皿である。477は底部を削り出して輪高台状になっている。487は白磁碗III類、488はIV類の白磁碗である。489はV類の白磁碗であろう。Fig.41-505は同安窯系の青磁平底皿、506は壺文を施した龍泉窯系の青磁碗、507も龍泉窯系の青磁碗である。見込みに「金玉満堂」のスタンプ文がある。502は須恵器高台付の坏である。奈良時代後期のものであろう。

## 4 抽出した出土遺物

各造構出土遺物の頁で取り上げた遺物と重複するものも含まれるが、個別に報告できなかった遺物群を取りまとめてみた。

## (1) 天目・黒釉陶器

PH.4～7は天目及び黒釉陶器である。天目は第71次調査区だけで破片も含めて150点近く出土している。162・163・213は前章で説明した天目碗である。435・491・513～518は玳瑁蓋である。435・513・514は同一個体であろう。口径は16cm位に復元できる。435はSE433の頁で説明したものである。515は器体がラッパ形に開くと考えられ、土はベージュで比較的細かく混じりがない。小孔が認められる。釉は黒褐色にはちみつ色の斑がはいり、斑の上に空色をおびたなまこが出る。斑は内外面に認められる。江西省吉安吉州窯の産であろう。516は玳瑁釉小碗か。器壁は2mmで、土はベージュ味のある白でやや粗い。陶胎になっている。釉は黒の地に茶色透明斑がはいり、斑の方に空色がかかるなまこがかかる。内外面とも斑入りである。吉州窯のものであろう。517・518は口径が14.5cm位に復元でき、器壁は端部が2mm、底部近くが5.5mmである。土はやや灰味があるが白色で、磁質になっている。破断面はやや粗い。釉は褐色鉄銹色で、マットの表面上に黒褐色の斑が散る。一部は黄褐色に溶けかけている。火具合では玳瑁になっただろう。上が吉州であるのとは違い、別の系統の窯であろう。491は前章した銘花玳瑁蓋である。492・519は黒釉蓋である。土は肌色を帯びたやわらかい白で細かく、磁質になっている。釉は漆黒色で光沢があり、全体に施釉後高台を削る。内面には口縁からおりる茶オリーブの線があり、内面を輪花につくるものであろう。華北窯のものと考えられる。520は黒釉鉄銹花の鉢である。土は黄褐色で細かく、陶胎になっている。体部は黒い釉が厚くかかり、体

下半はうすい釉になっている。内面には茶色のサビで連続した縦線文を施す。外面は体部下半近くまで光沢ある漆黒色の釉がかかり、下半は黒褐色を呈する。底部近くから高台外面にかけてうす茶の透明釉がかけられ砂が付着する。疊付及び内底面は露胎となる。新安沈船に類品がある。161・521～527は、口縁内面が白くなる白縁天目である。161は前出のものである。493は内面が口縁部以外白くなる内白天目である。528は文字天目で白で文字か文様を描く。529～531は付高台を有するタイプである。529は口縁部の破片で、土はベージュ色で細かく、磁質に近く溶けている。釉は暗褐色で表面はくもりがかかる。器壁は口縁端部が3.5mm、体部が1.5mmとなっている。531の土はベージュ色で細かく、露胎はねっとりして緻密である。釉は黒褐色で、層は厚くなく釉表面はかすみがかかる。器壁は3mmで、底径4.3mm、高台から内底面にかけ丸味をもって整形されている。530も同様な作りになっている。これらは磁灶窯の土に良く似ているものである。532～535は天目碗の体部から底部である。534・535は褐色を帯びた釉で瀬戸天目であろう。536～569は、胎土が黒灰色でやや粗く、建窯に近いグループである。570～613は胎土が灰色でやや堅い。下輪のかかるものが多い。建窯よりやや遠いグループである。614～623は胎土の色がややうすいグループである。器壁は堅緻である。624～626は白くやや粗い胎土を持つグループである。626は胎土が灰味のある白でやや粗く、磁質になっている。釉は黒又は黒褐色で光沢があり、釉尻はきれいに茶一線になっている。器壁は2mmで、底部中火が4mmの厚さになっている。627～629は玳瑁装である。630・631・183・401は磁州窯定の盃托と盃である。183と401は前出の造構から出土した遺物の實に説明を行なっている。

#### (2) 磁州・タイ・ベトナム陶器 (PH.10)

整理の過程で気づいたものを取り出したが、その後、見落したものに気づき、さらに数点類例が増えている。689～691は磁州窯の鉄絵と黒釉の陶器である。692はタイの白釉の陶器で、鉄絵で平行線が描かれている。693・694はベトナム陶器で、下地に鉄絵が描かれ、その上から白釉がかけられている。

#### (3) 元・明青花磁 (PH.8・9)

元の遺物は少ないが、明の青磁、青花磁などはかなり多く出土している。写真に示していない資料も多数ある。632は小さな破片であるが、元の染付磁器とみられるものである。一部分だけであり全体の様子は分らない。

633～646は明の染付皿である。15世紀の終りから17世紀初めのものまで含まれている。647～655は染付皿である。647～650は福建広東系の染付皿、651～655は漳州窯系の染付皿であろう。656～674は15世紀から17世紀初めにかけての染付皿である。675～688は底が碁笥底になるタイプの明染付皿である。その他、明の赤絵も数点出土している。

#### (4) 石製品 (PH.11～13)

695は第1面の検査時に出土した弥生時代の太型蛤刃石斧である。玄武岩製で基部が欠損しており、残長15.1cmを測る。弥生中期の甕が三面の砂層から出土しているので、本来は下部にあったものが攪乱などによって上に持ち上げられたものであろう。696～702は滑石製の石鍋である。696は口径34.7cmで底部を欠失している。SE493の井筒から川土している。697・698は小型の石鍋である。697は復元口径が19cm程度になるとみられ、外面に縦方向の把手が付く。SF439出土。698はさらに小型になるものと考えられる。SE331から出土している。699・700は鍔が付く石鍋である。701は縦方向に把手が付く石鍋である。スヌが多量に付着している。SE493から川土。SE493からは多数の石鍋が出土している。702は器形がめずらしい二連の石鍋である。残存している部分が二連あるもので、それ以上に続くかどうかは分らない。鍔は共有し、薄く作られ方形に巡っていたものと考えられる。SE4

Tab. 1 出土錢貨一覧

出土地番	銭銘(表)	銭銘(裏)	初鑄年	備考
SK106・I面	寛永通寶	文	寛文8年 元禄10年 寛永13年	1668年 1697年 1636年 新寛永
SK107・I面	寛永通寶			
SK107・I面	寛永通寶			
SK111・I面	不明	不明		上層より出土
SK111・I面	不明	不明		上層より出土
SK115・I面	寛永通寶		元禄10年	新寛永
SK126・I面	○○○重	不明		
SK128・I面	不明	不明		
SE131・I面	寛永通寶	文	元治10年 元和10年 寛永13年	新寛永 新寛永
SE131・I面	寛永通寶	文	元治10年 元和10年 寛永13年	新寛永 新寛永
SK136・I面	寛永通寶			
SK141・I面	不明	不明		
SK142・I面	御熙元寶	廟	淳熙元年	
SE154・I面	寛永通寶	文	寛文8年 延喜元年 寛永13年	1668年 995年(北米) 1636年 井戸掘方より出土
SK157・I面	利治元寶			
SK158・I面	寛永通寶			
SK158・I面	○○○西	不明		
SK158・I面	不明	不明		
SK159・I面	寛永通寶		寛永13年	下層より出土
I面透構確認	天聖元寶			
I面中央部透構確認	元祐通寶			
I面中央部透構確認	不明	不明		小破片
I面中央部透構確認	一錢	明治16年	明治3年 元豐元年 元祐4年	小破片
I面内側透構確認	元祐通寶		1870年 1078年(北米) 1739年	
I面内側透構確認	寛永通寶			
I面西側透構確認	不明	不明		
I面西側透構確認	明元重			一部破損
I面採集	祥符元寶		大中祥符元年	1008年(北米)
I面A5区包含物	寛永通寶	後		当四文
I面A5区包含物	嘉祐元寶			
I面A5区包含物	元豐元寶			
I面B3区包含物	咸平元寶			
I面C3区包含物	開元通寶			
I面D6区包含物	開元通寶			
I面E6区包含物	不明	不明		
I面包含層	不明	不明		
SE201・II面	元祐通寶		元祐元年	1086年(北米)
SK211・Ⅱ面	○○○重			井戸掘方山層より出土
SK212・II面	昭聖元寶		昭聖元年	1094年(北米)
SK212・II面	太平通寶		太平興國元年	976年(北米)
SK212・II面	天○○重			1/2残存
SK212・II面	不明	不明		数枚体内小破片一括
SK212・II面	不明	不明		2枚錯着
SK212・II面	治平元寶		治平元年	1064年(北米)
SK245・II面	不明	不明		
SK245・II面	不明	不明		
SK245・II面	不明	不明		
SE257・II面	不明	不		
S<258・II面	崇寧通寶		宣祐元年	1255年(北米)
SP217・II面	太平通寶		太平興國元年	976年(北米)
II面中央部透構確認	皇宋通寶		宣祐元年	1253年(北米)
II面中央部透構確認	○熙元寶			1/3残存
II面中央部透構確認	不明	不明		
II面中央部透構確認	昭聖元寶		昭聖元年	1094年(北米)
II面西側透構確認	天聖元寶		天聖元年	1023年(北米)
II面西側透構確認	聖宋元寶		聖宋元年	1004年(北米)
II面B3区包含物	宣和通寶		聖宋元年	1101年(北米)
II面E4区包含物	元祐通寶		宣和元年	1118年(北米)
II面F5区包含物	大觀通寶		元祐元年	1078年(北米)
II面E5区包含物	明道通寶		大觀元年	1107年(北米)
II面E5区包含物	○元祐重		明道元年	1023年
SK403・Ⅲ面	紹聖元寶		(治平元年1064年)	治平元寶か?
SK404・Ⅲ面	紹聖元寶	不明	紹聖元年	1094年
SK405・Ⅲ面	紹聖元寶		紹聖元年	1094年
SK469・Ⅲ面	開寧通寶		開寧元年	1069年(北米)
SK469・Ⅲ面	聖宋通寶		聖祐元年	1253年(北米)
SK469・Ⅲ面	祐祐通寶		祐祐元年	1057年(北米)
Ⅲ面A3区透構確認	皇宋通寶		祐祐元年	1253年
Ⅲ面、出土地点不明	不明	不明		1/3残存

Tab. 2 出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	Pl.	Pl.
S K101	略方形土坑	近世	A-1区、北東壁に窓、大部分は収容区外へ広がる、中央に向かって段位に深くなる。後出割分は、東西2.27m、南北2.22m、深さ0.36m。 肥前系統付窓、瓦、廻柱、瓦筒、瓦衣、巴文野丸瓦、廻柱瓦、博多瓦等。		12	
S K102	略方形土坑	近世	B-1区、長さ1.9m、幅1.58m、深さ0.31m。 明の青花器、褐胎陶器、萬葉鏡、花瓶、灯草、肥前系統御器皿。	6	1	
S K103	略方形土坑	16C	B-1・2区、長さ2.11m、幅1.57m、深さ0.51m。 プランはやや隅張りで、方形右轉の形が一部残る。 明の染付皿、兼前大盤・片口・指輪、瓦質火合、土器陶。	6	2	9-14
S K104	円形土坑	16C	A・B-1区、径1.15×1.05m、深さ0.49m。 墓蓋付、瓦質捲縫、捲縫。		2	
S K105	略方形土坑	近世	A-1・2区、残長2.18m、残存幅0.45m、深さ0.22m、大部分は西側未調査区へ広がる。 S K101に切られ、S K106に切れる。 肥前系統御器皿(直・横)、肥前高鍋輪、七切。			
S K106	略方形土坑	近世	A-1・2区、長さ2.30m、残存長1.34m、深さ0.28m、北側には段位付く。 西側未調査区へ広がる。 S K111を切る。 開削系御器皿(直・横・鉢)、肥前系統御器皿(直・横)、吉津三彩大皿、斜玉粗目。			
S K107	方形土坑	近世	B-2区、長さ1.76m、幅1.67m、深さ0.35m、S K118・SE140を切る。 肥前系統御器皿(直・横・鉢)、角皿、火消溝、人骨等。	6	3	12・14
S K108	円形土坑	16C	A・B-2区、径1.18×1.36m、中央部は径0.45mさらに深くなる。 合わせた深さは0.22m。 S K109を切る。 明の染付皿、瓦質捲縫。			
S K109	略方形土坑	近世	A-2区、長さ2.30m、幅0.88m、深さ0.07m。 わきまで浅い土坑。 肥前系統御器皿(直・横)、博多瓦等。			
S K110	不規形土坑	近世	A-2区、残長2.53m、残幅1.32m、深さ0.24m。 S K108・S K111を切る。 大部分は西側未調査区へ広がる。 肥前高鍋輪、七切。			
S K111	略方形土坑	近世	A-3区、残長1.64m、残存幅0.58m、深さ0.20m、S K106・S K112に切られてしまつてはない。 肥前系統御器皿(直・横・鉢・盆・鏡)、青磁器、巴文野丸瓦。			13
S K112	不規形土坑?	近世	B-1区、中央部横断してさかれていたのがさがしていい。 青磁器、土罐瓦、直(水切)、瓦。			
S E113	円形素縁井戸	近世	B-3区、下径2.73×2.25m、底径1.22×1.13m、深さ2.99m。 S K115・S K116を切っている。 明輪付直・肥前高鍋輪(直・横)、肥前系統御器皿(直・横)、捲縫、七切、捲縫。	7	26	13
S E114	円形瓦頭井戸	近世	A 3区、下径2.01×1.92m、井筒高0.79m、一段2回の瓦頭、及の細孔6cm、高さ26cm、厚さ3cmを測る。 井筒高0.6m、瓦頭、深さ1.5m前後、S K119・S K159・S K160を切る。 肥前系統御器皿。		6	
S K115	長方形土坑	近世	B-3区、長さ1.78m、幅1.19m以上、深さ0.84m。 S K116を切っている。 肥前系統御器皿、花瓶、高付碗、別名月見。		6	
S K116	円形土坑	近世	H-3区、径0.76m、深さ0.3m、小量の土坑。 肥前系統御器皿(直・横)、捲縫、七切。			
S K117	略方形土坑	16C	B-2区、長さ3.88m、幅0.65m、深さ0.31m、小型で浅い土坑。 S K119・S K120を切る。 南側は4cm程度さらになくなる。 明輪付、肥前高鍋輪、常滑器。			
S K118	袖内形土坑	-	B-2区、長径1.10m以上、短径0.85m、深さ0.34m、S K121を切る。 土師直片。			
S K119	円形土坑	近世	A・B-2区、短径2.71m、深さ0.21m、小型の土坑。 S K120・S K121を切る。 肥前系統御器皿(直)、肥前系統御器皿(横)、瓦質片口、天目青。			
S K120	略形円形土坑	近世	A・B-2区、長径1.24m、幅1.10m、深さ0.82m、S K109を切る。 肥前系統御器皿、肥前指輪、瓦質大皿。			
S K121	略方形土坑?	-	B-2区、長さ0.86m、幅不明、深さ0.12m、小型で浅い土坑。 捲縫底。			13
S K122	半長方形土坑	近世	A-3区、長さ0.86m、幅0.56m、深さ0.17m、小型で浅い土坑。 S K116を切る。 肥前系統御器皿、肥毛直筒、七切。			
S K123	椭円形土坑	近世	A-3区、底径0.55m以上、底深0.45m以上、深さ0.28m。 S K110を切る。 小型の土坑。 肥前系統御器皿。			
S K124	不定形土坑	近世	半不定形土坑、底径1.02m、深さ0.17m、南側は柱穴状に底さ0.15m底む。 遷構全体は西側未調査区へ広がる。 肥前系統御器皿。			
S K125	丸形土坑	近世	A-4区、長さ0.91m、幅0.65m、深さ0.42m。 磁器便、新平瓦、土師環、直。			
S K126	椭圓形土坑	近世	B-2区、長さ1.10m、幅0.75m、深さ0.34m、底の立ち上がりのコーナーには深い土坑。 S K114を切る。 北側未調査区へさらに広がる。 黒墨、肥前系統御器皿(直・横・盆・豪目)、陶器(笠井・繩・直・波)、博多瓦片、火盆。	6		
S K127	不定形土坑	16C	D-1・2区、長さ1.36m、幅1.05m、深さ0.33m、中央部は段位付く。 肥前指輪、土器、瓦、上削环・直。	6	3	
S K128	椭圆形土坑	16C	D-2・3・4区、長さ1.45m、幅1.33m、深さ0.47m、中央部は段位付く。 丸質土器、瓦質林、瓦・土器、土罐。			
S K129	円形土坑	近世	D-2区、径0.90m、深さ0.19m。 磁器、明の青磁器。		7	
S K130	椭圆形土坑	16C	D-E-2区、長さ1.35m、幅1.30m、深さ0.30m、底面は西側が深くなる。 タンブン火器、瓦質林、土罐环。			
S E131	円形瓦頭井戸	近世	C-D-1・2区、底径2.35m、短径2.08m、井筒深0.85m前後か、瓦頭、枚数は不明、深さ3.31m。 S E128を切る。 肥前系統御器皿、巴文野丸瓦、瓦・高輪付。	7	8	9-13
S K132	不定形土坑	近世	E-1区、長さ1.41m、幅0.96m以上、井筒深2.00m以上、井筒深0.55m以上の部分がさらに深くなる。 合わせた深さは0.41m、半分は北側未調査区へ広がる。 近世新平瓦、明輪付、土器、瓦質林、捲縫底、円筒洗槽。			
S K133	円形土坑	-	D-1区、径0.9×0.95m、深さ0.09m、わきまで浅い土坑。			
S K134	方形土坑?	16C	E-2区、長さ1.05m以上、幅1.00m、深さ0.24m、底が多段段入していた。 S K125を切る。 半分以上は東側未調査区へ広がる。 瓦質付盆、荷重脚、瓦質器、瓦質輪、瓦質枕。	7		9
S K135	方形土坑?	-	E-2区、長さ0.60m以上、幅0.81m以上、底が多くくらわれる。 大部分は東側未調査区へ広がる。 土師直片。			
S E135	円形井戸	近世	E-2・3区、上径2.0m以上、半分以上には東側未調査区に広がり、シートバイル昭和の危険性があつたので一部しか残りっていない。 S K128を切る。 明輪付、肥前系統御器皿、瓦。		8	
S K137	瓦形土坑	16C	D-2区、径1.15m、深さ0.09mの浅い土坑。 S K125を切る。 磁器便、實、瓦質火合、土師環。			

Tab. 2 出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
S K188	円形瓦葺井戸	近世	C-D-2区、長さ10m、幅約8.0m、深さ4.04m、一段10枚の瓦組。 本朝青磁器、肥前系磁器（碗・皿）、把	45		
S K159	略構円形土坑	近世	B-3区、長さ2.20m、幅1.60m、深さ1.26m、S E154を切る。 明代付、肥前系磁器、肥前系磁器、青磁器		13	
S E140	円形瓦葺井戸	近世	S・C-2区、長径3.90m、短径2.92m、深さ4.43m、井筒径0.68m、一段9枚の瓦組。 肥前系磁器、陶器、瓦器、	9	13	
S K141	円形土坑	近世	D-1区、径0.78m、深さ0.97mの小型で浅い土坑。 北側は未調査区へ広がる。 肥前系磁器、片口鉢			
S K142	円形土坑	15~16C	D-1区、径0.75m、深さ0.23mの小型の土坑。 S K143を切る。 明治付窯、青磁器、七輪			
S K143	略構方形土坑	15~16C	D-1区、長さ1.25m以上、幅0.80m、深さ0.13m。 S K144を切る。 青磁器			
S K144	略構円形土坑	近世	D-1区、長径1.65m、短径1.50m以上。 深さ0.38m。 北側が一段深くなり、鐵錠、鍵などが発見する。 肥前系	6	4	
S K145	円形土坑	近世	D-3区、底1.04m、深さ3.05m。 記載系磁器（碗・皿・鉢）、花瓶、赤绘ビン付施壺、青磁器、瓦反板、白			
S K146	不定形土坑	16C	A-1区、長径1.40m以上、幅1.17m以上、深さ0.56m、大体半分は未調査区へ広がる。 青磁器文様、油灰瓦、白			
S K147	略構円形土坑	15~16C	D-1区、底径0.78m、短径1.18m以下、深さ0.58m、南側が一段深くなる。 一部試掘トレンチによって切ら			
S X145	長方形石礎造	近世	D-E-3区、内坑は長さ1.23m以上、幅0.46mで一段ない二段の石積残存。 東側はシートバイルで埋められて	6	7	
S K148	方形状石礎造	近世	いる。 肥前系磁器、七輪、小原青磁			
S K149	方形状土坑	16C	D-E-2区、長さ1.03m、幅0.92m、深さ0.73m。 白磁器V-VI類、白磁器、中世青磁C青瓷碗、土器類（系、	6	4	
S K150	方形状土坑	16C	等切）			
S K151	不定形土坑	近世	D-3区、長さ1.62m以上、幅1.20m、深さ0.31m、試掘トレンチによって東側部分が壊れられている。 肥前系			
S K152	略構方形状土坑	16C	磁器、肥前系磁器、土器青磁			
S K153	略構方形土坑	16C	D-2区、長さ0.78m、幅0.66m以上、深さ0.57m小窓で浅い土坑。 東側部分は試掘トレンチで壊れられている。			
S K154	略構方形土坑	16C	E-4区、底径0.78m以上、幅0.56m以下。 明代付窯、青磁器、竹付瓶、白磁、青磁			
S K155	円形瓦葺井戸	近世	B-4区、底径1.32m以上、幅1.50m以上、深さ2.18mの深い土坑。 東側は建物基礎被覆で壊されている。 S K151に切	6		
S K156	円形瓦葺井戸	近世	られる。 肥前系磁器、青磁器、土器類			
S K157	圓形土坑	16C	E-2区、長さ0.94m以上、幅0.59m、深さ0.28m、S E156に切られているので全長は不明。 肥前系磁器、高麗	6		
S K158	圓形土坑	16C	B-2・3区、幅0.85m、井筒径0.60m、深さ2.52m、井筒は一段10枚の瓦組、下部だけ残存。 纋平瓦、肥	9	30	
S K159	圓形土坑	16C	前倒瓦、肥前系磁器			
S K160	圓形土坑	16C	A-B-1区、底1.28m、深さ0.52m、東側部分は施物系基礎層によって壊されている。 李朝陶器			
S K161	圓形土坑	16C	E-4区、底径0.64m以上、深さ0.76m、深さ0.39m。 東側半分は未調査区へ広がる。 常滑器、李朝陶器、土器			
S K162	圓形土坑	16C	盤			
S K163	圓形土坑	16C	E-4区、底径0.64m以上、深さ0.81m以上、底辺1.00m、西側の半分は朱調盤区へ広がる。 明の染付窯、巴文瓦、肥	8		
S K164	略構方形状土坑？	近世	前倒瓦、肥前系磁器、五色磁、明の朱調盤（赤須目）、猪絞			
S K165	略構方形状土坑	近世	D-E-2区、長径1.20m、幅0.92m、深さ0.65m、浅い土坑で肥前系の甲羅付軽体部分が出土。 猪絞	6	5	
S K166	不定形土坑	-	D-6区、長さ1.14m、幅1.07m、深さ0.66m、浅い土坑で肥前系の甲羅付軽体部分が出土。 猪絞	6	3	
S K167	略構方形状土坑	近世	D-6区、底径0.85m、底深0.78m、深さ0.08m、浅い土坑で陳子鳥の甲羅3-4軽体部分が出土。	6	5	
S K168	圓形土坑	-	D-0区、底径0.64m、深さ0.63m、非常に浅い土坑で陳子鳥の甲羅2軽体部分が出土。	6	6	
S K169	略構方形状土坑？	近世	A-3・4区、長さ1.20m以上、幅1.05m、深さ0.3m、西側部分は未調査区へ広がる。 明の染付窯、巴文瓦、肥			8
S K170	略構方形状土坑	近世	前倒瓦、肥前系磁器、五色磁、明の朱調盤、猪絞			
S K171	略構方形状土坑	-	A-3区、底径2.40m以上、底深1.00m以上、深さ0.33m、西側が一段深くなる。 S K167を切る。 明の染付窯、			
S K172	略構方形状土坑	近世	底深1.00m以上、底深1.00m以上、深さ0.33m、西側が一段深くなる。 南側に張り出し部分がある。 明の染付窯、			
S K173	方形状土坑？	16C	巴文瓦、長さ1.08m、幅0.32m、底深0.34m、石積遺構の一端が残る。 半分は東側未調査区へ広がる。 丸器	6	6	
S K174	略構方形状土坑	13~14C	E-5区、底径0.70m以上、幅0.62m、深さ0.10m、小型で浅い土坑。 亂器はさじで0.66mの深さ。 S K172を切る。			
S K175	略構方形状土坑	14C	地槽開挖			















## II 調査の記録

Tab. 2 出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	Pl.	P.I.L.
S K509	横内形土坑	12C	C-S区、長径0.76m、幅径0.58m、深さ0.21m。小形の土坑。白磁瓶V類、瓦器類、土輪环(余切)	27		
S K510	略円形土坑	12C 初 期	D-S区、径1.62m、深さ1.03m。白磁瓶II・IV・V類、高台付豆I類、正束系、土器器類、土輪环(余切)	27	43	
S K511	略長方形土坑	13C	D-S区、長径1.10m、幅0.95m、深さ0.57m、S K509に切られている。白磁瓶II類、青白磁口先鋭、瓦器類、土輪环(余切)	28		
S K512	長楕円形土坑	12C	D-S区、長径1.30m、幅0.55m、深さ0.26m。白磁瓶壳尖、無軸陶器、土輪环、皿(余・邊切)	28s		
S K513	内円形土坑	12C	D-S区、径0.63m、深さ0.37m、小型の土坑。土輪环、皿			
S K514	土坑	12~ 13C	C-S区、基盤が砂質で部分的に確認であったので、測量時に削除。中國陶器B肩四耳盤、坦底質盤、土輪环			
S K515	土坑	12~ 13C	C-S区、測量時に削除。白磁器、假足青磁環I類・皿、同安系青磁碗I類、中國陶器B斜鉢、瓦			
S E516	円形埋立井戸	12C 初	C-D-S区、桶形上部0.30m、井筒部0.65m、深さ2.57m、両井の深さ1.0m、傾斜。白磁瓶II・IV・V類・皿、青白磁盤、高麗白花蓮文陶、中國陶器A・B・C系、須彌器、瓦器類、土輪环	6		
S K517	横内形土坑	12C	D-S区、長径0.84m、幅0.64m、深さ0.91m。小型の土坑。白磁瓶VI類発見			
S K518	圓形土坑	12C	D-S区、深0.76m、深さ0.32m、北側S K226の東方で切られている。白磁瓶V類、瓦器类			
S K519	横内形土坑	13C	C-D-S区、長径1.45m、幅径0.32m以上、深さ0.77m。雞泉系青磁碗I類・皿、同安系青磁碗・皿、白磁瓶・皿、青白磁口先鋭、輪轉四耳盤、更津衛豪、中國陶器B斜鉢・皿・C斜水注・皿・土輪环、皿(余切)			
S K520	納縫形土坑	12~ 13C	C-D-S区、長径0.75m、幅径0.62m、深さ0.24m、小型の土坑。白磁瓶壳尖、土輪环			
S K521	内円形土坑	12~ 13C	C-S区、径0.98m、深さ0.40m。S K422に切られている。雞泉系青磁碗I類、白磁碗IV類、無軸陶器類、土輪环(余切)			
S K522	土坑	12C	長脚四耳盤、青白磁、瓦			
S K523	円形土坑	12~ 14C	B-C-D区、径0.5m、深さ0.35m、S K474・S K504に切られている。雞泉系青磁碗II類、白磁碗IV類、瓦器類、直底盤等付豆环、瓦			
S K524	横円形土坑	13C	B-C-D区、長径1.38m、幅0.69m、深さ0.24m、S 3181に切られる。白磁口先皿、雞泉系青磁碗、四耳車・瓦、土輪环・皿、海斗千瀬	28		
S K525	略方形土坑	11~ 12C	C-D区、長さ0.75m、幅0.70m、深さ0.45m。白磁碗IV・V類、撫底器皿、土輪环			
S K526	略方形土坑	12~ 13C	B-C-D-E区、一部分のみ確認。幅0.40m以上、堅底丸坂社の残瓦かもしれない。S 3326に切られる。庄内系青磁碗			
S K527	略方円形土坑	12C	A-B-C-D区、長さ2.92m、幅1.40m以上、深さ0.60m。S K405に切られる。白磁碗IV類、同安系青磁碗、中國陶器A、須彌器等、皿、瓦器類	28	35	6-7
S K528	横内形土坑	11~ 12C	C-S区、長径0.75m、幅0.60m、深さ0.35m、小型の土坑。中國陶器、瓦、土輪环			
S K529	横内形土坑	11~ 12C	C-S区、長径0.94m以上、幅0.66m、深さ0.38m。小型の土坑。白磁瓶II・IV・V類・皿、瓦器類、土輪环、皿			
S K530	内円形土坑	11~ 12C	C-S区、径0.74m、高さ0.67m、S K313・S K450に一部切られる。白磁碗IV・V類・皿、無軸器、瓦器類、土輪环、皿、須彌器、瓦	28	43	
S K531	横内形土坑	11~ 12C	C-S区、長径0.74m、幅0.63m、深さ0.32m。白磁瓶II・IV類・皿、小碟、須彌器			
S K532	横円形土坑	12~ 13C	C-D区、長径0.80m、幅0.50m以上、深さ0.30m、土色の違いでS K531と区別したが、もともと同一の遺構と考えられる。土輪环			
S K533	略方形土坑?	11~12 C	C-S区、一部分のみ確認。白磁瓶IV・V類・皿、雞泉系青磁碗、雞泉系中国陶器、瓦器類、土輪环、皿			
S K534	土坑	12~ 13C	C-D区、一部分のみ確認。同安系青磁碗・皿、雞泉系青磁碗I類、白磁瓶V・VI類、土輪环、皿			
S K535	略長方形土坑	12~ 13C	C-D区、S K483の坑底で確認した土坑。白磁碗、中國陶器、瓦器類			
S D536	溝	未調	B-C-D区、幅0.66m、深さ0.16m。須彌器			

陶磁器の分類は、「博多出土貿易陶磁分類表」福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書IV 福岡市埋蔵文化財調査報告書105集 別冊(1984年)による。

93出土。703～712は石觀である。703・707・708は小豆色を呈し石材が良く似ている。砂岩製であろうか。703はⅠ面下包含層、707・708がSK284から出土している。704はⅢ面の遺構確認時に出土したもので、滑石できており、幅6.1cm、長さ9.4cmを測る。705・706は近世の硯で、共に頁岩製か。SK101から出土している。705には裏にかぶりものをした人物の顔が描かれている。709はSE226の掘方から出土した小型の硯である。幅4cm、長さ10cmで、石材には黄白の脈が入っている。頁岩であろうか。710はSK292下層から出土した硯で、滑石製石鍋を再加工して作られた小型のものである。711・712は頁岩製か。近世のものである。

713～718はツマミのあるコテ状の石製品である。すべて滑石製で石鍋の再加工品と考えられる。713は長さ9.4cm、幅6.9cmを測り、裏が窪む。SK453から出土している。714はSK292下層から出土。715はSE226掘方から出土したものである。ともに裏側が窪む。718はⅡ面下包含層から出土。717は湾曲した細長い把手が付く。SK338から出土。718はⅡ面下包含層から出土したもので、やはり裏側が窪んでいる。713～718はスヌが付着している。719・720は方形を呈し、孔を有する滑石製品である。719は中央部に720は上端部に孔を穿つ。719はSK330から出土している。720はSE493井筒から出土したもので、長さ11.3cm、幅8.6cm、厚さ1.5cmを測る。全面にスヌが多量に付着している。

721・722は滑石製の鉢である。口縁は玉縁状に作り、厚さ4mmである。721はSE225掘方、722はSE201掘方から出土している。723・724は碇石のミニチュアであろう。723は長さ4.2cmで中央部の相対する所に幅8mm程の切り込みを入れる。SK402出土。724はⅡ面下包含層から出土したもので、長さ4.6cmである。これは中央部に切り込みは入れない。725はツマミのついたコテ状の石製品であるが非常に小さい。裏面は半円状に丸くなっている。Ⅱ面下包含層出土。726は滑石製のミニチュアの硯である。SK425から出土したもので、長さ6.2cm、幅3.1cm、厚さ1.3cmを測る。727は緑色変岩製の鉢型である。リングと截頭円錐形の部分がセットになったものである。房飾りの根付の部分であろうか。リングの外径は1.8cmである。SK255出土。728は滑石製でふたつの窪みを粗く削り込んだものである。滑石ミニチュア品の未完成であろうか。Ⅲ面遺構確認で出土している。729滑石製石鍋を再加工した石鍤である。SK260から出土している。

#### (5) 金属製品 (PH.13・14)

金属製品には鉄製品と銅製品がある。鉄製品の中には鉄釘なども含まれるが全て割愛している。鉄釘はかなりの数が出土している。鉄滓なども多く出土しているが殆ど近世に属するものであったので報告では取り上げていない。

PH.14-1及びPH.13-730～748は金具製品である。その中で、1と732だけが鉄製品で、それ以外は全て銅製品か青銅製品である。730・731・733は毛抜である。730は長さ6.6cm、体部の幅は0.6cmである。両方とも先端部が少し折れている。SE131掘方から出土。731は半分だけ残存した毛抜で、732は耳搔である。ふたつともSK139から出土している。733は曲がって歪んでいるが小型のタイプである。Ⅰ面下包含層から出土。734は飾り金具で、幅4.5cm、裏に2箇所足があり、その部分に小孔が開いている。735は留め金具のひとつであろうか、中央部に銅釘が打ち込まれたままになっている。先端部は、一方は次第に細くなり、もう一方は丸味を持った段3段で細くなっている。全長は13.4cm以上、幅1.2cm、厚さ1.5mmを測る。SK325中層から出土している。736は何らかの留め金具である。SK107から出土。737は小柄の柄の部分である。長さ9.9cm、幅1.7cm、最大厚0.4cmである。SK111から出土。近世のものであろう。738は刀のハバキである。高さ2.6cm、上端幅0.8cmを測る。SE113掘方から出土。739は飾り金具のひとつであろうか。径1.9cm、高さ3mmのボタン状を呈し、下端に長さ5mmの三角形をした爪が2箇所付く。SK325から出土している。740は端部の断面が三角

### III おわりに

形に近くなり、全体は円形を呈する銅製品である。残存長は13cmで非常に薄い作りになっている。懸仏の周辺の一部であろうか。SK249から出土したものである。741はSE226から出土した銅製品である。鋸が進んで何か分からぬ。742は飾り金具のひとつであろう。先端は何かに打ち込むよう足が付いている。表面には毛彫りで花文をあしらう。下端は窓の所で折れている。残長5.6cm、幅2.2cm、厚さ2.2mmである。SK292上層から出土している。743は不明銅製品、744も器種が分からぬ銅製品である。釣針状を呈するが平たくて釣針ではなかろう。SK461から出土。745は石突き状の銅製品であるが、長さが2.4cmで小さなものである。SE226掘方上部から出土している。746はSE140から出土した雁首鏡である。キセルの雁首を押し潰している。747・748は器種の分からぬ銅製品である。747は中央部に孔を穿つ。II面下包含層出土。748はSK248から出土している。

#### (6) 玉

749～751は管玉である。749は長さ2.65cm、径6mm、碧玉製である。SK478から出土。750は長さ2.3cm、径6mm、真岩製か。SK404から出土。751は長さ1.4cm、径5mmで碧玉製である。SK413から出土している。752・753はSK107から出土したもので器種は分からぬ。752は長さ4.3cm、径5mm、753は長さ2.8cm、径5mmである。754はSK292下層から出土した円形のガラス製品である。径2.3cmで中央部に7mmの孔とその上に小孔がある。755～760は丸玉である。760が土製である以外は全てガラス製である。755は径1.2cm、高さ1.25cmで緑色を呈する。SK333から出土。756は径、高さとも1.2cmで青色を呈する。SK413から出土。757は径1.2cm、高さ1cmで光沢のある青色を呈する。SE225から出土。758は径1cm、高さ9mmで青色を呈する。SK247から出土。759は径8mm、高さ4mmでSE201から出土。760は径8mm、高さ7mmでSK221から出土している。

#### (7) ガラス製品 (PII.14)

調査区からガラス器の破片が7個出土している。その内、口縁部が2個あり、それぞれ厚味が違うので少なくとも2個体以上は存在するものと考えられる。色は全て薄い黄白色である。761はSE447掘方、762はSK334、763はSK231、764・766・767はII面中央遺構確認、765はSK334からそれぞれ出土している。

#### (8) 銭貨 (Tab. I)

各調査面から北宋錢を中心に百枚近くの錢貨が出上した。詳細は一覧表にとりまとめている。

## III おわりに

博多71次調査では、弥生時代から近世にかけて多数の遺構と多量の遺物が出土した。弥生時代の明確な遺構は検出できなかったが、古墳時代初頭には集落が形成されている。現在の御供所町から祇園町にかけては古墳時代の集落が広い範囲で展開している。外米系の土器も多く今後注目されるところである。今回の調査では、古代末から中世にかけて出土遺物に見るべきものが多い。天日は破片も含めて150点近く出土しており、玳破天日の優品も出土している。耀州窯や吉州窯、磁州窯の製品も注目されるところである。また、景德鎮で焼かれた刻花唐子文鉢は合わせて4点出土している。その他、綠釉陶器類、白磁、青白磁、青磁などにも優品がかなり出土している。博多遺跡群の中でも富裕層が居住していた地域のひとつであろう。聖福寺の門前であり、博多62次調査で出土した道路遺構の北側にあたり、博多35次調査で出土した道路推定線の西側に位置する部分になる。中世の終りには、タイ・ベトナム陶器が出土し、元染付磁器、高麗や李朝の陶磁器なども出土している。「海のシルクロード」の終着点のひとつとして博多遺跡群の占める位置は重要である。

## 博多遺跡群第71次調査で出土した白磁片とそれに付着した 緑色ガラスなどの化学分析および鉛同位体比測定

名古屋大学名誉教授 山崎 一雄  
奈良国立文化財研究所 肥塚 隆保  
室蘭工業大学 白幡 浩志

### 1. はじめに

博多遺跡群第59次および第62次調査で出土した緑色ガラスについてはさきに化学分析値と鉛同位体比を報告した（注1、2）。また第79次調査で発掘された緑色ガラス容器についても現在報告が印刷中である（注3）。ここでは第71次調査で出土した白磁片とそれに付着した緑色ガラスおよびルツボ破片などについて報告する。出土場所はII面下包含層C-2である（詳細は別項の下村の記載参照）。

### 2. 白磁片とルツボ破片などの形状

白磁片は容器の円形の蓋の約1/3で、少量の黒色粒子を含む灰白色の胎土にやや青味を帯びた半透明の釉がかかっている。その上に融解した緑色のガラスが流れ落ちて固まっている（写真参照）。調査したルツボ片は2個で、1個は三角形、他の1個は不規則な四角形で、後者の上に黄褐色の変質したガラスが付着している。ルツボの破片の表面は粗雑で灰白色、断面は黒色で、白色の粒子を多く含んでいる（写真参照）。

### 3. 分析法

白磁片とルツボの胎土についてはX線回折法により鉱物成分を、また付着しているガラスについては蛍光X線分析法とX線回折法により、それぞれの化学成分と鉱物成分を分析した。さらにガラス中の鉛の同位体比を室蘭工業大学の Finnigan Mat 262 質量分析計により測定した。

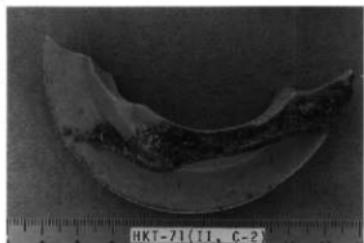


写真1 白磁片についている緑色ガラス。

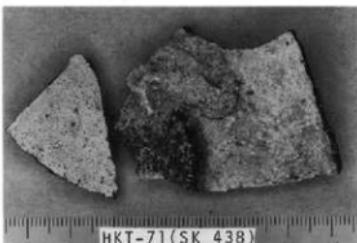


写真2 ルツボ破片2個。四角形の方に変質した  
ガラスが付着している。

#### 4. 分析結果

##### 4. 1 白磁片とルツボの胎土。

X線回折法により胎土中に認められた鉱物は次の通りである。

白磁片：石英、ムライト（やや多量）

ルツボ：石英、ムライト（やや多量）、クリストバライト（少量）

白磁片の胎土中にはムライトは生成しているが、クリストバライトは生成していないから、両者の生成温度の中間、約1000-1200度で焼成されたと推定される。ルツボはクリストバライトが生成しているから、1200度以上で焼成された上、ガラスの融解に使われたのであろう。なお白磁の胎中には結晶質の物質はX線回折法では認められなかった。

##### 4. 2 白磁片の軸

蛍光X線分析法によれば、軸の化学組成は次の通りで、灰軸である。

SiO <sub>2</sub>	72.5%	CaO	4.33%
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	12.8	MgO	0.79
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.77	K <sub>2</sub> O	6.04
TiO <sub>2</sub>	0.16	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.89
MnO	0.57	(計)	99.85%)

他にRb、Sr、Zrの微量が検出される。Naは定量できるほど含まれていない。

##### 4. 3 緑色ガラス

蛍光X線分析法によれば、ガラスの化学組成は次の通りである。

SiO <sub>2</sub>	43.6%	Na <sub>2</sub> O	2.08%
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.87	K <sub>2</sub> O	10.8
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.01	PbO	34.6
CaO	3.74	CuO	1.03
MgO	2.22	(計)	99.95%)

他に微量のTi、Mn、Snが存在する。

このガラスは銅で緑色に着色されたカリ鉛ガラスであるが、融解して流れ落ち、他のものと接触してやや変質していると思われる（5 考察参照）。

#### 4.4 変質したガラス

ルツボに付着していた黄褐色のガラス状物質は緑色ガラスが土中で変質したものであり、蛍光X線分析法によって元のガラスの成分である Si、Pb、Fe、Ca、Mg、K、Na などのほか、Cl、P などが検出される。X線回折法によれば主成分は  $Pb_3Cl(PO_4)_2$  塩化トリス（磷酸）五鉛（鉱物名：緑鉛鉱、pyromorphite）である。この化合物はさきに第59次、第62次および第79次の調査でも鉛ガラスの変質した部分から発見されており、鉛ガラスが土中で動物、人間の遺体、排泄物などと接触していたために生成したと考えられる。

#### 4.5 ガラス中の鉛の同位体比

変質していない緑色のガラスについて測定した鉛の同位体比は次の通りである。比較のため第59次、62次、79次調査で出土したガラスの鉛の同位体比なども同時に示す（表1）（図1参照）。

表1 鉛同位体比

試 料	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
1 第59次鉛	18.473	2.1118	0.8479
2 第62次鉛	18.455	2.1099	0.8475
3 第71次鉛	18.449	2.1089	0.8473
4 第79次鉛	18.098	2.1268	0.8622
5 対州鉱山鉛（注4）	18.476	2.1099	0.8479

鉛同位体比の標準偏差  $2\sigma$  は  $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$  についてそれぞれ  $\pm 0.02\%$ 、 $\pm 0.01\%$ 、 $\pm 0.01\%$  以下である。

第71次の鉛の同位体比は第59次、第62次および対州鉱山産の鉛の値に近く、第79次の鉛とは異なる（5 考察）。

#### 5. 考察

##### 5.1 ガラスの組成

既に説明したように今回のガラスは白磁片の上に流れ落ちて、やや変質しているから、元の組成は明確ではない。しかし三成分系  $K_2O-SiO_2-PbO$  のカリ鉛ガラスとすれば、その組成は第62次調査で出土した緑色ガラスに近いものであろう（注2）。すなわち  $PbO$  49%、 $SiO_2$  41%、 $K_2O$  10%で、融解点は約720度のガラスに類似したものではないかと考えられる（注5）。

##### 5.2 ガラス中の鉛の同位体比

測定された同位体比を図示すれば、図1のように第59次、第62次調査のガラスの数値に近く、これ

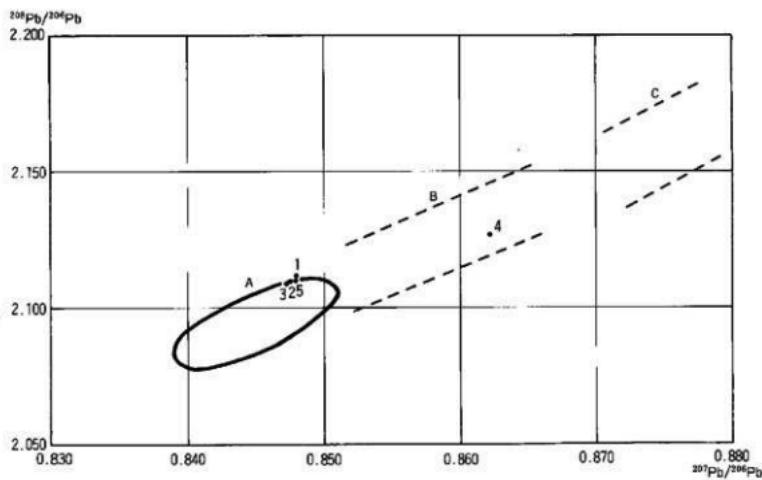


図1 鉛同位体比

図中の1、2、3、4、5は表1の試料と同じである。

1: 第59次鉛、2: 第62次鉛、3: 第71次鉛、

4: 第49次鉛、5: 対州鉱山鉛

Aは日本産鉛鉱石の同位体比の範囲

Bは中国後漢式鏡の同位体比の範囲

Cは中国前漢鏡の同位体比の範囲

らと同じ対州鉱山の鉛鉱石が使用されたものと考えられる。これに対し第79次のガラス壺の鉛の数値は明らかに異なっており、中国産の可能性がある。もしこの差、即ち产地の差が作られた製品の差と関連しているならば、非常に興味が深い。ただ第59、62および71次調査で出土したガラスでどのような器物がつくられたか不明であるのは残念であるが、将来の調査に期待したい。

謝辞—白磁片の実測図をつくり、種々御教示を賜った森本朝子氏と写真を撮影された名古屋工業大学内田哲男博士にあつく感謝する。

注1 山崎一雄、肥塚隆保、福岡市埋蔵文化財報告書、第328集(1993)

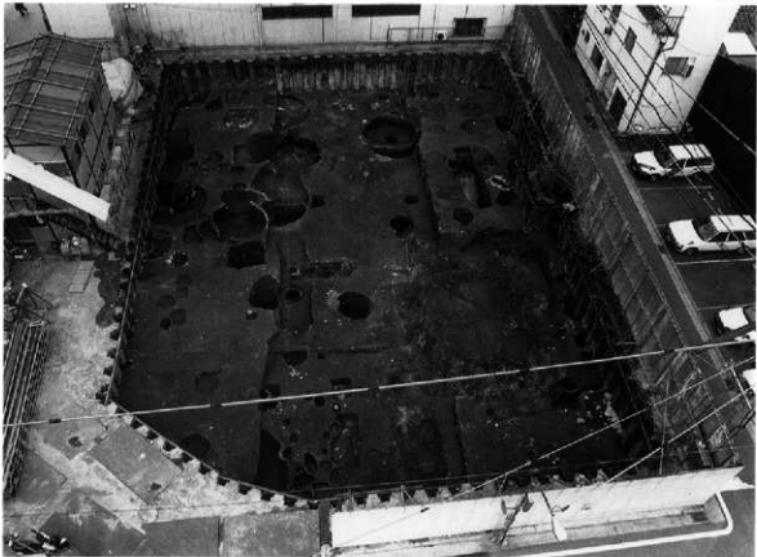
注2 山崎一雄、肥塚隆保、白幡浩志、同上報告書、第397集(1994)。

注3 同上著者、同上報告書、第450集(1996)。

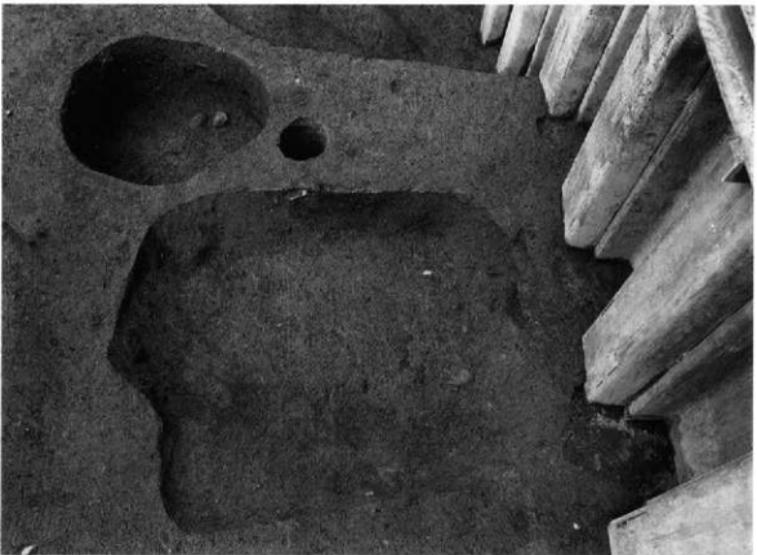
注4 馬淵久夫、平尾良光、考古学雑誌、73巻(1988)199; 75巻(1990)385。

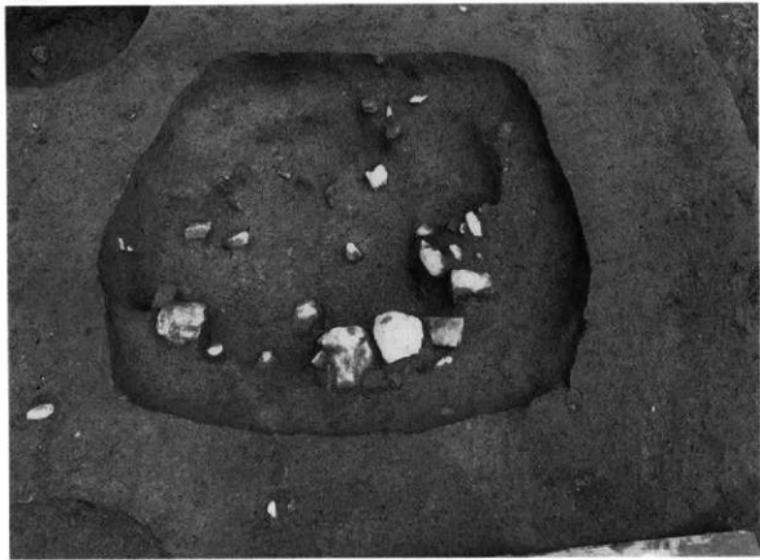
注5 R. F. Geller, E. N. Bunting: J. Research National Bureau of Standards, 17 (1936) 283.

# 図 版



▲ (1) 第 I 面遺構出土状況全景（南から） ▼ (2) SK102 出土状況（東から）

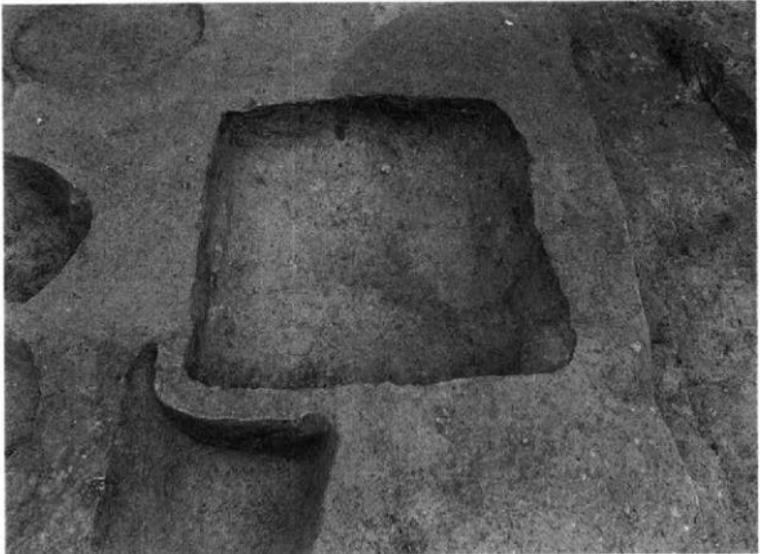




▲ (1) SK103 出土状況（南から）

▼ (2) SK104 出土状況（南から）





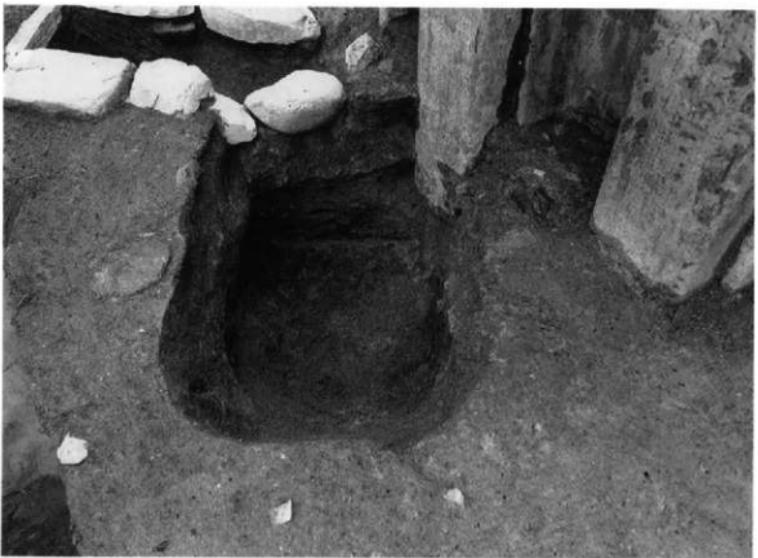
▲ (1) SK107 出土状況（南から）

▼ (2) SK127 出土状況（南から）





▲ (1) SK144 出土状況（東から） ▼ (2) SK149 出土状況（南西から）





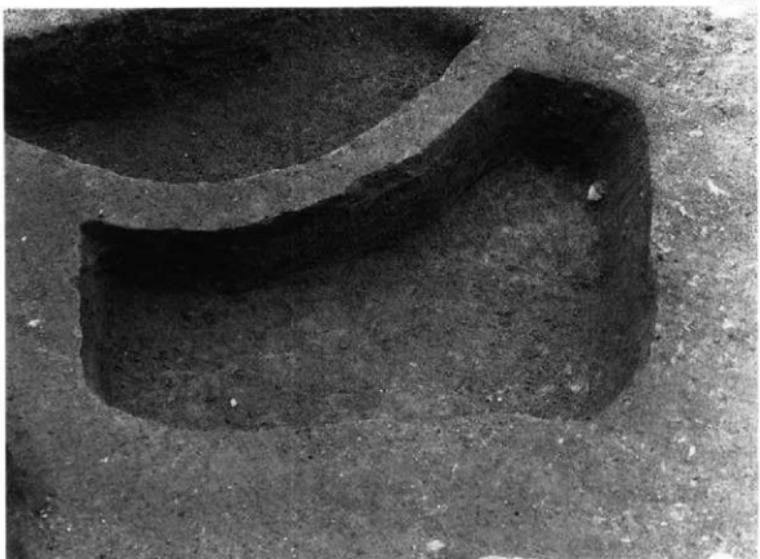
▲ (1) SK160 出土状況（北から） ▼ (2) SK161～163 出土状況（東から）





▲ (1) SK167 出土状況（西から） ▼ (2) SK173 出土状況（西から）





▲ (1) SK177 出土状況（西から） ▼ (2) SX148 出土状況（南東から）





▲ (1) SE114 出土状況（西から）

▼ (2) SE131 出土状況（西から）





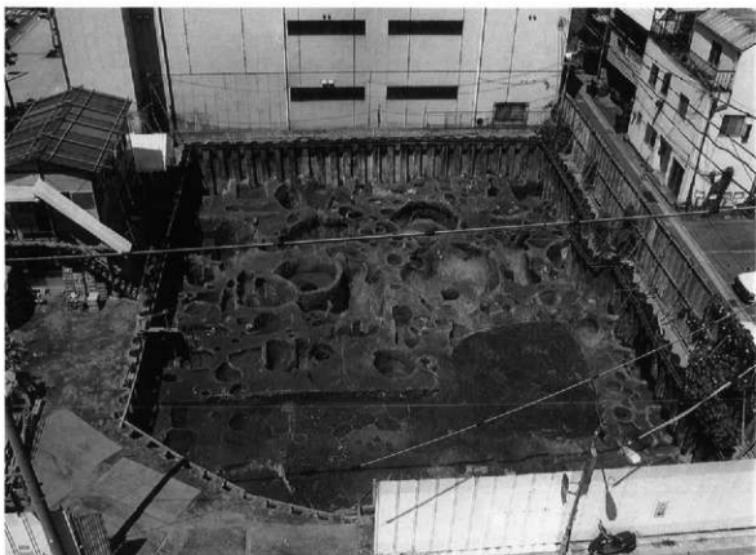
▲ (1) SE140 出土状況（西から） ▼ (2) SE180 出土状況（西から）





▲ (1) SE181 出土状況（東から）

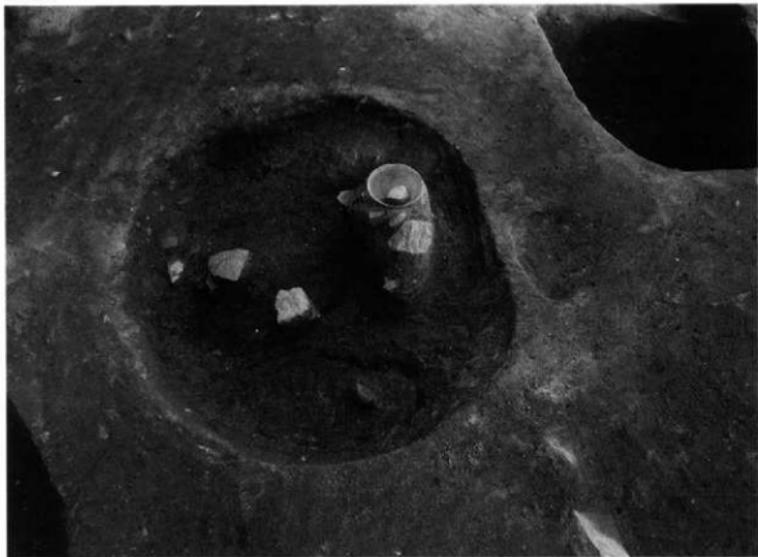
▼ (2) 第II面造構出土状況全景（南から）





▲ (1) SK203 出土状況（東から） ▼ (2) SK203 磚堆積状況（東から）



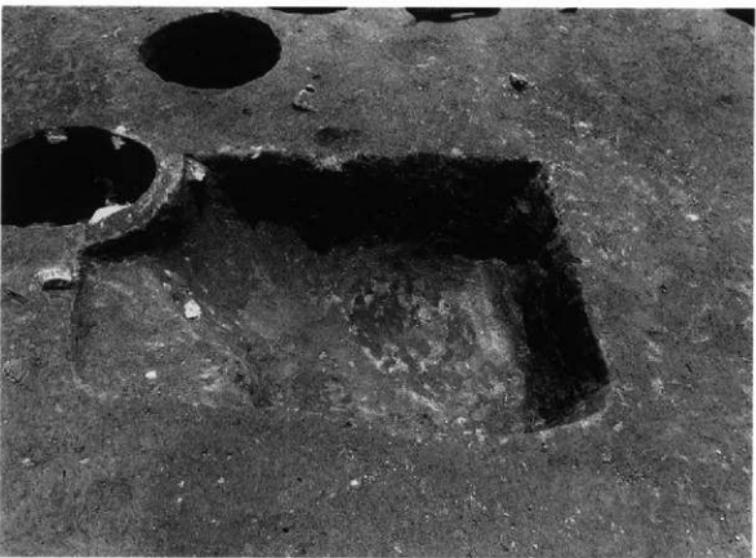


▲ (1) SK204 出土状況（西から） ▼ (2) SK210 出土状況（北から）





▲ (1) SK212 出土状況（北から） ▼ (2) SK214 出土状況（東から）





▲ (1) SK221 出土状況（西から）

▼ (2) SK222 出土状況（南から）





▲ (1) SK250 無頸壺出土状況（南から） ▼ (2) SK229 出土状況（西から）





▲ (1) SK232 出土状況（南から） ▼ (2) SK239～242・244出土状況（南から）





▲ (1) SK245・246 出土状況（南から） ▼ (2) SK249 出土状況（北から）





▲ (1) SK252 出土状況（北から）

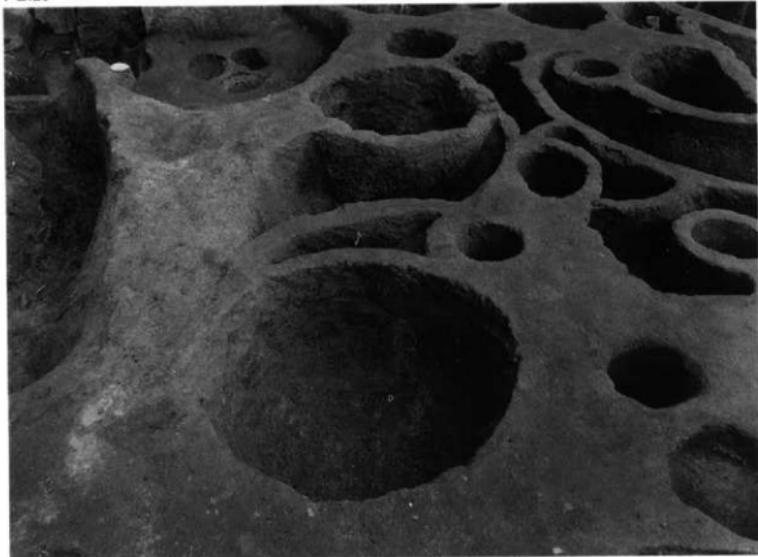
▼ (2) SK252 積堆積状況（北から）





▲ (1) SK253 出土状況（東から） ▼ (2) SK260 出土状況（西から）





▲ (1) SK266 出土状況（西から）

▼ (2) SK272 出土状況（北から）





▲ (1) SK277・278 出土状況（西から）

▼ (2) SK279 出土状況（南から）





▲ (1) SK285・286 出土状況（西から） ▼ (2) SK292 出土状況（西から）





▲ (1) SK295 出土状況（南から） ▼ (2) SK304 出土状況（東から）





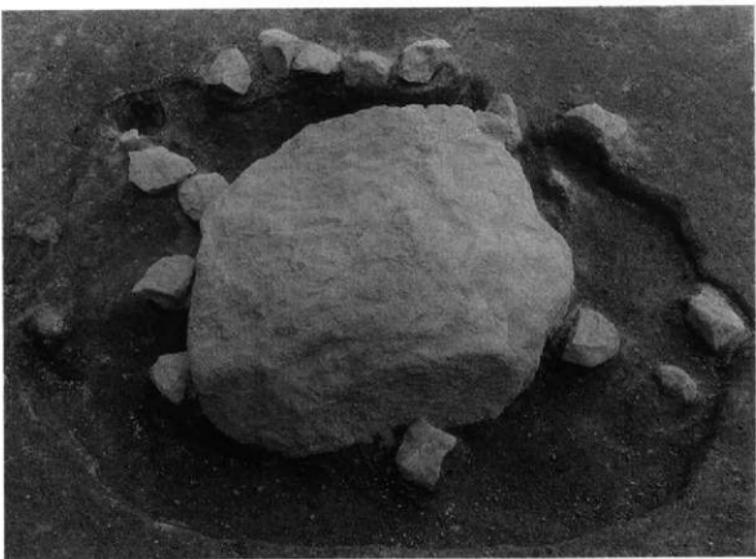
▲ (1) SK300・323・324 出土状況（北から） ▼ (2) SK326 出土状況（北から）





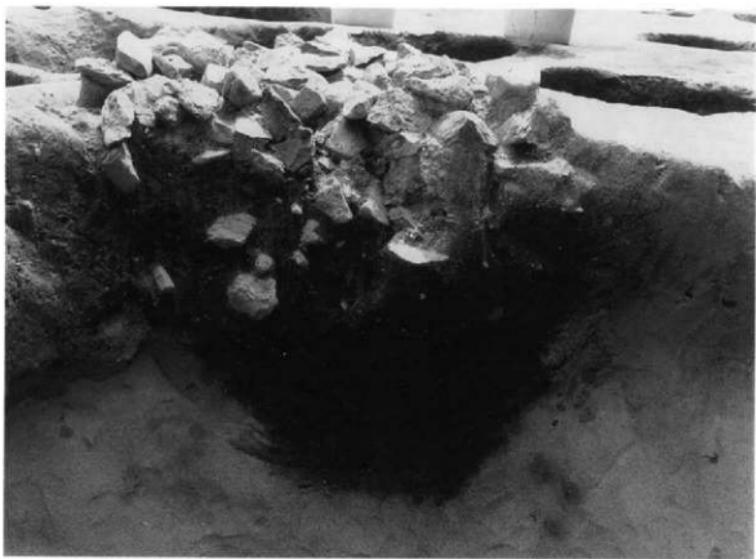
▲ (1) SK332 出土状況（東から）

▼ (2) SX227 出土状況（西から）





▲ (1) SX318 出土状況（南から） ▼ (2) SX318 積堆積状況（北から）





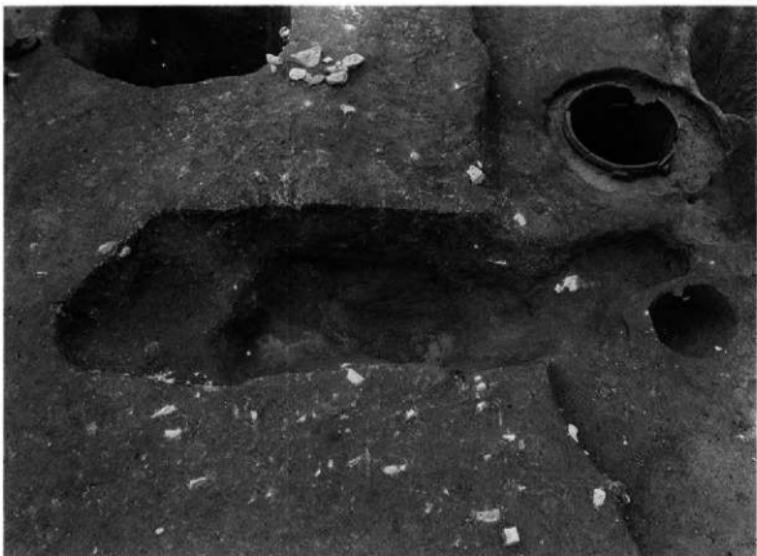
▲ (1) SX228 出土状況（西から） ▼ (2) 1号人骨（土壤墓）出土状況（西から）





▲ (1) SE201 出土状況（北から） ▼ (2) SE225 出土状況（西から）





▲ (1) SD209 出土状況（北から） ▼ (2) SE226 出土状況（北から）



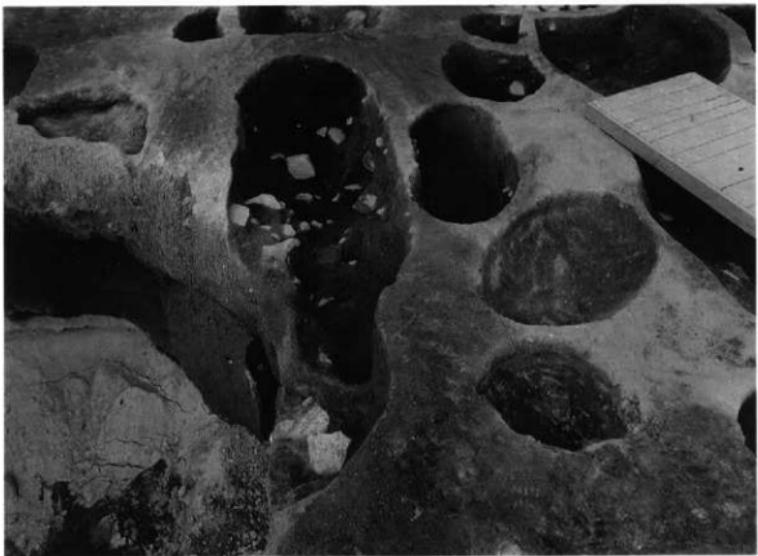


▲ (1) SE113・154・325 出土状況（南から） ▼ (2) SD319 出土状況（東から）





▲ (1) SD320 出土状況（東から） ▼ (2) SD237 出土状況（南から）





第Ⅲ面遺構出土状況全景（北から）



▲ (1) 第Ⅲ面A・B-5・6区遺構出土状況全景（西から） ▼ (2) SE402 出土状況（南から）





▲ (1) SK403 出土状況（東から） ▼ (2) SK404 出土状況（北から）





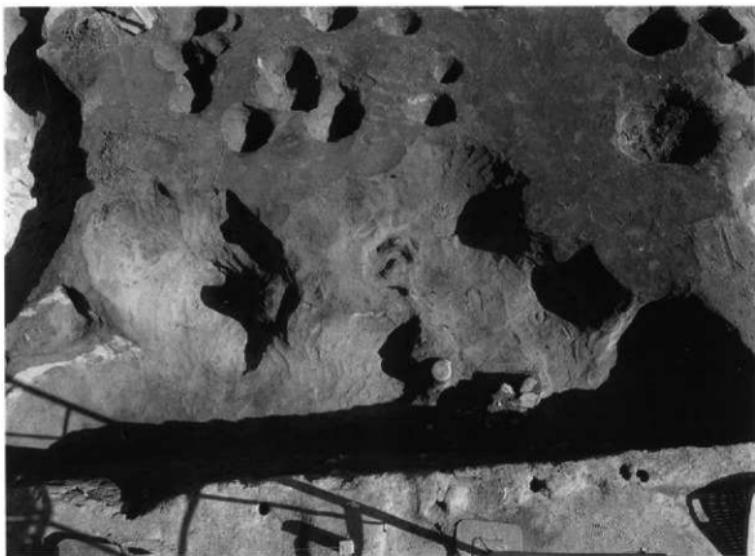
▲ (1) SK405・527 出土状況（西から） ▼ (2) SK409 出土状況（西から）





▲ (1) SK410 出土状況（南から）

▼ (2) SK413 出土状況（北から）





▲ (1) SK414・415 出土状況（北から） ▼ (2) SK416 出土状況（東から）





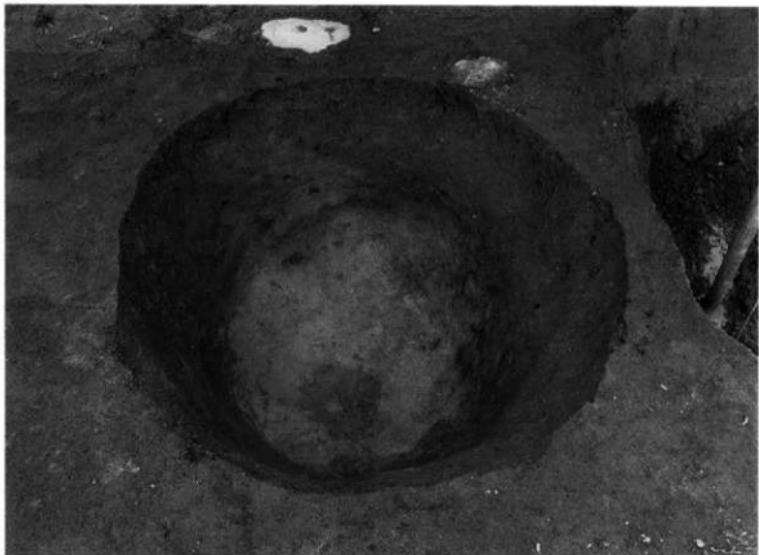
▲ (1) SK435 出土状況（北から） ▼ (2) SK439 出土状況（西から）





▲ (1) SK442 出土状況（南から） ▼ (2) SK452 出土状況（東から）





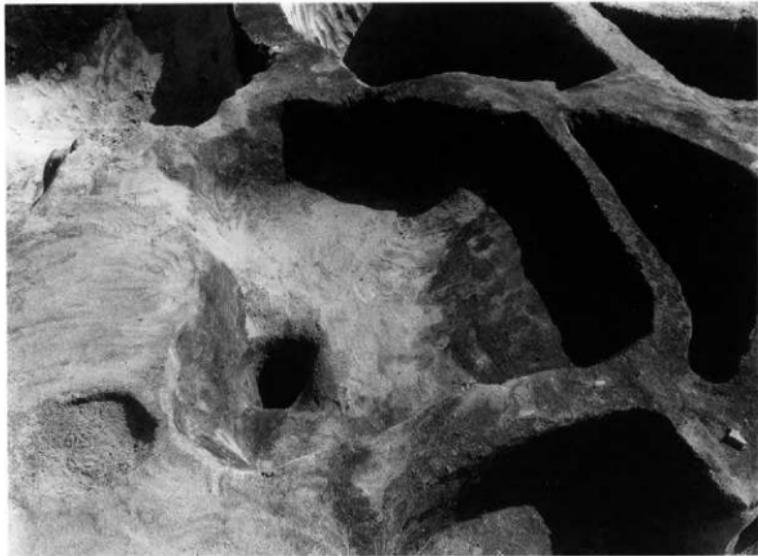
▲ (1) SK467 出土状況（東から） ▼ (2) SK473 出土状況（南から）





▲ (1) SK475 出土状況（北から） ▼ (2) SK478 出土状況（南から）





▲ (1) SK486 出土状況（北から）

▼ (2) SK454・492 出土状況（南から）





▲ (1) SK510 出土状況（北から） ▼ (2) SK530 出土状況（北から）





▲ (1) SC501 出土状況（北から）

▼ (2) SC501 遺物出土状況（北から）

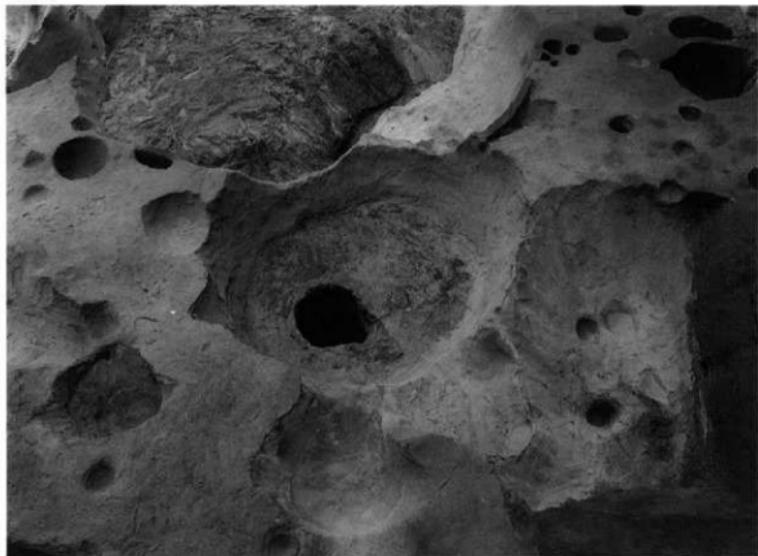




▲ SE432・433 出土状況（西から）

▼ (2) SE138・447 出土状況（東から）





▲ (1) SE493 出土状況（東から）

▼ (2) SE500 出土状況（北から）





▲ (1) SD430 出土状況（西から） ▼ (2) SD430 出土状況（北から）





▲ (1) 2号人骨出土状況（南から）

▼ (2) 調査区から聖福寺を望む（西から）

現在の町割と寺の建物

の輪線がズレている



博多 53  
—博多遺跡群第71次調査報告—

1996年（平成8年）3月29日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区大神一丁目8番1号  
印 刷 セントラル印刷株式会社  
福岡市中央区人宮一丁目5番13号